

令和4年度

NIE実践報告書

Newspaper in Education

第34号

教育に新聞を

宮城県NIE委員会

宮城県N I E委員会実践報告書

<第34号>

==== 目 次 =====

I あいさつ

宮城県N I E委員会	会 長	三田村 素 志	1
宮城県N I E推進委員会	委員長	大 倉 秀 之	2

II 寄稿

宮城県N I E委員会	副会長	安 野 賢 吾	3
-------------	-----	---------	---

III 宮城県NIE研究大会の報告

(1) 日程と内容	4
(2) 研究大会報告（オンライン開催）	5
・開会行事	
・児童・生徒による意見交換会	
・講評	



(女川町立女川小学校)



(仙台市立生出小学校)

IV 実践指定校の実践報告

(1) 仙台市立生出小学校（1年目）	15
(2) 女川町立女川小学校（1年目）	17
(3) 塩竈市立第二小学校（1年目）	19
(4) 石巻市立大谷地小学校（1年目）	21
(5) 仙台市立大沢小学校（2年目）	25
(6) 東松島市立矢本東小学校（2年目）	29
(7) 仙台市立東仙台小学校（3年目）	33
(8) 宮城学院中学校（1年目）	37
(9) 栗原市立栗原西中学校（2年目）	39
(10) 利府町立利府西中学校（2年目）	43
(11) 宮城県一迫商業高等学校（1年目）	47
(12) 尚綱学院高等学校（1年目）	49
(13) 宮城県仙台第三高等学校（2年目）	51



(石巻市立大谷地小学校)

V	第27回全国大会宮崎大会参加報告	55
VI	報告	
	(1) 高等学校部会報告 高校部会長 鈴木 理恵	65
	(2) アドバイザー部会報告 アドバイザー部会長 大槻 欣史	66
	(3) 地区研修会報告 宮城県一迫商業高等学校開催	67
VII	研究組織	
	(1) 宮城県NIE委員会会則	68
	(2) 宮城県NIE推進委員会会則	69
	(3) 宮城県NIE委員会及び宮城県NIE推進委員会の構成	70
	(4) 宮城県NIE推進委員会名簿	71
VIII	宮城県NIEの歩み	72
IX	編集後記	76

I あいさつ



互いから学び合う研究大会

宮城県NIE委員会

会長 三田村 素志
(岩沼市立岩沼中学校長)

令和4年度もコロナ禍が終息しない中での1年になりましたが、県内各校からNIE活動の実践報告が寄せられ、このように実践報告書が刊行できますことに、心から感謝を申し上げます。

また、今年度の県NIE研究大会も、昨年同様オンライン形式での開催になりました。子供たちの学びを止めないために必要なことでしたが、学校現場に整備された1人1台の学習端末と高速通信ネットワークは、授業をはじめ学校生活を大きく変容させました。今では、学校内で有効なツールとして日常的に様々な形で活用されており、オンライン形式での研究大会開催も、もはや特別なことではなくなっているような感覚でした。

今年も、新型コロナウイルス感染症関連の報道やロシアによるウクライナ侵攻、英国のエリザベス女王の葬儀、日本代表の活躍で大いに盛り上がったサッカーワールドカップに関するものなど、世界中から報道される大きなニュースがたくさんありました。政治、経済、文化やスポーツ、また最新の事件・事故など、あらゆる分野が網羅されている新聞からの情報は、子供たちと社会との接点となるものです。

NIEの学びは、その中の自分にとって必要な、又は興味を持った情報(記事)から分かったことや新たに気付いたりすることで、自分の考えが変わったり、深まったりすることによって、より質の高い判断ができるようになることだと思います。そして、この学びの経験により膨大な情報が行き交うインターネット社会といわれるこれからの時代に求められる、正しい情報を取捨選択し読み解く、情報活用力が身に付いていくものと思います。

さて、今年度の宮城県NIE研究大会は、県内8校の小・中学校及び高等学校の児童生徒の

皆さんにオンラインで各校から参加をしていただきました。一堂に会するリアルな交流はできませんでしたが、お互いの表情や声を確かめ合うことは十分できたと思います。

第2分科会では、栗原西中学校、女川小学校、大谷地小学校、尚綱学院高等学校の4校の発表を聞くことができました。尚綱学院中村君の小学生を包み込むような優しい口調での司会で、とてもよい雰囲気で行われたことが印象的です。小学校では、新聞を使ったゲーム、エントランスへの新聞コーナー設置、新聞スクラップから新聞づくりへと、新聞との出会いから発達段階に沿った様々な活動が展開されていきます。中学生になると記事から自分たちの知識を深めたり高めたりしていく活動になり、高校生は自分たちの考えを堂々と主張しています。その事象への自分の立場を決めて、考えを持ち、他者に伝えることができていると感じました。

参加8校の発表後、第1分科会の東仙台小学校、矢本東小学校、塩竈第二小学校、利府西中学校の実践については、仙台市立館小学校遠藤浩志校長先生、第2分科会では北仙台中学校堀部登美子校長先生から講評をいただき、各校の実践のよさを共有して研究大会を終えることができました。県内各地域や異校種間での貴重な交流の機会であり、互いから学び合える有意義な機会であることが確認できました。開催に関わった関係各位に改めて御礼申し上げます。

結びに、日頃から活動に取り組んでいらっしゃる各学校の先生方と児童生徒の皆さん、NIE推進委員会の皆様、関係各位のご協力に御礼を申し上げますとともに、本県のNIEの更なる充実と発展を期待いたしまして、挨拶とさせていただきます。



実践活動への御礼とNIE活動の発展を願って

宮城県NIE推進委員会

委員長 大倉 秀之

(仙台市立生出中学校長)

宮城県NIE委員会会則第2条に「NIEは新聞を生きた教材として活用し、文章作成をはじめ、社会問題への理解など教育内容を豊かにするとともに、情報化社会における情報の処理、活用能力を高めて、幅広い人間形成に役立てることを目的とする」とあります。

そして推進委員会は、この目的を達成するために「①教科及び領域等における、新聞を教材として活用する実践の研究」「②児童・生徒の現代社会に対応する情報活用能力の育成」を行うとあります。

私自身、NIEという言葉を知りながらもこれまでは、上記のような内容はまだまだ認識不足でした。ただ、新聞の活用については社会科教諭ということもあり、授業で新聞を活用してきました。新聞記事（歴史的発見や地域の話題、裁判の様子、世界の動きや政治・経済の動きなど）をOHPシートにコピーして提示してみたり、パワーポイントのスライドに取り込んでみたり、コラムを朝の会でみんなで読んでみたり…など。

今年度は、2学期から1階廊下の掲示板に学校だよりや生徒へのお知らせの掲示物とともに、本校で購読している新聞2紙の4コマ漫画と私がその日に選んだ一つの新聞記事（社会・芸能・スポーツ・地元話題から）を掲示しています。4コマ漫画から伝わるほのぼのとした思いやりや、ユーモアに何かを感じてくれたり、新聞記事に少しでも関心を持ってくれたりしたらと思います。始めてみました。少しずつ、興味を持って見ている生徒がいるものの、今後の取り組みについては、県NIE研究大会で発表された実践校の事例を参考に考えてみたいと思います。

さて、GIGAスクール構想の進展のもと、1人1台端末の環境整備が進み、それに伴う情報通信技術（ICT）の活用が行われています。各教科の授業では、全生徒が端末を使って調べたり、班ごとに意見をまとめて提示・発表し合ったりして「主体的・対話的で深い学び」が展開され

つつあります。私が研究会長を務める「総合的な学習の時間」においては「探究的な見方・考え方を働かせる」ということを目標の冒頭に置き、探究的な学習の重要性を鑑み、その学習の過程を総合的な学習の時間の本質と捉え、中心に据えられています。この探究的な学習の一連の学習過程とNIE活動の取り組みはリンクしていると思います。

日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる「なぜ？どうして？」といった疑問や関心に基づき課題を見つけ、「もっと知りたい！どうしたらいい？みんなで考えてみよう！」の過程で情報収集、分析、判断、意見交換を行い、「意見や考えを伝えよう！」で表現・発信する。この学習過程においてまさに新聞の活用が有用であると考えます。その実践事例こそがNIE研究大会で発表された実践指定校の特色ある活動です。「NIEコーナーの設置」や「授業での新聞活用」、「コラムの書き取りトレーニング」、「地域の自主研修の活動報告の作成」、「地域の魅力発信」、「SDGsと関連付けた取り組み」、「記事を読んで自分の考えを書く」など各校とも児童生徒のアイデアで工夫された取り組みが見られ、大いにNIE活動の広がりと可能性を感じる発表でした。また、小・中・高と校種を超えた実践発表と質疑応答は、お互いの取り組みの成果を認め合い、更なる刺激を受けた場になったことと思います。今後も活動を振り返りながら、充実発展させ、発信することにより、本県のNIE活動が広がっていくものと考えています。

最後になりますが、今年度の本県NIE活動が充実したのも日頃からNIE活動を実践されている各学校の先生方や児童生徒の皆さん、推進委員の皆様、関係各位のご尽力によるものです。これまでの御支援と御協力に感謝申し上げますとともに、更なるNIE活動の発展を祈念して、挨拶とさせていただきます。

Ⅱ 寄稿



新聞と学校はパートナー

宮城県N I E委員会

副会長 安野賢吾

(河北新報社防災・教育室長)

昨年3月まで編集に直接携わっていた河北新報のこども新聞「週刊かほピョンプレス」で、取り組んでみたかった「幻の企画」があります。横断歩道での車の一時停止を呼びかける運動です。

ご存じの通り、信号機のない横断歩道で歩行者がいる場合、車には一時停止する義務があります。ところが、日本自動車連盟（J A F）が実施した2020年の調査では、宮城県の一時的停止率はわずか5.7%。全国の都道府県で最低、ワーストとなってしまいました。これでは通学路の安全は保てません。

どうすれば、ドライバーは止まってくれるのか。どうすれば「止まるのが当たり前」という習慣が根付くのか。そう考えて思い付いたのが「学校や子どもたちの力を借りる」ことでした。

新聞社、新聞記者が子どもたちと一緒に具体的な方策を考える。例えば、地域に「止まってね」と訴えるチラシを配る。さらに横断歩道で実際に止まったドライバーにお辞儀をする運動を実践する。そうした取り組みをこども新聞で紹介し、運動の輪を県内各地に広げていく。そうすれば、停止率がぐんぐん向上するのではないか。こう妄想していました。

残念ながら、いえ、幸いなことに、翌21年の調査でなぜか、宮城県の一時的停止率は51.4%に急上昇。全国4位に跳ね上がりました。企画は妄想のまま、お蔵入りとなりましたが、学校や子どもたちとは連携できるのではないかと、今でもそう思っています。

一つのテーマや問題について継続して追求していく報道を「キャンペーン報道」と言います。河北新報社もこれまで、スパイクタイヤの追放や農薬の削減を訴えるキャンペーン報道などを

展開しています。

キャンペーン報道というと「敷居が高い」と思われそうですが、幻の企画「一時停止運動」も立派な地域キャンペーンになります。私がかつて関わった農薬や化学肥料に頼らない「環境保全米」の栽培を広めるキャンペーンでは、当時の上沼高校（現在の登米総合産業高校）も一緒に栽培に挑戦してくれました。「田んぼの生き物調査」という形で県内の子どもたちも参加し、環境保全米を広げる活動の一翼を担ってくれました。そう、キャンペーン報道、特に地域キャンペーンにとって、地域の子供たちは大切な担い手になり得るのです。

教育現場では「探究学習」が盛んに行われるようになりました。自分たちが暮らす地域にどんな課題があるのか、どんな解決策があるのか、子どもたちが考える機会が増えているのではないのでしょうか。

さらに一歩踏み出してみてもどうでしょうか。課題を見つけたことを、新聞を通じて地域に紹介し、解決策を実践に移し、新聞を通じて同様の課題を抱える他の地域に広げていく。子どもたちの懸命な姿は共感と呼び、地域や社会を変えていく原動力になるように思えてなりません。

N I Eというと、新聞をいかに活用するかに目を奪われがちですが、新聞を教材として使うだけでは、ちょっともったいないように思います。新聞と一緒に活動できる「学校や子どもたちのパートナー」と考えてみてはどうでしょう。

新聞と一緒に地域課題などを考え、解決策を探り、行動に移すN I E実践校がどんどん増え、子どもたちが成長し、地域が変わっていくことを期待しています。

Ⅲ 宮城県 NIE 研究大会の報告

(1) 日程と内容

令和4年度 宮城県 NIE 研究大会「児童・生徒による意見交換会」

- 1 趣 旨 校種を超えて、小・中・高の各校の取組を児童・生徒が紹介し合い、意見交換を通して、NIE 活動に主体的に取り組もうとする児童・生徒の育成を図る。
- 2 主 催 宮城県 NIE 委員会 宮城県 NIE 推進委員会
- 3 後 援 宮城県教育委員会 仙台市教育委員会
- 4 大会名 児童・生徒による意見交換会
- 5 日 時 令和4年12月13日(火) 15:40～16:50
- 6 会 場 河北新報社別館4階会議室本部 参加8校、関係者とオンラインでつなぐ
- 7 参加校 仙台市立東仙台小学校 塩竈市立第二小学校 石巻市立大谷地小学校
東松島市立矢本東小学校 女川町立女川小学校 利府町立利府西中学校
栗原市立栗原西中学校 尚綱学院高等学校 計8校
*本部(河北新報社 別館4階会議室)

8 研究大会の内容

- 第1部 開会行事 【15:40～15:50】 司会：仙台二華高校教諭 大槻欣史アドバイザー
開会の挨拶① 県NIE委員会会長 宮城県中学校長会長
岩沼市立岩沼中学校長 三田村 素志
開会の挨拶② 県NIE推進委員長 宮城県連合中学校総合的な学習研究協議会長
仙台市立生出中学校長 大倉 秀之

第2部 児童・生徒による意見交流会 【15:50～16:40】 2分科会に分かれて実施 <司会・進行>

第1分科会 利府西中学校生徒(進行補助:福室市民センター・児童館長 中辻正樹アドバイザー)

第2分科会 尚綱学院高校生徒(進行補助:仙台城南高校教諭 鈴木理恵アドバイザー)

① 児童・生徒による実践発表

② 質疑応答・感想発表 児童・生徒全員

第3部 講評・閉会 【16:40～16:50】 司会：仙台二華高校教諭 大槻欣史アドバイザー

第1分科会講評 宮城県NIE推進委員会副委員長
仙台市立館小学校長 遠藤 浩志

第2分科会講評 宮城県NIE推進委員会副委員長
仙台市立北仙台中学校長 堀部 登美子



Ⅲ（２）研究大会報告

令和4年度 宮城県 NIE 研究大会 児童・生徒による意見交換会（オンライン）

1 開会行事

<NIE 委員会 三田村 素志会長>

本日、このように令和4年度宮城県NIE研究大会が開催できますことを関係する皆様と共に喜びたいと思います。本日の開催に向けて計画そして準備をしていただきましたすべての方々に、心から感謝と御礼を申し上げます。

今年度もオンライン形式での開催になりました。コロナ禍による子供たちの学びを止めないためには必要なことでしたが、GIGAスクール構想もあり、1人1台の学習端末と高速通信ネットワークが一気に整備されました。今では、学校内で有効な通信ツールとして日常的に様々な形で活用されていますので、この形式での開催も、もはや特別なことではなくなっているような気がします。参加する皆さんが、この研究大会の意義やねらいを共有して学び合うことで、きっと有意義な場になるものと大いに期待しています。

さて、新聞から学ぶNIE活動の学びは、自分にとって必要で興味を持った情報（記事）から、理解をしたり新たに気付いたりすることで、自分の考えが変わったり、深まったりすること。そのことによって、より質の高い判断ができるようになることだと思います。

本日は、県内8校の小・中学校及び高等学校の児童・生徒の皆さんの実践の紹介やそこから得られた学びの発表、そして意見交換が行われます。各校でどのような学びが行われたのか、発表を聴くことができるのが楽しみです。この研究会は、各校のNIE活動のさらなる充実や価値を再認識できる貴重な機会になるものと思います。

結びとなりますが、日頃からNIEに取り組んでいらっしゃる各学校の児童生徒の皆さんと先生方、本日の研究大会の開催にご尽力賜りました

NIE推進委員会の皆様、関係各位に御礼を申し上げます、開会の挨拶とさせていただきます。

<NIE 推進委員会 大倉 秀之委員長>

本来であれば、小学生の皆さんから高校生の皆さんが一堂に会し、それぞれの取組について発表し合い学びを深めたいところですが、コロナウイルスの影響で、今年度もオンラインでの開催ということになりました。モニターを通しての発表であれ開催できるということに感謝したいと思います。

さて、コロナウイルスは一時終息の気配を見受けられたもののウイルスは変異を繰り返しながら感染力を強めており、配慮が必要な日々が続いています。加えて、ウクライナ情勢や弾道ミサイルへの警戒など不安定な社会情勢が見受けられます。このような予測困難な時代に向き合いながら、置かれた状況の中で最善を尽くすことが求められます。そのためにも、自ら学ぶことで、自分の人生を切り開く力を身に付けていかななくてはなりません。これは8月に宮城県で開催されたNIE全国大会のスローガンに込められた思いでもあります。

また、情報をあらゆる手段で安易に手に入れられる時代、発信できるこの時代に真偽を見定め、判断するためにGIGA時代との共有を図りながら、新聞の持つ有用性を再認識することが重要かと思われます。

本日の校種を超えた実践発表の中で、「その視点面白いね」とか、「こんなアプローチの仕方があるんだ」などの新しい刺激を受けたり、発見があったりすることを期待しています。最後に、本大会の開催に際し、準備やご指導をいただいた先生方、児童生徒の皆さん、関係各委員に御礼を申し上げます、開会の挨拶といたします。

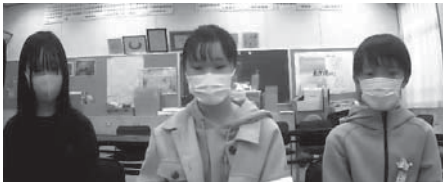


2 児童・生徒による意見交換会

(1)第1分科会(司会 利府西中 阿部廉さん)
※各校の発表

<仙台市立東仙台小学校 児童3名>

東仙台小学校の主な取組について「新聞に毎日触れる環境を」と題しまして実践報告をしていきたいと思ひます。



指定校3年目の今年は、新聞に親しむための掲示の工夫、授業で

の活用、データベースの利用を行いました。

6年生での実践について話します。「国語力向上プロジェクト」として朝活動や国語の授業の始めに新聞の活用をしています。取組の内容は、①コラム記事を音読 ②記事の内容を要約する ③記事を読んだ感想や考えたことをまとめる の3つです。制限時間10分で取り組み、回を重ねる毎に要約ができるようになってきています。

理科の「電気と私たちの暮らし」の単元で、始めに現在の課題の新聞記事を読みました。実験結果をふまえて、データベースで私たちの課題を検索し、どのようにしたらよいか考えることができました。

次に、5年生での活動を紹介します。国語の「新聞記事を読み比べよう」の単元で阿部校長先生が授業をしてくれました。その日の新聞が一人に1部配られました。新聞を初めて手にする友達もいました。

新聞には「号」があること、その日の朝刊と夕刊は号が同じであること、緊急の時は号外が出ることを知りました。創刊号・第1号のレプリカも見せてもらいました。

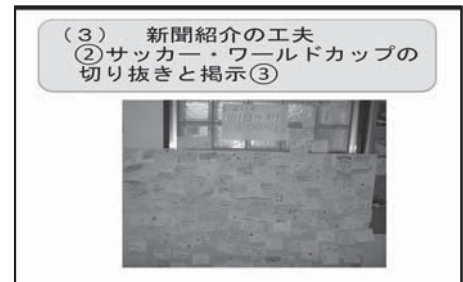
新聞には「版」があること、オリンピックやワールドカップなど特別な出来事が深夜に起きた時は、配達地域によって版が違うことを知りました。「16版C」は、かなりレアなことも知りました。新聞記事の切り抜きを、chromebookを使って行いました。本当の新聞を学んだ上で、教科書の読み取りをしました。

教材では「書き手の意図を読み取ろう」というめあてですが、新聞では書き手の意図の前に読み手のニーズがあることが分かりました。

全校のみんなへの新聞掲示や紹介の工夫を紹介します。一つ目は新聞コーナーの設置です。図書

室の近くに新聞を設置し、自由に読むことができるコーナーを作りました。新聞は2か月ごとにラインナップを変え、英字新聞や経済についての新聞、子ども新聞など様々な種類の新聞に触れられるようにしました。

二つ目はサッカーワールドカップの切り抜きと掲示です。選手や出場している国に関心を持ってもらうため、校長室前に切り抜きを貼り出しました。「応援する選手にシールを貼ろう」では、久保選手が人気でした。こども新聞に出場する国の紹介の記事がありました。32か国すべてがあればいいと思ひました。コストリカに負けた時は、スペイン戦に向けて、みんなでメッセージを書きました。願いが通じて、スペインに逆転勝ちしたときは、「ブラボー！」みんなで喜びました。



このように、私たちはいろいろな場面で新聞に親しんできました。新聞に興味を持った人もたくさんいました。これからも、新聞を読み続けたいと思ひます。

<東松島市立矢本東小学校 児童7名>

私たちは、「東松島市の良さを発信しよう」をテーマに東松島市に修学旅行生を招くため、東松島市の魅力について学習しています。

東松島市の現状についてです。東松島市は、会津若松市とは違うところがありますが、素敵な魅力がたくさんあります。

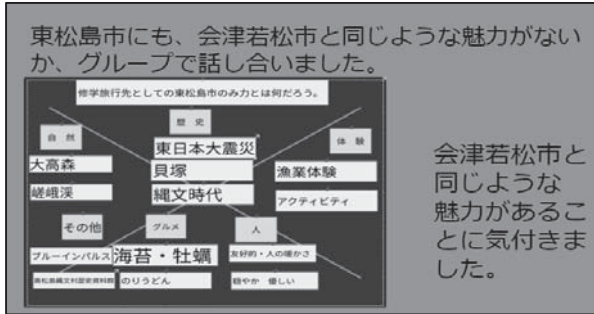


しかし、会津若松市に比べると修学旅行生の来校数が明らかに少ないです。会津若松市は、年間1213校の学校が訪れているのに、東松島市はわずか5校でした。

そこで、私たちは修学旅行に行った会津若松市の魅力を再確認し、東松島市にも似たような魅力がないか調べ、「東松島市に修学旅行生を招くプラン」を考えました。まず、会津若松市の魅力をロイロノートを使って新聞にまとめました。班ごと

に会津若松市の魅力をテーマごとに分けました。自然や歴史、体験活動などのテーマに分けることができました。新聞記事からも、会津若松市の魅力について考えました。

東松島市にも、会津若松市と同じような魅力がないかグループで話し合い、会津若松市と同じよ



うな魅力が東松島市にあることに気付きました。宮城県に訪れている修学旅行生は、何を目的に訪れているか新聞を使って調べました。観光目的だけでなく、東日本大震災のことを学習したり、体験活動もしたりしていることが分かりました。東松島市に修学旅行生を招くために、私が考えた修学旅行プランです。東松島市で学んだり楽しめたりするプランを考えました。東松島市でできる体験活動や施設見学なども入れてみました。

この学習を通して、東松島市の魅力を再発見することができました。これからも、県外の修学旅行生がもっと来てくれるように、東松島市の魅力をPRしていきます。

<塩竈市立第二小学校 児童4名>

塩竈二小のNIEの取組は主に四つあります。一つ目は、新聞コーナーの設置、二つ目はお薦め記事の掲示、三つ目はコラム読み、四つ目は出前授業です。

まず、新聞コーナーの設置です。「河北新報」「産経新聞」「日本経済新聞」「朝日小学生新聞」「毎日小学生新聞」「ジャパンニュース」の6つの新聞を取っています。現在は、学習室の一部のスペースを「新聞コーナー」として使っています。真ん中の棚にはその日の新聞、横の机には1週間分の新聞を置き、だれでも自由に読むことができます。常に入れ替わっているので、その日の新しい情報を得ることができます。中には毎朝登校後すぐにこの教室にきて読んでいる人もいます。今は5・6年生のスペースになっているので、他の学年も新聞に親しめるように改善していきたいと考えています。

二つ目はお薦め記事の掲示です。NIEの掲示板

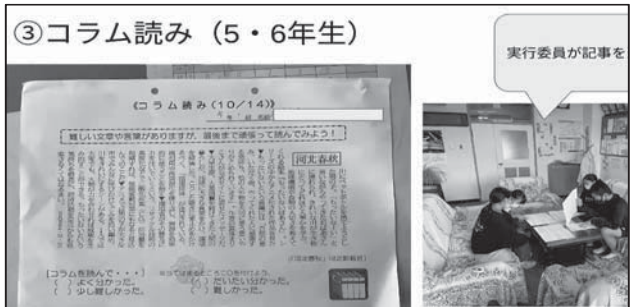
があり、仙台育英高校の甲子園優勝や塩竈二小の学校紹介など学校や地域に関する新聞記事を掲示し、普段新聞を読まない人にも興味を持ってもらえるように工夫しています。ここは給食の下膳や体育館への移動で全学年が通るので、これからもいろいろな記事を紹介していきたいと思います。

三つ目はコラム読みです。コラム読みは5・6年生が毎週末の課題として取り組んでいるものです。河北春秋の記事を読んでどれくらい分かったかを振り返ります。この記事は、私たちNIE実行委員が相談して選んでいます。難しい文章や言葉がありますが、最後まで頑張って読んでいます。何回も続けることで長い文章を読むことに慣れてきたという人が増えました。今後も続けていきたい活動です。

四つ目は出前授業です。5月と7月に河北新報社の末永さんに新聞についての出前授業をしていただき、5年生は「新聞の読み方」について学びました。その後の国語の学習では、書き手の意図を意識して新聞記事を読み比べることができました。6年生は「見出しの工夫」について学びました。教えていただいた見出しの付け方を生かして1年生に向けて防災ポスターを製作しました。記者の話聞き、新聞から読み方や書き方の工夫を学ぶことができました。

最後に実行委員から一言ずつお話ししたいと思います。

○私はコラム読みをして、今までより長い文章を読めるようになり、難しい言葉の意味が分かるようになりました。



○実行委員になって選ぶのが大変だったけど楽しかったです。

○私はいろんな人に新聞を見てもらうために、ニュースで見た最近の出来事などをコラム読みに出しています。

○この活動でもっと新聞を読む人が増えたらいいなと思います。

○出前授業や新聞を読んで見出しや、文章の書き方が分かりました。

＜利府町立利府西中学校 生徒 1名＞

NIEの活動が2年目を迎えるので、前年度の取組の課題を見直し、よりよい活動にしていくことを目標に実践を行いました。

一つ目の取組は、新聞閲覧コーナーの設置です。前年度は、新聞閲覧コーナーを設置し、新聞に親しみをもってもらうことから始めました。しかし、ただ置いておくだけでは実際に触れようとする生徒は少なく、興味のある生徒しか活用できませんでした。今年は、先生や図書室の支援員に協力してもらい、新聞の記事をいくつか掲示したものを図書室に掲示し、生徒はそれを見て気になった記事にシールを貼るという「新聞記事の人気投票」という企画を実施しました。



これは、投稿型SNSのインスタグラム「いいね」から着想を得たもので、自分の気になった記事にシールを貼るという気軽さや楽しく新聞を読むという習慣作りを目的に企画しました。毎日更新することで、徐々に興味をもつ生徒が多くなり、シールの数も増えていきました。またシールの数の変化を通して、西中

での関心を寄せる話題が何かなども分かり、大変有意義な活動となりました。

二つ目の取組は、授業での積極的な活用です。新聞の内容や構成の仕方を学ぶことによってさまざまな学習活動に役立てました。

西中の1年生が毎年行う行事「利府町内の自主研修」その活動報告を新聞形式でまとめました。また、どのようにまとめたらよいか、どんなことをまとめればよいかを、実際に河北新報の方を招き、講義していただきました。実際にまとめたものがこちらです。写真の撮り方や見出しの重要性



を教えていただいたことで質の高いまとめ学習を行うことができました。

三つ目の取組です。利府町では、町内の小中高や特別支援の学校が連携した取組を毎年行っており、通称ブラザーシップと呼んでい

ます。今年のブラザーシップのテーマは「SDGs（持続可能な開発目標）に関する取組」ということで、利府町では、SDGsにまつわる取組を各学校で考えています。

西中では、SDGsとNIEを関連付けさせる取組を行いました。前年度は、3年生が実社会でSDGsがど

のように実践されているかを新聞を使って調べ、まとめました。今年度は全学年が取り組めるように各専門委員会がSDGsを意識した活動を考え、考えた内容や取り組んだ内容を「西中SDGs新聞」と題して発行しました。まず生徒会執行部が、各専門委員長にSDGsの取組について考えてもらうように依頼します。次に専門委員長が1・2・3年生の意見を募り、集約。良かった意見を報告してもらいました。そして、集まった内容を執行部がまとめ「SDGs新聞」を作成し、発行する予定です。新聞を発行することで、西中全体でSDGsの意識を浸透させることができると思います。



この三つの内容が西中での取組です。2年間の活動を通して感じたことは、取組を継続していくことがよりよい活動につながるということです。今回、充実した取組ができたのも、前年度の課題があったからこそだと思います。新聞とは唯一無二のメディアであることやSDGsが私たちにとって避けて通れない問題であることなど、NIEの活動を通して「新聞が身近にあることの大切さやありがたみ」を身をもって感じました。時間をかけて行ってきた取組だからこそ、これで終わりにするのではなく、更なる活動につなげたいと思っています。

※質疑応答

矢本東小：利府西中学校に質問です。具体的にどんなSDGsの取組をしているのですか。

利府西中：各委員会です。挨拶運動をしたり、給食の残食を減らしたりする取組をしました。

矢本東小：塩竈二小に質問です。学習室のスペースの新聞掲示を下の学年にも読んでもらうために、どのように改善したいのですか。

塩竈二小：ワークスペースやみんなが通る廊下などに設置すれば、下学年もみんな読んでくれると思います。

利府西中：東仙台小に質問です、記事を読んでみてどのような感想を持ちましたか。

東仙台小：分からなかったことが分かるようになりました。

※感想発表

利府西中

小学生でも記事を読んでしっかりと分析をしたり、そこから得られることが何か見付けたりして

いて、中学校にも負けていないなと思いました。新聞というのはかなり独特というかインターネット上では得られないものがあると思うので、それをしっかり利用してNIEの活動にしています。これからも自分たちも負けないぐらい活用できるようにしていきたいと思っています。

塩竈二小

○今日の学習を通して、新聞の魅力を知ったり、



SDGsに取り組んだりしていることが分かりました。東仙台小はワ

ールドカップへの思いが強く伝わりました。矢本東小は修学旅行、修学旅行生が来てくれるようにすることを努力していました。

○東仙台小の国語や理科の授業で、新聞を読み、感想を考えたり、記事を要約したりしているところがいいなと思いました。

○矢本東小は、宮城は修学旅行生が少ないと考えて、そのために東松島市の魅力を考え作ったのが素敵だなと思いました。

矢本東小

○利府西中は、SDGsの取組を考えていると思いました。新聞コーナーやコラム読み、切り抜きを廊下に掲示していることが分かり、私たちの学校で取り組みたいと思いました。

○新聞に興味を持ってもらうために新聞コーナーを作る活動などに取り組んでいるのがよく分かりました。私たちの学校でも、新聞に興味を持ってもらえるように頑張りたいなと思いました。

○新聞は、ただ読むだけでなくいろいろな生かし方や使い方があるんだなと改めて思いました

○私はNIE活動で、SDGsや朝の時間に新聞を読む取組をしていきたいです。

東仙台小

○さらに新聞の魅力が分かりました。

○みなさんの話を聞き、新聞を読むことを継続するのが大事だと思いました。

○新聞についての取組がいろいろあることは分かりました。

中辻アドバイザー：利府西中の新聞を読ませてもらいました。利府城のことが書いてありました。大事なポイントがしっかり押さえられ、場所までたどり着くのがとても大変だったという感想もしっかり書かれていました。新聞はいろんな方面か

ら切り口があって、あちらこちらから書くことができますね。班ごとにいろんな新聞を作っていると思いますが、利府西さんのそのNIEへの取組っているのも、大変すばらしいなと思いました。

皆さんの住んでいる様々な市や町の自治体が紹介されている新聞記事があると思いますので、地域の魅力、発信というのも考えてみるといいかなと思いました。

(3)第2分科会(司会 尚綱学院高 中村公亮さん) ※各校の発表

<栗原市立栗原西中学校 生徒3名>

栗原西中では、昇降口にNIEコーナーを設けています。このコーナーでは、全国紙、地方紙の5紙の新聞を置き、ボードには新聞社それぞれの特徴などを貼っています。分かりやすい説明を書いたり新聞の並べ方を工夫したりすることで、全校生徒が気軽に新聞を読める環境を作っています。

週末課題では、河北新報コラムである河北春秋の書き取りトレーニングを行っています。河北春秋とは



時事問題や世の中の動向について記者が思ったことや

考えたことが短くまとめられているものです。この書き取りトレーニングでは、河北春秋を書き取った感想や自分の考えを書き、読み方や意味のわからない語句があれば、その語句を調べて書きます。わからないところを調べることによって、自分の考えをさらに深めることができます。この書き取りトレーニングは、まとめ方が良かった生徒数名のプリントを貼り出して、他の生徒が参考にできるようにしています。

また、最近では自分で気になる記事を見付け読み取り、感想や考察をまとめ自分たちの知識や見方を鍛える取組を行なっています。この取組は左側に自分が気になった記事を貼り、右側には自分で考えた見出しと共に読み取った感想や考察を書きます。さらにその下には、記事で気になった語句を調べたり、分かりやすく図でまとめたりします。このプリントは全校生徒分を学年ごととファイルにとじてコーナーに掲載しています。

栗原西中ではこれらの取組を行い、生徒全員が読解力、文章の書き取り力、自分の考えをまとめる力を身に付けられるようにしたいと考えています。

<女川町立女川小学校 児童4名>

この写真は私たちの学校と女川町を空から撮影したものです。私たちの学校のいいところや自慢は、先生や生徒はとても元気なところ。先生たちが優しいところ。校庭が人工芝のところ。建物が立派で私たちの学校にエレベーターがあることです。



これは女川町のパンフレットです。女川町のいいところや自慢は、女川町のみんなが気持ちのよい挨拶をしているところです。様々な伝統文化があることです、自然がいっぱいあるところです。食べ物がおいしいところで、特に私はサーモンとしらこが好きです。僕たちは、この1年間新聞についていろいろ勉強したり体験したりしました。その中から1人ずつお話しします。



僕は「花山新聞」を作ったことについて話します。花山のことを新聞にまとめました。ペンの色を見やすくし、文章をなるべく少なくして作りました。

私はむすび塾に参加して、防災マップを作ったことを話します。避難表示の看板のそばに行ってみると、子供には避難表示の看板が見えにくいことが分かりました。マップを作った時に消火栓がいっぱいあると思いました。

私は新聞記者の方に読み比べの授業をしてもらったことを話します。いろいろな国の文化を知ることができ、特に興味を持ったのはカタールです。新聞では、どこからその情報を手に入れているのかが気になりました。

私は、芳岡さんがモザンビークのことを書いた新聞記事の授業のことを話します。まずストリートチルドレンについてです。自分くらいの子供たちがとても苦しい生活をしていたということが分かりました。芳岡さんの新聞への寄稿を読んで、モザンビークの人たちはお金もなく服や食べ物も買えなくて大変だな、自分たちが助けてあげたい

などと思いました。

まとめとして、女川向学館の芳岡さんから一言お願いします。

芳岡さん：地域で教育支援をやっています。4人の発表を聞いて、1年間の活動を通して、新聞からたくさんのことを学んだことが分かります。防災のことだったり国際理解の話だったり、新聞にはたくさんいろんな学びの文章が詰まってるということを改めて実感できましたね。

これからも新聞をうまく活用して、自分たちの興味あることについてより深く学んでいけるとてもいいなあと思っています。

最後に新聞の学習の感想を1人ずつ発表します。○むすび塾のことで新聞を作りましたが、記事を



まとめることがとても難しかったので新聞記者はすごいと思いました。

○新聞は相手にわかりやすく伝える記事だから、それをわかりやすく伝える新聞記者の人がすごいと思いました。

○作った人が読む人に伝えるのは難しいのに、新聞社の人には伝えることができるのがすごいと思いました。

○私が知らないうちに、周りでいろいろなことが起きていることが分かりました。

<石巻市立大谷地小学校 児童5名>

今年度から始まったNIEの取組について紹介します。



大谷地小学校は、石巻市の河北地域にあります。学校の周辺は水田

で、学校の田んぼで米を育てる活動に全校で取り組んでいます。

SDGsの取組にも力を入れています。石巻市のSDGs推進室の方々を始め、いろいろな取組をされている方々が学校にいらして、体験活動を指導してくださいます。マイクロプラスチックの問題や環境問題について考え、洗剤の詰替え容器の回収

活動を始めて2年目になります。北上川のヨシという植物の繊維を活用して、すいた紙と学級園で育てた藍で染めた糸で作成したカレンダーを販売し、その売り上げは紛争で安心して学習できないアラブ地域の子供たちの支援となります。東日本大震災の時に支援していただいたことへの恩返しでもあります。

私たちの学校にはエントランスホールがあり、ベンチやテーブルがあります。読み聞かせや児童会のイベントをするスペースです。学校図書館のお薦めの本も置かれていますが、2学期が始まると新聞ラックが置かれていました。今まで読んだことのない新聞や、子ども新聞がありました。特に低学年のみなさんが、大人の真似をして新聞をめぐっていたのが印象的でした。

2学期には、朝の10分間を活用して「NIE・読書タイム」が始まりました。学年ごとに取り組む内容は変わります。取組から4か月過ぎた今では、自分で新聞を読んだり、スクラップ帳をつくらしたり、記事を書き写したり、または読書したりする活動内容を自分で選択するようになりました。

出前講座で、新聞の読み方や記事の書き方を学びました。国語科では、新聞を読み比べて読者への伝わり方の違いを考えました。

始業式では、校長先生が仙台育英高校野球部の活躍について、新聞記事を使って話してくださいました。新聞社によって取り上げ方が違って、河北新報の育英の記事はとても大きな面積で驚きました。

外国語のスクラップコーナーも始まりました。外国語指導員の先生が、授業で扱えなかった内容について新聞の記事を活用して紹介してくださいます。

3年生は、NIEタイムで社説の視写や要約にチャレンジしています。国語科で学習した内容を活用するために新聞を活用しています。

4年生は、新聞づくりに取り組みました。学区には、全国道の駅ランキング第2位の「上品の郷」があります。上品の郷の方へのインタビューを通して学んだことや石巻地域の魅力を新聞にまとめました。完成した新聞は、上品の郷の店内に掲示していただき、観光で訪れた皆さんに読んでいただいています。

5・6年生は、新聞記事をスクラップすることも学びました。総合的な学習の時間で学んでいるSDGsに関連する記事を集めて、スクラップブックやスクラップシートをつくりました。コンクール

にもチャレンジしました。「復興」というテーマで「SDGs」の輪を広げる活動に5・6年生が取り組んでいます。復興とは、自分たちが住んでいるところだけが幸せになればよいのではなく、みんなが幸せを感じる社会をつくっていくことが大切なのではないかと私たちは考えています。

10月27日には「上品の郷」を会場に「つなぐ・つながるプロジェクト」を開催しました。大谷地で育てた米やサツマイモ、ポップコーンなどを販売したり、サツマイモのツルを活用した輪投げなど遊びのコーナーをつくらしたりしました。

SDGsで取り組んでいる詰替え容器の回収活動は地球全体のマイクロプラスチックを減らす活動です。本来ごみとなるプラスチックをブロックとして、再生させて1・2年生が花壇を作成し、当日は地域の方々や、パンジーなどを植えました。

5・6年生は、SDGsの取組を紹介し、地域の方々と「これからの町づくり」についてワークショップを行いました。タブレット端末で調べたことや活動内容を紹介するのですが、ここでも新聞記事の書き方講座で学んだことを生かしました。読む相手のことを想像し、何を伝えたいのかを明確にすることです。劇にしたり、体験活動を取り入れたりすることで、参加された方々にも好評でした。大学の先生や市議会議員の方も参加してくださいました。私たちの取組にアドバイスしてくださいました。

私たちの取組は、今年環境省「グッドライフアワード」で審査員特別賞「子どもエンパワーメント賞」を受賞しました。

私たちは、世界中の人たちの意識を変えていかなければいけないと思っています。そのためには、ま

ず私たち自身から変わらなければならないし、少しでも多くの人にSDGsの考え方を知ってもらうことが大切だと考えています。

NIEの取組を始めて、新聞から多くの情報を得ることができることを知りました。その記事の書き方を参考にしながら、私たちは発信をする力を高めて

いくことが、次のチャレンジです。

<尚綱学院高等学校 生徒5名>

尚綱学院では、僕を含めて5人の生徒が今年度開催された河北新報第28回新聞記事コンクールで入賞しました。その時期自分たちが書いた記事に込めた思いというものを発表していければなと思っています。

発表①

今回、私は「世間の当たり前が、当たり前ではない人もいる」ということに焦点を当てて執筆しました。漢字を書けることや時間を守ること、計算を容易にこなせることなど、これらは社会においては当たり前かつ必須のスキルであると感じます。しかし、これらのスキルが「見えない障害」によって世間一般の「当たり前」が「不可能にされる」という現実があります。自分自身が持つ特性やまたそれゆえに体験したことと、研究によって明らかにされている不変の事実、そして社会における認知など、様々な視点から当事者なりに考えをまとめました。またその認知が広がることを願い、「自分自身の思い」とともに筆を執り、文にまとめました。



発表②

今回執筆した記事で取り上げたのは、「ヤングケアラー」についてです。社会的にも注目度の高い言葉ですが、現状はまだ多くの課題が残されており、同世代にも悩んでいる人がいます。私がこのテーマを書く上で調べた際、17人に一人の割合でヤングケアラーがいることや、家族の介護をする生活が当たり前で、自身がヤングケアラーという認識がない子どもも少なくないという実態を知りました。このように表面化しにくく、孤立化しやすいと言われるヤングケアラーですが、当事者を一人にさせないことが問題解決に深く関わってくると感じます。また、今回記事にしたことで、ひとつの社会問題を深く考えることができ、周りに悩みを抱えている人がいたら、他人事だと思わず声をかけて寄り添えるようになりたいと思いました。

発表③

「迷ったら攻めろ」。この言葉は、青学駅伝部の原晋監督がある選手に掛けていた言葉です。攻めの走りをするかあえて守りに入るか迷ったら、攻めの走りをしようということだそうです。私はこの言葉を

座右の銘にしている、「やるかやらないか迷ったらやってみよう」と置き換えています。私は、仙台駅の地下の改札で目の不自由な女性を見掛けました。そこで座右の銘を思い出し、私は勇気を出して声を掛けました。今までの自分はこのようなことはできませんでしたが、新たなことに挑戦したことで自分に自信ができました。自分のこの経験を通して、まず、何か困っている人や障害を抱えている人がいたら、助けてあげることが大切だということ、そして、このような経験を通して自分に自信が付き、私のように自身の成長を感じてもらえたら嬉しいという思いがあります。何事にも挑戦する姿勢が大事だと思います。



発表④

今回の記事で、「障害者は必ず助けられるだけの存在ではない」ということを自分の実体験を基に執筆しました。しかしこれは、障害のない人に対しても当てはまります。



あの人は優秀、あの人は助けられてばかり。人の能力を最初の印象や勝手な偏見だけで決めつけてはいませんか？優秀な人にだって苦手なところはあるし、助けられてばかりのあの人にだって必ず誰よりも優れている面があります。もし自分には長所がないと感じている人がいたら、それはまだ得意分野に出合っていないだけでしょう。記事では障害者を例として述べましたが、これは障害の有無に関わらず皆共通です。

得意分野なら先頭に立ってリードしていく。苦手なことは素直に人に頼ってみたりたまには挑戦してみたり。そうやって全ての人々が補い合いながら、それぞれが障害があるかなど関係ないくらい、長所を生かして輝けるような素敵な世界になることを願っています。

発表⑤

この論説を書くきっかけとなったのが「逃げ遅れゼロへ」という災害弱者の避難の課題を取り上げた河北新報さんの記事を読んだことです。



私は、東日本大震災で被災した経験から、世界のあらゆる地で人を助ける仕事をしたいと漠然と思ってきました。高校でも、貧困の国でボランティア活動をするプログラムを受けたいと希望していました

が、コロナ禍でその願いは絶たれました。そんなとき、その記事が目にとまり、すぐに聴覚障がいのある友人のこと、杖をついて生活をしている祖父母のことなどが頭に浮かびました。確かに世界には貧困や戦争などで困っている人々は沢山いますが、目先を変えれば、この日本、地域、友人、家族と困っている人は、実は身近にいるということに気付くことができました。そして、支援の方法は物理的なものより人がする支援、協力が何より大事だという結論に至りました。この論説での学びを通して、将来自分が進むべき方向が定まり、地域福祉を学べる大学への進学を目指しているところです。

今後はその学びを深めて、大学での地域住民との交流やボランティア活動を通して、沢山のの人に学びを伝えていきたいです。

<質疑応答>

鈴木アドバイザー:尚綱学院は、普段はどのような新聞学習を行っているのか教えてください。

尚綱学院高:尚綱学院には大きく二つの活動がありまして、一つは総合探究の活動に新聞を活用していることとなります。

高校の授業では総合探究とって自分で調べたいテーマを決めてそれについて追究をしていく学習を行っていますが、こうした活動の中で新聞の記事を使って勉強を進めていくということを行っています。

また二つ目には学校の各フロアまたは図書館に各社の新聞が置かれていますので、そうしたものを毎日読みながら様々な知識を取り入れることができます。

栗原西中:大谷地小学校に質問です。低学年の皆さんも



たくさん新聞を読んでいたが、どうしたらたくさん

読めるようになりますか。

大谷地小:それぞれの学年で、朝のNIE・読書タイムにおいて読書だけでなく新聞を読むことにも取り組んでいます。毎日続けることが大切です。

1・2年生は、普段から図書室などの利用数が多いため、新聞などをたくさん読むことができます。

※感想発表

尚綱学院高:校種が違う中で小学校や中学校の取組をいろいろ聞き、高校にも導入できる部分や参考にできる部分がたくさんありました。また皆さん意欲的に活動されていてすごいなあと思いました。新聞を通していろんな知識を得ていくことは大切なことだと思うのでこれからも続けていきたいなと感じました。

大谷地小:他の学校の取組が、よく理解できました。自分の考えを大切にして、その取組が重要視されていたのすごいなと思いました。

それぞれの取組が未来に向けてのことや街づくりに貢献することになりすごいと思いました。



女川小:いろいろな学校でNIE活動をやっていることが分かりました。

各学校がいろいろな新聞を読んでいて参考にできたらいいなあと思いました。

栗原西中:各学校のNIEの取組について知ることができました。大谷地小のSDGsの取組も素晴らしいと思いました。

高校生の皆さんや小学生の皆さんの取組を聞くことができ、自分の学校と何か違う活動を行っているので自分たちの活動に取り入れながら新たな取組にも挑戦していきたいと思います。

3 講評

(1) 第1部講評

<仙台市立館小学校 遠藤 浩志校長先生>

第1分科会で発表した東仙台小、矢本東小、塩竈第二小、そして、利府西中の皆さん、お疲れ様でした。

今日発表していただいた四つの学校の取組を見ますと、新聞というメディアを通して、たくさんの情報の中から必要なものを選び、その選んだ情報をどのように読み解くのかを考える、そして集めた情報を比較し、自分たちの町との違いに気付く、さらに自ら情報を集め、伝えたいことや思いを整理してまとめるという活動が見られました。

そして、これらの活動を通して気付いたこと、



学んだこと、考えたことを自分たちの言葉でしっかりと伝えることができました。皆さんは、こうした活動を通して、これからの時代に必要な情報活用力をしっかりと身に付けたという姿が見られました。

ニュース、英語で書いてみるとNEWSとなりますね。最初の三つの言葉は、NEWという英語になりますが、これは新しいという意味です。新しいものを集めたものが、ニュースと言われます。

今日、他の学校の発表を聞いて分かったこと、気付いたことも皆さんにとってのニュースかもしれませんね。新聞に掲載されている多くの新しい情報をしっかりと読み取って、自分が今持っている知識と比較し、自分の考えや思いを作り上げて生きていく力がこれからの時代を歩む皆さんには必要だと思います。

それぞれのめあて達成に向けてしっかりと取り組み、これからの時代に向かう新しい姿を見せていただいた児童生徒の皆さん、サポートしていただいた先生方や職員の皆様に感謝して講評とさせていただきます。

最後に、皆さんに小さな声ですが、ブラボー！終わります。

(2) 第2部講評

〈仙台市立北仙台中学校 堀部 登美子校長先生〉

各校の皆さんの新聞を使った取組、アイデア、視点に大変驚きました。

まず、栗原西中学校は身近なところに新聞があります。気軽に手にとって読めるように、その環境づくりに配慮しています。

週末課題で、河北新報の河北春秋の聞き取りトレーニングを行うことで、世の中を知ることができます。新聞という与えられた情報から、自分で気になる記事を見つけて考察していく、自分の見方や考え方を鍛える取組に発展させています。

中学校の国語の授業に、メディアリテラシーについて学ぶ授業があります。読解力を身に付けようということを目指しているのですが、栗原西中の取組は、日常の中でそのような力を身に付ける活動になっています。

女川小は、新聞や新聞の持つ意義について学び、実際に花山新聞を作ったり、防災マップを作ったりすることで自分の町を再確認しています



ね。女川小の特徴は、外部の人に新聞の読み比べの授業をしてもらうなど、地域や外部の方々の支援を受けながら様々な活動をしいます。知りたい、学びたい、もっと深く分りたい、もっと調べたいという気持ちを育む、知識、知的好奇心が育まれるような活動になっています。

大谷地小も、エントランスホールを利用して新聞に親しむような環境を整備しています。

NIE・読書タイムの時間を設定して、新聞を読む、スクラップ等を作る、記事を書き写す、読書するという時間を設けています。

大きな特徴としては、1年生から発達段階に応じた取組で、テーマとしてSDGsを取り上げます。例えば1・2年生の活動では、マイクロチップを減らす活動の一環としてごみとなるプラスチックをブロックとして再生し、花壇を作ったりパンジーを植えたりしています。各学年、新聞から情報を得て、書き方や発信の仕方を学び、様々な活動をする中で、学校、地域、日本や世界にまで目を向けています。自分が変わることによって世の中が変わっていくという考えに結び付いたという感想もありました。

そして高校生の皆さん、さすがです。新聞を読むという活動から書くことに移行してますね。

発表した5名の皆さんの視点の付けどころが素晴らしかったです。自分の考えを形成する上で根拠となるもの、その一つが新聞だということが伝わりました。自分の主張を支える柱となるものも新聞が支えています。高校生になると、自分の考えを深く掘り下げて、現実社会の矛盾、課題そして自分の生き方、将来の自分に結び付けることができる素晴らしい発表を行っていただきました。

第2分科会を総括すると、発達段階に応じて新聞を活用しています。そこから物事の見方、考え方、生き方まで身に付けていることが分かりました。新聞を読むことは、私たちに大きな力を与えてくれるということを再確認できました。発表された皆さんに感謝を込めて、講評とさせていただきます。

大槻アドバイザー:お二人の先生から勉強になる話を聞かせていただきました。

今日発表された児童・生徒の皆さん、自分に、周りの友達に感謝の気持ちで拍手しましょう。

これで、令和4年度宮城県NIE研究大会「児童生徒による意見交換会」を終了いたします。

(文責・NIEコーディネーター 畠山 厚子)

伝わりやすい新聞作りを研究し、学校の魅力を発信する ～1年目 新聞作りの極意を知ろう～

1 はじめに

本校は、今年度からNIE実践指定校となった。1年目としては、「新聞に親しむ」ことを目標に、新聞を身近に感じるような環境作りに努めた。

令和2年度から本校で取り組んでいる「こどもものまち」では、高学年が市役所や店をつくり、仮想通貨を使ったまちづくりをしている。毎年「新聞社」が出店しているので、そこで行う新聞作りとも絡めて、実践を進めた。

2 実践の概要

(1) NIE コーナーの設置・発信

前年度までは、2階階段掲示板に、随時新聞の切り抜き記事を掲示していた。今年度は、改めて「NIE コーナー」と明示し、掲示を続けている。また、新聞用ラックを準備して、公費購入のこども新聞の見開き掲示を始めた。全児童が通る場所なので、立ち止まって見入る姿がよく見られる。また、「もっとじっくり読みたい」という児童には、新聞の貸し出しも行っている。

加えて、新聞の無償提供を機に、4階にも「NIE コーナー」を設置した。日々の新聞を見比べたり、後述する新聞スクラップに活用したりしている。

【児童の感想】

- ・階段をのぼるとNIEコーナーがあって、家で読まなくても、気になった記事を見つけたらさらっと読める。
- ・たくさんの種類の新聞があることで、同じ記事でも書いてあることが違い、いろいろなところに目を向けられる。
- ・新聞を読むことで、読む力と書く力が同時に得られるので、いいコーナーだと思っている。



【担任の感想】

- ・広げて複数の紙面を見られるのが良い。
- ・子供たちは興味をもって新聞を読んでいた。



学校でのNIEに関する活動について、

「NIEコーナー」としてブログで発信している。児童の実践の様子やその感想、NIEコーナーの紹介等を行った。

【保護者の感想】

- ・家では新聞をとっていないので、学校で新聞に触れる機会があるのが良い。
- ・自分で記事選びをすることで、良いニュースから入っていている。
- ・新聞をじっくり読むことが、読書にもつながっている。

(2) 新聞スクラップの継続

新聞スクラップ

- 1 新聞を読む
- 2 記事を選ぶ
- 3 自分の考えを書く
- 4 交流する

最初に、NIE担当が、5・6年生で新聞スクラップの授業を行った。作成した新聞スクラップ



ブを掲示し、高学年で読み合っ付箋に自分の感想を書くことで、意見交流も行った。

その後は、週末課題として各学年で取組を続けることとし、ワークシートで作成することが定着した。随時NIEコーナーへの掲示を更新し、前のものはファイリングして回覧できるようにしている。



【児童の感想】

- ・自分の興味のある情報を選んで、その情報を蓄えられたのでいいと思った。
- ・少し情報が多すぎて、感想を書くのが難しかったけど、考える力がついてきた。
- ・自学でも取り組んで、いろいろなことが知れて楽しいし、言葉も学べるから続けたい。
- ・自分が気になるところをまとめたり、調べたりして楽しい。
- ・友達の選んだ記事を見ることで、見るところが違ったりすると、新たな発見が生まれる。

【担任の感想】

- ・子供が、どんな記事に興味を持っているのか、どんな感想を持つのが分かる。
- ・学びの足跡が残せるのが良かった。

(3) 出前授業・「こどものまち」新聞社

10月に5・6年生が、「新聞の作り方を学ぶ」「見出しの付け方」というテーマで、河北新報社の出前授業を2回行った。

【児童の感想】

- ・普段新聞を読むことがなかったけど、話を聞いて、ちょっとでも新聞を読もうと思った。
- ・新聞の詳しい作り方や読み方を知って、新聞に興味があった。
- ・テーマを決めて書くこと、段落は三つでも十分ということを知って、無理にたくさん書かなくてもいいということを知った。
- ・見出しのコツやポイントを詳しく知ることができて、新聞作りがレベルアップできる。
- ・新聞を作るのは、書いている人の気持ちがこもっているんだなと思った。



【担任の感想】

- ・新たな気づきが多く、とても良かった。活かすには、もう少し指導が必要だった。
- ・作り方の工夫、思いを感じることができた。新聞の魅力を知り、身近に感じるきっかけの一つになった。



その後、「こどものまち」新聞社では、出前授業の内容を高学年が4年生に伝講した上で、新聞作りを行った。今年度は、Google Chromeのスライドでの作成であった。4～6年生7名で、当日作成も含め、学校での活動に関する14種類の新聞を完成させ、販売することができた。



【お客さんの声】

- ・学校の様子がよく分かる新聞がとても良いですね。
- ・とても分かりやすい読みやすい新聞です。よくできています。
- ・とてもすてきな新聞です。楽しい内容で、ワクワクしました。

3 今年度の成果

- 時事的なことに興味を持つ子が増え、視野が広がってきた。
- ネットではない視点から物事を見られたのは良かった。
- 出前授業や日々の取組を活かして、こどものまち「新聞社」の活動を行い、学校の魅力を発信することができた。
- 新聞が身近にある環境が整ったことで、「読まされる」ではなく、自然に自分で新聞を読むようになっている。
- 自分の意見を持ち、書ける子が増えてきたように感じる。継続することで、更に力がつくと思う。

(担当 教諭 大沼 富美子)

新聞を活用した教育活動の広がりを目指して

今年度は、学校の教育活動を核に、町教育委員会、女川向学館（小・中学校の教育支援活動団体）と連携しての活動実践を行った。

以下、新聞を活用した実践事例を紹介する。

1 向学館スタッフ・放課後楽校「新聞で遊ぼう」

【5月9日 向学館下川蓮先生による、おながわ放課後楽校特別講座 希望者】

武道場で、新聞を使ったゲーム、クイズ、体を使った運動、新聞リレー等に挑戦。子どもたちが、遊び方を工夫する場面も見られた。



2 新聞紙上「エッセイ執筆者」による授業

【5月27日 石巻かほく つつじ野執筆者 芳岡孝将向学館拠点長の体験談・5年】

筆者のアフリカでの体験（青年海外協力隊）を聞く。日本との違い、文章を書くことの楽しさをなど、映像を交え話した。身近な方が、新聞のエッセイを書いていることに驚き、自分たちも書いてみたいなどという声も聞かれた。

3 記者による新聞の作り方講座・国語

【6月30日 石巻日日新聞社 石森 洋史 記者による国語授業・4年】



新聞記事の作り方・見方についての講話。石森記者は、児童作成の個人新聞を、1

枚ずつ読み、スクリーンに投影しながら解説した。また、コバルトレー女川の試合記事をもとにした、取材・写真撮影の苦労話なども興味を引いた。



4 出前授業による新聞の読み比べ

【7月4日 河北新報社 末永 智弘記者による国語授業・5年】

①新聞って？②新聞の作られ方③新聞の読み方④見出しは大事⑤読み比べ新聞 について学習した。6月11日の楽天・巨人戦の河北・読売のスポーツ面の読み比べを行い、記事の取り扱いの違いを学んだ。東日本大震災翌日の新聞発行までの話は、強烈なインパクトがあったようだ。新聞は、事実を正確に伝えることに加え、読者を意識した工夫や取材する記者の思いのあることも感じ取ることができた。



5 むすび塾ぼうさい探検隊によるマップ作成

【9月13日 河北新報社 日本損保協会
協力による活動・放課後楽校希望者】

町を歩き回り・危険箇所や避難場所など自分たちの町を再確認する取組を行った。その後、班により防災マップを作成し、町民文化祭で展示した。また、新聞・マップによる啓発発信を体験した。活動は河北新報紙面で紹介された。



6 現地からの子ども記者による記事レポート

【9月14日～16日 石巻日日新聞社との
連携による花山合宿活動レポート発信】

5年生、3日間の花山での合宿。女川に新聞を通して、元気な姿を届けようと、子ども記者作成の記事と全員の集合写真を花山から、新聞社にメールで送る。翌日の新聞に掲載。記事内容の新鮮さに保護者にも好評で、コンビニで購入した家庭もあった。新聞の持つ意義を再度確認していく機会となった。掲載紙は、女川での解団式の際に全員に配付した。

7 子ども記者による定期の記事掲載

【子ども未来研究所発行の石巻こども日日新聞子ども記者活動 季節刊行時 希望者】

子ども記者を募り、取材から記事作成までの活動を行った。今年度、春号は、刺繍画星野真弓さんの女川展示会。夏号は、女川向学館の歴史とスタッフの思い、冬号は、花山活動日記をレポートし記事にまとめた。

8 児童会、学級活動時等の新聞作成

新聞に触れる機会が少しずつ増えるにしたがって、児童会・各種委員会の広報活動の内容にも工夫と、質の高まりが見られた。大きな行事のまとめ、学級内での係活動の新聞発行にも一役買っている。授業の学習のまとめとしての新聞作成の有効性も検証していきたい。

9 新聞への意見文投稿

前述のむすび塾参加者や花山新聞作成の感想などを、新聞に投稿している。いろんな考え方に触れたり、同年代の考え方にも興味・関心をもったりする契機となっている。読者の反響も大きく新聞は、読むだけではなく、参加していくという視点も大切であると感じている。

10 新聞に触れる環境づくり

二学期間、「五紙（河北・読売・朝日・毎日・日本経済新聞）」が届けられた。図書館司書の協力で、いつでも読めるようにした。記事の読み比べや、トップ記事の取り扱い、見出しの違いなどにも目を向けてきている。職員室前の廊下や図書室前には、学校行事、児童生徒の取組みが掲載された記事を掲示している。



【成果と今後の課題】

新聞を通じた体験と学びは、子どもたちの知的好奇心を大きく高めることができた。今後、新聞を更に身近なものと捉えるよう、一つの活動を次につなげ、校内の機運を高めたい。

教科を縦断した取組や地域との更なる連携も図っていききたい。

(担当 教育指導員 坂本 忠厚)

主体的に学ぶNIE

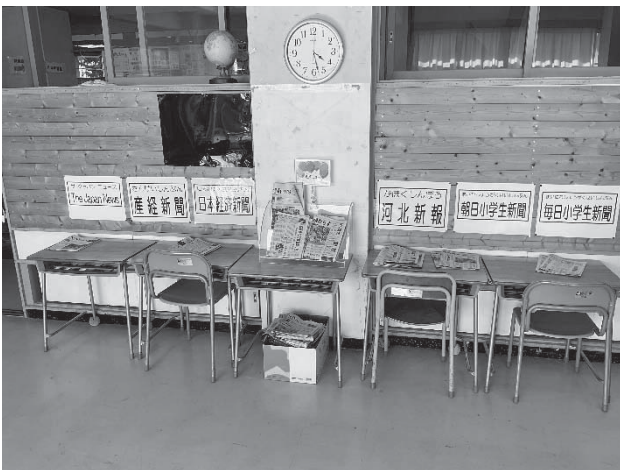
1 はじめに

令和4年度かNIE実践校になった本校では、主に高学年の児童が新聞に親しむ活動に取り組んでいる。今年度は児童が主体的に学ぶことができるように、校内の環境整備を進めたり、教科における新聞の活用を行ったりした。以下に、具体的な実践を紹介する。

2 実践の概要

(1) 新聞コーナー

高学年の学習室の一部を使い、誰でも自由に読むことができる新聞コーナーを設置した。「河北新報」「毎日小学生新聞」「朝日小学生新聞」「産経新聞」「日経MJ」「Japan News」の6紙を購読している。届いた新聞を毎日交換し、1週間分のバックナンバーを置くようにしている。コーナーを設置してから、新聞に興味をもつ児童が増えたと感じる。来年度はより多くの児童たちの目に触れることができるように設置する場所を工夫したい。



(2) 「おすすめ記事」の掲示

体育館につながる廊下に「おすすめ記事」の掲示板を設置している。たくさんの児童が通る場所であり、足を止めて眺める姿も時折見られ

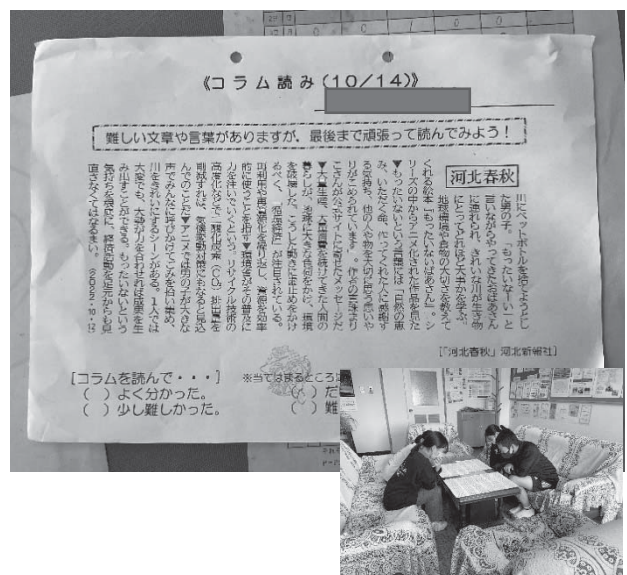
る。塩竈市立第二小学校が紹介されている記事や地域の大きな出来事を取り上げた記事など、児童の関心が高いものを選んで掲示をしている。

また、これ以外にも児童が作った新聞を教室や廊下に掲示する学年もあった



(3) コラム読み

高学年は週末課題として「コラム読み」に取り組んでいる。「河北春秋」を読み、どれくらい内容を理解できたか自分で確認する課題である。記事は6年生のNIE実行委員が選んでおり、児童が興味をもちやすい内容になっている。はじめのうちは難しい文章や言葉に戸惑う児童が多かったが、継続するうちに長い文章を読むことにも慣れてきている。



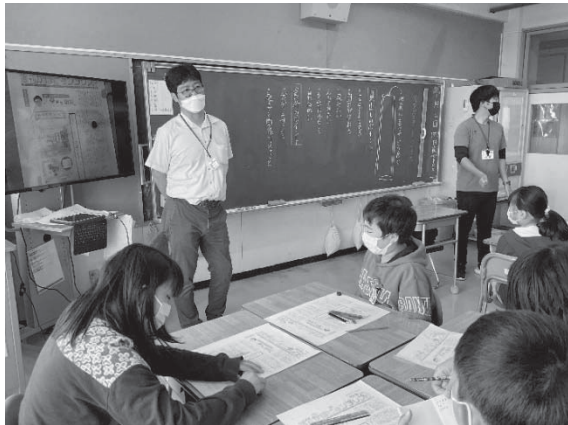
(4) 各教科等での活用

① 6 学年 教諭 中嶋輝

教科：国語科

単元名：「防災ポスターを作ろう」

末永記者（河北新報社）による出前授業では、見出しの付け方について学習した。実際の新聞記事の見出しを予想する活動では苦戦する児童が見られたが、友達と聞き合ったり、末永記者に質問したりすることで、授業の最後には多くの児童が短い言葉で興味を引く見出しをつけることができるようになっていた。単元のまとめには、学習を生かして、1年生向けの防災ポスターを作成した。

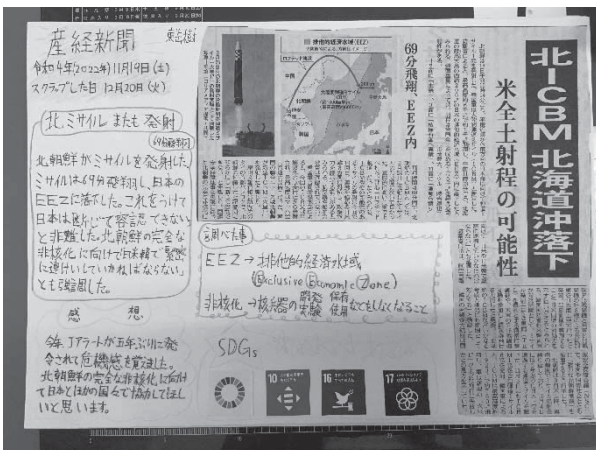


② 6 学年 教諭 佐藤嘉美

教科：総合的な学習の時間

単元名：「SDGs について考えよう」

総合的な学習の時間の単元のまとめとして新聞スクラップを行った。自分が調べたSDGs と関連のある記事を選び、要約や言葉の説明、読んだ感想などを1枚の画用紙にまとめた。一つの記事から複数の関連事項を見つけ、学びを深めることができた。



③ 5 学年 教諭 沼田和也

教科：社会科

単元名：「情報産業とわたしたちの暮らし」

石巻日日新聞社が東日本大震災の際に発行した6枚の壁新聞から新聞社の努力や工夫について考える学習を行った。児童は、普段の新聞とは違う手書きの新聞に興味を持ってじっくりと読んでいた。壁新聞ができた経緯を知るだけでなく、内容をもとに、非常時においても新聞社が大切にしていたことを考えることで、情報を伝えることの重要性に気付くことができた。



3 成果と課題

(1) 成果

- 年度始めには新聞をほとんど読んだことがないという児童もいたが、NIEによって様々な場面で新聞に触れさせることができた。
- NIE便りの発行や校内研修会を行うことで、教員間でNIEについて情報共有することができた。
- 他校でのすばらしい実践をたくさん見ることができた。来年度の実践の参考にしたい。

(2) 課題

- 今年度は高学年での実践が多かったが、来年度はどの学年の児童も新聞に親しむことができるような活動を取り入れていきたい。
- たくさんある新聞を上手く活用できない部分があった。多くのクラスで新聞を使ってもらえるよう、引き続きNIEのよさを発信し、校内全体へ推進を図りたい。

(担当 教諭 沼田 和也)

NIEで育てる情報活用能力

— インプットとアウトプットの場の設定の工夫を通して —

1 はじめに



本校は石巻市河北地区に位置し、全校児童が114名の学校である。学校の周辺は水田に囲まれ、学校田において全校児童は米を育てる活動にも取り組んでいる。昨年度からはSDGsの取組にも総合的な学習の時間を中核として取り組んでいる。石巻市のSDGs推進室の方々を始め、地域で活動をしている方々を外部講師としてお招きし、体験活動を指導していただいている。防災学習・環境教育・国際協力を柱に活動は展開され、それは地域復興につながっていく。震災伝承に取り組む方々から話を聞き、避難の仕方を学んだ6年生は、避難所生活で活動できる防災グッズの作成に取り組んだ。マイクロプラスチックが環境に与える問題について考え、洗剤などの詰替え容器の回収活動にも全校で取り組んでいる。また、北上川のヨシという植物の繊維を活用してすいた紙と、学校の花壇で育てた藍で染めた糸を活用して作成したカレンダーを販売し、その収益は紛争地域の子供たちの学習支援に活用していただいている。その取組は、地域の新聞等のメディアでも紹介された。

2 実践の概要

エントランスホールには、ベンチやテーブルが置かれており、読み聞かせをしたり、児童会

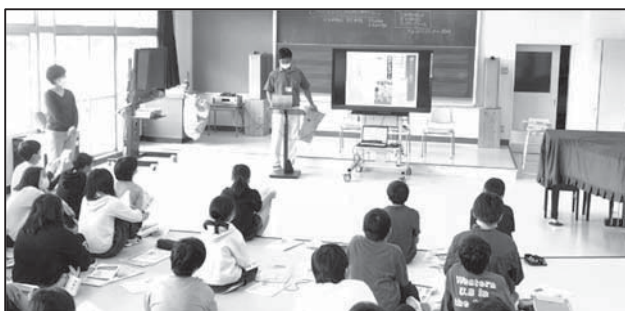


のイベントをしたり多目的活用スペースとして使用している。学校図書館の推薦図書も置かれているが、二学期が始まると新聞ラックが置かれるようになった。今まで読んだことのない新聞や、子ども新聞に児童の関心も高まった。特に、低学年の児童が大人のまねをして、新聞をめくっていたのが印象的だった。

夏休みに週時程を教職員で見直し、授業が始まる前の10分間を活用して、二学期よりNIE

活動または読書に取り組めるように設定した。学年ごとに取り組む内容をそろえていたけれども、4か月を過ぎた今では、自分で新聞を読んだり、スクラップ帳を作成したり、記事の視写または読書など活動内容を自分で選択する学年が増えている。

新聞は、エントランスホール新聞ラックのほかに廊下にも設置しており、手を伸ばすと新聞を手にとることができる環境づくりを目指している。



特に、NIE タイム導入時には、河北新報の出前講座を活用して、新聞の読み方や記事の書き方を学ぶ機会を設定した。

5・6年生は、NIE タイムで「河北新報スクラップ作品コンクール」への参加を設定した。総合的な学習の時間で行っているSDGsの探究活動と新聞記事を関連させてスクラップシートを作成し、優秀賞と団体賞を受賞した。

第二学期始業式では、仙台育英高校野球部の甲子園での活躍について、新聞社によって取り上げ方やレイアウトの工夫について校長講話の中で取り上げている。取り上げられた新聞記事は校内に掲示され、特に河北新報はとても大きな記事の面積だったことを児童は驚いていた。

外国語のスクラップコーナーなど、新聞記事を読み物教材として校内に掲示する取組も始まった。本校の教育活動を取り上げていただいた

優秀賞

写真拡大

Co2はいしゅつをへらそう

田中基さん

大谷地小学校 5年生

審査員講評

二酸化炭素が増えるとなぜ気温が上昇するのか。ユニークなイラストで図式を書き、そのメカニズムを自分なりに理解した。



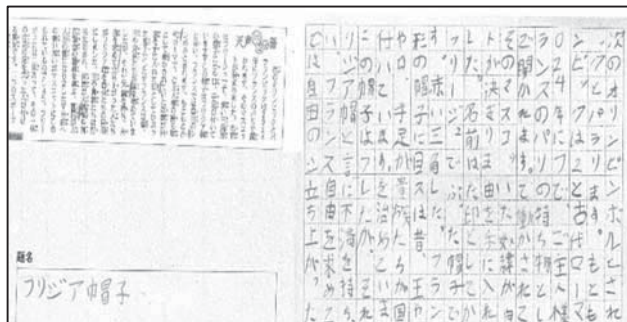
新聞記事に加えて、各教科・領域の学習内容と関連した内容についても掲示している。

Google Classroom アプリケーションを活用し、学校図書館から全校児童との双方向コミュニケーションも三学期から試行している。図書で紹介や図書館イベントの情報のみならず、

新聞記事スクラップを紹介して感想を交流したり、クイズなどの回答の交流も行ったりするようにした。家庭学習としてタブレットを活用する仕掛けにもなっている。

3年生は、NIE タイムで社説の視写と要約

に取り組んでいる。国語科で学習したスキルを生かして、記事の題名を考えたり、分からない言葉の意味を調べたりしながら家庭学習としての活用も試している。



4年生は、調べたことを新聞にまとめて発信する活動に取り組んだ。学区内には、令和4年度全国道の駅ランキング第2位の「上品の郷」がある。「上品の郷」で働く方へのインタビューを通して学んだことや石巻地域の魅力をまとめた。完成した新聞は、「上品の郷」の店内に掲示していただき、観光で訪れた方々に読んでいただいている。

「復興」というテーマでSDGsの輪を広げる活動に5・6年生は取り組んだ。復興とは、自分たちが住んでいるところだけが幸せになればよいのではなく、みんなが幸せを感じる社会をつくっていくことを大切にして、外部講師の方々

の協力を得ながら学びを進めている。

10月27日には、「上品の郷」を会場に「つなぐ・つながるプロジェクト」を開催した。学校で育てた米やサツマイモ・ポップコーンなどを販売したり、サツマイモのつるで作った輪投げなど遊びのコーナーも児童が考えて設定したりして、「上品の郷」に訪れた観光客や地域の方々との交流を行った。

全校で取り組んでいる洗剤などの詰替え容器の回収活動は、地球全体のマイクロプラスチックを減らす活動である。本来、捨てられるプラスチックをブロックとして再生させて、1・2年生は花壇を作り、当日、地域の方々と一緒に植栽活動を行った。

5・6年生は、SDGsの学校での取組を紹介し、「これからの町づくり」をテーマにワーク

つなぐ・つながる プロジェクト

大谷地フェスティバル イベント



日時

令和4年10月27日(木)

10:30~14:30

場所



道の駅上品の郷

宮城県石巻市小船越二子北下1-1

【主な活動内容】

- 10:30~11:30 [3・4年生/なかよし学級]
 - ・子供たちが田植えや稲刈りをした「大谷地米」の販売
 - ・ポップコーンになる「はじけるコーン」の販売
 - ・バックヤード見学や生産者の方々へのインタビュー
 - ・商品の陳列や値札付け、店内の清掃活動
- 13:15~14:00 [1・2年生]
 - ・リサイクルプランターに地域の方と一緒に植栽活動
 - ・「幸せを呼ぶアサガオの種」の販売
 - ・学級園で育てたサツマイモの販売(予定)
 - ・サツマイモのツルを使った遊びの場の開催
- 13:00~14:30 [5・6年生]
 - ・SDGsの取組に対する児童のプレゼンテーション
 - ・地域の方々と一緒に河北地区の未来を考える「まちづくりワークショップ」
 - ・北上川のヨシを活用した紙すき体験及び作品販売

「みんなの幸せを目指す大谷地からの発信」というテーマで、大谷地小学校では総合的な学習の時間などで学習したことを基に、活動内容を考えました。

大切にしたいことは、「つなぐ・つながる」という思いです。私たちはたくさんの方々とのつながりの中で暮らしているということを学んでいます。そして、このイベントを通して私たちは、地域の方々、そして地域復興・震災復興に尽力されている方々に感謝し、さらに地域の未来について考えたいと思っています。

指導協力

- ・サステナブルデザイン工房
- ・学びのんく石巻
- ・ソフトバンク教育ICT推進部
- ・河北新報社防災・教室室
- ・東北大学災害科学国際研究所

主催：石巻市立大谷地小学校

お問い合わせ ☎ 0225(62)3129

ショップを行った。屋外でのワークショップだったため、タブレット端末を活用して調べたことや活動内容をプレゼンテーションした。ここでも出前講座で学んだ新聞記事の書き方を生かしている児童の姿が見られた。目的意識や相手意識を明確にし、明確に伝える

ために発表グループで言葉を吟味していた。加えて劇にしたり、体験活動を取り入れたりしたことが参加された地域の方々にも好評であった。大学教授や市議会議員の方も参加して下さり、児童に直接アドバイスして下さった。さらに、このワークショップはオンラインで隣接する小学校との意見交流、さらには山形県天童市立干布小学校との意見交流につながっていく予定である。

本校のSDGsの取組は、環境省「グッドライフアワード」において、審査員特別賞「子どもエンパワーメント賞」を受賞した。

3 おわりに

新聞から多くの情報を得ることができることを児童は感じ取っていた。さらに、教科横断的にNIEに取り組んだことで、情報のインプットのみではなく、アウトプットのスキル習得という視点での可能性を模索することができた。

成果については、まだ取組の途上であることから、具体的なデータとして、児童の変容を紙面で紹介することは難しい。ただ、確実に言えることは、学校生活の中にNIEが浸み込んでいているということである。そして、社会の出来事と自分とを関連させて考える力（自分事とし

未来を担う児童に身に付けさせたい力

大谷地小学校が考える
児童に身に付けさせたい力


- 多様な他者とコミュニケーションする力
- 見通しをもって問題解決する力
- 自分事として学びに取り組む力

つなぐ・つながるプロジェクト


大谷地フェスティバル イベント

学校行事を通して育てたい態度


- お世話になっている地域の方々や、学校で指導して下さる方々とのつながりに感謝する態度
- 仲間のよさを認め合い、プロジェクトの成功のために協力しようとする態度




11 住み続けられるまちづくりを



13 気候変動に具体的な対策を



17 パートナリシップで目標を達成しよう



このプロジェクトに関連する主な教科・領域等

- アサガオを育てよう（1年生活）
- はっぱや実であそぼう（1年生活）
- 大きくなあれ わたしの野菜（2年生活・なかよし生活単元）
- 町の人となかよくなろう（2年生活）
- はたらく人と私たちのくらし（3年社会）
- 農家の人や店で働く人の願いや工夫（3年社会）
- 特色のある地域と人々のくらし（4年社会）
- 地域を紹介する新聞やリーフレットをつくらう（4年国語・6年国語）
- 私たちが実践しているSDGsの取組を紹介しよう（5・6年総合的な学習の時間）

- ・紙すきや藍染め体験を通して、国際協力をしよう。
- ・詰替容器の回収から環境問題を考えよう。
- ・防災学習を通して「安全なまち」について考えよう。

※コロナウイルス感染拡大予防のために、一部イベント内容を変更する場合があります。

※今回のプロジェクトは、すばらしいみやぎを創る震災復興支援活動の事業として実施しています。

環境省・グッドライフアワード

SDGs活動評価 大谷地小に特別賞



受賞を喜び、斎藤市長（中央）と記念撮影する大谷地小の関係者ら

石巻市大谷地小（児童14人のSDGs（持続可能な開発目標）に関する活動が、環境省主催の第10回グッドライフアワードで実行委員会特別賞の「子どもエンパワーメント賞」を受賞した。7日、関係者が市役所を訪れ、斎藤市長に報告した。

グッドライフアワードは環境と社会良い活動表彰し応援するアワード。同校は2017年度から年間、全校挙げて取り組んだ。副校長は「リサイクル防災、国際協力の取り組みが認められ、SDGsの活動が社会を築く」と説明した。

児童代表の、6年生入が地球温暖化や貧困、ジェンダー平等について委員の取り組みを発表した。6年佐藤美さん（12）は「環境に配慮し身近でできることから取り組む」、5年平野愛梨さん（11）は「地域の人口男女平等を広めたい」と話した。

斎藤市長は「未来を担う皆さんの力が報われた。受賞は大谷地小にとって誇り、一緒にSDGsの活動に取り組んでいきたい」と述べた。

使用済みの詰め替え容器の回収や北上市のヨシを活用した紙すき体験、地域の危険箇所や避難方法を盛り込んだ防災マップの作成にも取り組んだ。

て考える力)の育成が、次のチャレンジとなるだろうと考えている。

(担当 教諭 藤坂 雄一)

各教科・領域と関連付けた学年ごとの取組

1 はじめに

当校は、仙台市の北西部、広瀬川上流左岸に位置し、JR 陸前落合駅から約 4 km の所にある。河岸に沿って田んぼを中心とした耕地が広がっており、緑に囲まれた自然豊かな地域である。学校の北西部には、居住戸数 1,200 戸のみやぎ台団地が広がっている。児童数は約 280 名である。

学区は広く、約 30 名の児童がバスで通学している。保護者の約 9 割は会社員などの勤め人であり、共働きの家庭が多い。学校行事等に積極的に参加する保護者が多く、学校の教育活動に対しても協力的である。児童は全般的に明朗快活で素直であり、物事に熱心に取り組む児童が多い。近年は少子化の影響から児童数は減少傾向にあったが、現在は横ばいの状況にある。

令和3年度から NIE 実践指定校となった本校は、今年度は主に 4・5・6 学年の児童が、国語や社会、総合的な学習の時間において実践に取り組んだ。

2 昨年度の実践

昨年度は第 5 学年を中心に、一人一台の Chromebook と組み合わせて河北新報データベースからダウンロードしたデジタル版の新聞記事を活用する実践にチャレンジした。現役記者から取材のこつを学び、河北新報の記事に取り上げられた地元の企業人に、児童がオンラインで直接取材をするコラボ授業にも取り組んだ。

デジタルシフトが進む教育活動に、新聞社が培ってきた「技術」、紡いできた「人脈」を取り入れることで、児童の「社会を見る目」が広がる手応えを実感することができた。

コロナ禍だからこそその実践ができた 1 年目であったといえる。



【地元企業コラボ授業「リモートインタビュー」】



【河北新報の「ゲストティーチャー」】

実践してみて、一人一台端末（仙台市は Chromebook）が配付された学校現場と河北新報データベースの相性がとても良いと感じた。実践指定校として、無償で活用させていただいたことが大変有り難かった。新聞社が育んできた叡智は、GIGA スクール構想における授業を成功させることに結びつくものであるといえる。

昨年度の実践を踏まえて、今年度は他の学年にも NIE 活動を取り入れたいと考えた。「教育に新聞を！」の NIE 活動理念を実現するためにも、多くの学年の児童に活用の幅を広げたいと考えた。次ページからは、4・5・6 学年の実践を紹介する。

3 4年生の実践

(1) みんなで新聞を作ろう (国語)

5月に国語「みんなで新聞を作ろう」の学習で、学校生活の中での友達に伝えたい出来事を記事にする活動をした。

この単元の初めに「こども新聞」を読んだ際には、今まで新聞を読んだ経験がない児童がほとんどだった。様々な記事を読んでいく中で、記事には「見出し」があること、「見出し」は記事を分かりやすくまとめ、読者に興味を持たせる効果があること、記事の中でも文字の大きさの違いがあったり写真が用いられたりしていること、話題ごとに区切られていることなど、児童は様々なことに気付いた。

また、新聞には読者に伝えたい記事だけでなく、漫画など様々なコンテンツがあることに気付いた。学習のまとめでは、自分たちの新聞作成の割り付けなどに取り入れることができた班が多かった。

新聞を見たことがない児童が多い中、本物の新聞を手に取り、読む活動を行うことで、自分たちの新聞作りに見通しを持って取り組むことができた。

(2) 隙間時間の新聞タイム



教室の後ろに新聞コーナーを設け、朝の時間や隙間時間に自由に新聞を読めるようにした。また、友達へのお勧め記事コーナーを作ることで、新聞により親しめるような場を設けた。初めは新聞を読むことに不慣れで、手が伸びない児童が多かったが、児童の興味がありそうな新聞が目につきやすいよう、「先生のおすすめ記事コーナー」や「友達のおすすめ記事コーナー」を作ることで、自ら新聞を手取る児童が増え、

友達同士で新聞の記事について話すことも見られるようになった。新聞を読むことで、国語の読み取りの力が付いたと実感する児童も見られた。

(3) オンライン新聞クイズ

「こども新聞」の記事を読み、友達に知らせたいことや驚いたことなどを答えにしたクイズを児童が作り、答え合う取組をGoogle フォームを使って行っている。初めは、記者が伝えたいことにフォーカスしてクイズを作る児童はいなかったが、読む→クイズを作る→答える→交流する→読む、という活動を何度も繰り返すことで、記事の内容に沿ったクイズを作ることができるよう児童が増え、楽しみながら新聞に親しむことができた。



4 5年生の実践

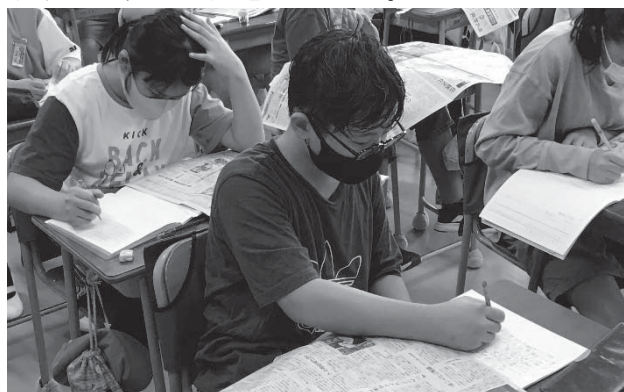
国語「新聞記事を読み比べよう」の学習では、二つの新聞記事を読み比べて、書き手の意図を考える学習を行った。記事や写真のみを見て見出しを考える「見出しクイズ」を単元のゴール

に設定することで、新聞を構成する様々な要素に書き手の意図や工夫が込められていることを意識させながら、単元の学習を進めた。

近年では、新聞を購読していない家庭も多いと考えられる。そこで、第1時では、身近な話題の新聞記事をじっくりと読む時間を確保し、新聞を読む楽しさを味わわせた。児童らは、記事を読み、気付いたことを友達と伝え合っていた。新聞には漢字や熟語が多用されているため、読み方が難解な漢字については、教師に尋ねる児童も少なくなかった。



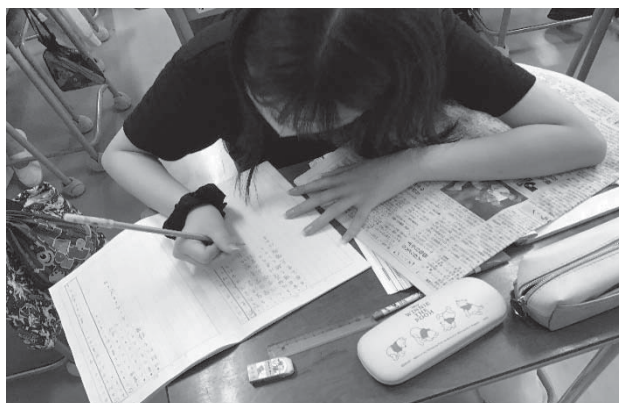
第2時では、教科書にある二つの新聞記事を基に、新聞の構成を確認し、リードや写真の効果について話し合わせた。また、書き手の意図が顕著に表れる「見出し」や「リード」をはじめ、写真と記事の関係などにも着目して読むことを押さえた。児童らは、記事の基になる出来事は同じでも、新聞記事によって伝え方が異なることに気付き、書き手の意図を考えながら読み取る大切さを実感していた。



第3時では、二つの新聞記事を読み比べて、共通点や相違点について話し合った。「見出し」や写真が入れ替わった場合について考えさせることで、記事の内容との結び付きに気付き、「見出し」や写真の大切さを実感していた。

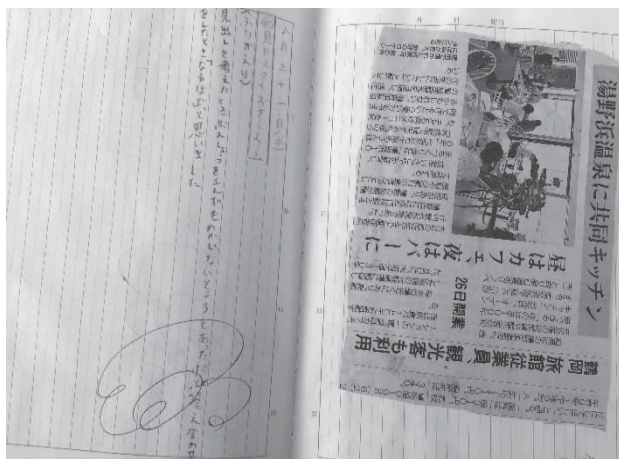
第4時では、「見出しクイズ」を行う際に気を

付けたいことについて考えさせた。実際の新聞記事の中から、クイズの題材にする記事を自ら選択させることで、意欲的に学習に取り組む姿が見られた。



第5時では、単元のゴールとして設定していた「見出しクイズ」を行った。児童らは、新聞記事をお互いに交換し合い、記事が伝えたいことを自分たちなりに要約していた。前時までに学習してきた写真の効果などをヒントにしなが、クイズに取り組んでいた。新聞記事を実際に手に取り、様々な新聞記事を読み比べることで、書き手の意図を読み取る力が付いてきた。

今後も、新聞を手軽に読むことができる環境作り等を行い、新聞を有効に活用することができるようにしていきたい。



5 6年生の実践

国語「気持ちよく対話を続けよう」の学習では、新聞の気になったニュース記事を持ち寄りその話題に合った対話を続けるという活動を行った。この単元では、相手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、対話を続けていくことができることを目標に学習を進めた。

学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」には、児童の対話の質の向上が必要不可欠である。より主体的に対話の学習を進めるために、①魅力的な話題②聞く力③話す力の3点に着目して単元計画を立てた。その中の①魅力的な話題の手立てとして、「こども新聞」の記事から話題を見付けることにした。学習指導要領では、対話的な学びの目的として「自己の考えを広げ、深める」と示されており、国内外の情勢や環境問題がバランス良く載っているこども新聞から話題を選ぶことは、6年生の発達段階から考慮して、自分の考えを広げるきっかけとするのに適していると考えたからである。



第1時では、教科書の対話の例を基にロールプレイで対話を続け、話題のずれに気付かせることで「聞くとき」と「話すとき」に気を付けることや話題を合わせて話すことの大切さを確認した。

第2時では、「こども新聞」から話題にしたい記事を一人一つ選び、第1時で学んだ「聞くときと話すときのこつ」を活用しながら対話を続ける活動を行った。

「こども新聞」には、ニュース記事だけでなく、著名人のインタビュー記事、楽しく勉強ができるようなクイズなど様々なジャンルの記事が載っている。今回は、対話の中の話題に適しているということと、短い時間で話題を共有しやすい文章量という観点から、毎日小学生新聞の第3面を活用することにした。この面では、国際・経済・環境・社会の4つのテーマについて分かりやすく簡潔に紹介されている。

まず、1週間分の新聞を準備し、友達に伝えたいような魅力的な記事探しを行った。新聞を読み比べる時間を確保したことで「環境問題は、自然破壊だけでなく動物愛護という面もあるのか。」「国際問題を見比べると、国によっ

て特色があることが分かった。」という声が上がリ、新聞記事を通して自分の考えを広げ、深める様子が見られた。

次に、自分が選んだ記事を見せ合いながら、記事の内容を話題にして対話を行った。



記事探しを通して自分の中で「伝えたい！」という意欲が高まったことで、話し方に工夫が生まれ、積極的に記事の内容について対話し合う様子が見られるようになった。

対話力の向上は、日々の積み重ねが重要である。今後も新聞から幅広い分野の話題に触れる機会を日常的に設け、対話する経験を継続して増やしていきたい。

6 おわりに

今年度、実践に取り組んだ4・5・6年生の児童は、自然に新聞に目を通す児童が増え、社会の事象に目を向けるようになってきた。各教科・領域と関連付けて新聞を活用することで、新聞への親しみが増したと感じる。「日常的に」「気軽に」新聞を活用することこそが、「教育に新聞を！」のNIE活動理念を実現することにつながるものとする。今後も新聞を活用した実践を、どの学年でも実践していきたい。

(担当 教諭 松川 誠一)

SDG s への関心を高め、気軽にできるNIE活動

1 はじめに

本校は、東松島市の中心に位置し、南には、航空自衛隊松島基地がある。近くには、市役所、図書館、コミュニティーセンターなど公共文教施設がある。児童数は、463名。(令和5年1月現在) たかのご児童会では、「あいさつ運動」や「デジタルメディアコントロール」などに力を入れており、6年生を中心とした縦割り活動も盛んである。62代まで続く伝統的な鼓笛隊は、運動会や地元の祭りなどで発表をしている。

学校運営協議会の委員に地元の新聞店の方もおり、2年目となる実践に心強いサポートをいただいている。

2 NIE 活動のテーマ

「SDG s への関心を高め、
気軽にできる NIE 活動」

3 目標

NIE 活動を通して、児童に新聞に触れる機会を増やすことにより、SDG s の17の目標への関心と実践意欲を高めるようにする。

4 NIE 活動の取組の方針

NIE 活動としての取組は、年間指導計画に基づき、新聞を活用できる教科を検討する。また、教職員は、気軽に新聞を活用し、新聞のよさを実感しながら授業実践できるようにしていく。

5 主な活動内容

(1) 新聞活用を生かした授業づくり

目的は、新聞に慣れ親しむことを第一に考え、新聞の基礎を学ぶことで、幅広く社会に目を向け、自分事として考え、読解力、表現

力の向上を図る。国語や総合的な学習の時間に計画的に取り組んでいる。

(2) 新聞コーナーの設置

社会で話題になっている記事や関係する図書室の本を合わせることで、児童は興味をもって新聞を手にしたたり、本を読んだりする学びの場につながっている。サッカーのワールドカップや生物、円安の話題では、興味を持って紙面を読んでいる児童がいた。



(3) 朝の『一人本タイム』(全校)

○ねらい

子ども新聞に触れることを通して、新聞から得られる知識や情報に興味を持てるようにする。

本校では、登校後、朝の準備が終わった児童から読書を始めるようにしている。3年生では、『子ども新聞』を壁にかけ、いつでも見ることができるようになっている。毎週新しい新聞が届くので、児童は喜んで手に取っている。3年生にとっては難しい内容もあるようだが、自分の興味を持った記事を中心に読み進めている。



(4) 各教科等の中で新聞を活用した授業等の紹介

①総合的な学習の時間

「みんなにやさしい町」(3年)

○ねらい

福祉に関心をもち、地域に住む様々な人々の生活や願いを知り、自分たちの町をさらに住みよくするために課題を立て追求できる。

「つかむ」段階では、様々な障害があることを知り、「白杖体験」「車椅子体験」「点字体験」などを通して、障害について興味をもち、課題を立てた。「追求する」段階では、障害をもつ方々をゲストティーチャーに迎えて話を聞いたり、公的施設の見学を通して福祉に関わるものを見たりした。さらに深めたいことに関しては、インターネットによる調べ学習を行った。

「まとめる」段階では、グループごとに体験したことや見学したこと、調べたことを新聞形式でまとめた。新聞の割付の仕方を『こども新聞週刊かほピョンプレス』を見て学び、見出しの書き方や写真を入れることよきなどを学習した。子供たちは、「見出しはもっと大きく書いて目立たせた方がいいよ」「この説明は難しいから、見学の時に撮った写真を入れてみよう」などと、互いにアドバイスをしながら新聞を作成することができた。

「考えよう 調べよう SDGs」(5年)

○ねらい

現代社会の様々な課題を学び、SDGs 未来都市を目指している東松島市を住みやすい町にするために、自分なりの解決方法を考え、新聞にまとめることを通して、SDGsの「持続可能な17の目標」への関心を高める。

「私たちがつくる持続可能な世界」SDGsについて考える。SDGsの17の目標ごとにグループ分けをする。

「住みよい町にするために」をテーマに、住みよい町・東松島市について考える。グループで追求したい課題を考える。

<河北新聞社の記者による出前授業①>

新聞の読み方や新聞の構成、東日本大震災で果たした新聞の役割について教えていただいた。児童は、より新聞を身近に考えることができた。



<河北新報社の記者による出前授業②>

取材の仕方やマナー、取材活動の大変さを教えていただいた。児童は、取材に興味をもち、取材活動の準備をしていた。



今後の活動予定

・市役所の職員の方や東松島みらいとし機構(HOPE)などのNPO法人の方にも協力を依頼し、取材活動を行う。

- ・取材したことを振り返り、新聞のレイアウトや記事の書き方、見出しを考え新聞作りをしていく。
- ・完成した新聞を地域のコミュニティーに展示したり、地域に配布したりしていく。

「東松島市の良さを発信しよう」（6年）

○ねらい

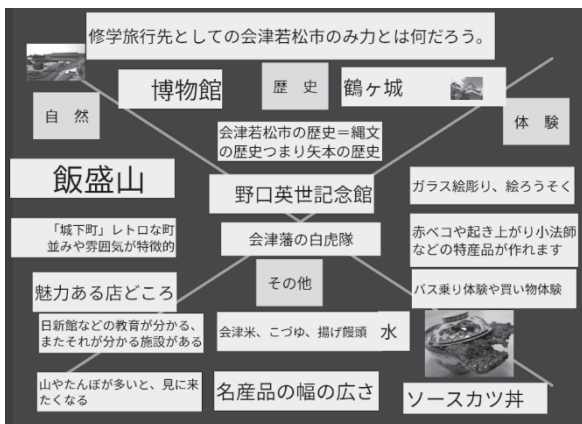
新聞記事の情報や観光パンフレットなどを基に、修学旅行で東松島市を訪れる学校にとって、修学旅行先としての東松島市の魅力とは何かを考える。

ア 会津若松市の修学旅行としての魅力を確認する。

イ 修学旅行の体験から、会津若松市の魅力を新聞にまとめる。



ウ 会津若松市の魅力をテーマごとに分ける。

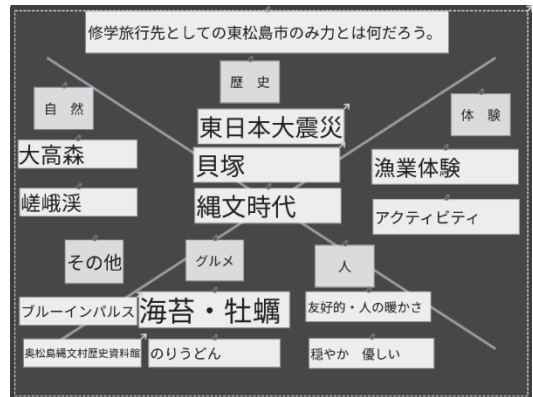


エ 各地から宮城県を訪れる修学旅行生の新聞記事を読む。



オ 今までの校外学習へ行ったことや体験したことを確認する。

カ 訪問する学校にとって、「修学旅行先としての東松島市の魅力」とは何かを考え、話し合う。



児童は、東松島市にも会津若松市と同じような魅力があることに気付く。

②国語科 「みんなで新聞を作ろう」（4年）

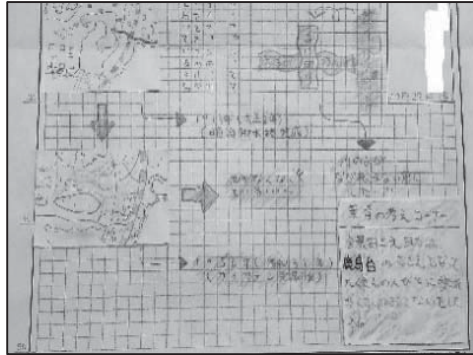
○ねらい

新聞の構成を理解し、学校やクラスで起きた出来事を取材し、見出しを考えたり割り付けを考えたりして新聞を作成する。

「つかむ」段階では、東松島市主催の「ふるさと教室」のまとめ活動として、新聞づくりの計画を立てさせた。

「取り組む」段階では、グループごとに分担を決め、誰がどの記事を書くか等を話し合わせた。記事を書く際には読み手を意識した見出しや記事の書き方、写真や図などの「見て分かるもの」などを工夫させた。

新聞を作成している児童の様子を見て、講師の先生や担当者に積極的に質疑応答した内容をすべて記事に入れ込みたいが為にポイントを絞り切れない児童が多く、どの記事も似た内容になった。そこで、グループごとに伝えたい内容のポイントを確認させ、重点化を図ったところ読みやすい記事になった。



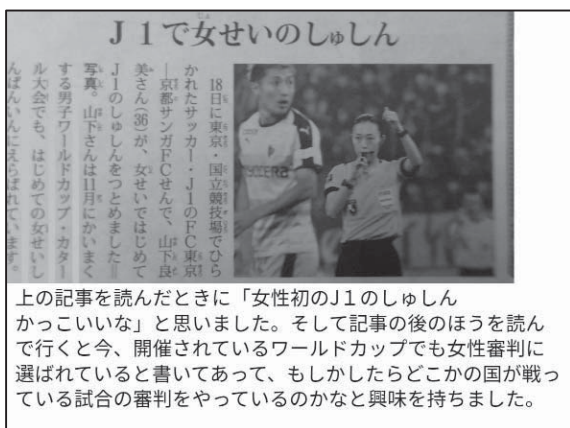
③宮城県NIE 研究大会に代表児童が参加

6 学年の取組を発表することができた。また、他校の工夫された NIE 活動の実践発表を通して、児童は、NIE 活動に興味を持ち、もっと知りたいことを質問したり、学校でも実践してみたいことを考えたりするよい機会となった。

(5) 学級活動での取組

①新聞記事に自分の思いを (6 年)

児童は、新聞の紙面からお気に入りの記事を探し、パソコンを使って記事を撮影した。また、記事についての自分の思いや感想をロイロノートでまとめた。新聞記事を切らなくてもよく、一つの新聞を多くの児童が閲覧でき有効活用することができた。児童は、パソコン操作に慣れているので、写真撮影やコメントの入力も容易にでき、幅広い教養を得ることができた。



②係活動での新聞コーナー (6 年)

タブレットを使って、簡単に新聞作成ができることが分かると、係活動でも、新聞作りを生かそうという児童が増えた。中には、新聞会社を立ち上げた児童もいた。

6 2年間を通しての成果

- 年間指導計画を基にした NIE 活動を取り組んできた。児童は、新聞に触れる機会が増え、興味をもって新聞づくりをすることができた。
- 高学年になると、児童は、ICT を活用し、新聞記事についてさらに調べたり、パソコンを使って新聞にまとめたりするスキルが高まった。
- 5 学年では、河北新報社のご協力もあり、児童はいろいろな新聞に触れる機会を得、それぞれの新聞のよさや特徴に気付くことができた。また、記者の方の出前授業もあり、児童は、新聞の構成や取材の仕方を本格的に学ぶことができた。

最後に、2 年間の実践指定校を受けて、NIE 活動のよさを再確認することができた。新聞を活用することにより、児童は、多くの視点から物事を考えたり、社会情勢に関心をもったりすることができた。また、NIE 活動を通して自分の住んでいる町にも興味をもつ機会ともなった。これからも、新聞を活用しながら授業実践をしていきたい。

(担当 教諭 川綱 義朗)

新聞に毎日ふれる環境を

1 はじめに

本校では一昨年度・昨年度 NIE 実践指定校となり、1年目は国語や算数などの教科授業の中で新聞を活用する場面はないか各自考え、実践を行った。

2年目は、NIE 担当3人の担当学年である4年生、特別支援学級、5年生を対象として、個人研究という形で進めていった。

3年目の本年度は、独自認定校として、新聞をいただける環境を生かし、また、データベースも活用しながら活動を進めていった。

2 実践の概要

(1)各学年での実践

① 6年生国語

国語力向上プロジェクトと題して、朝学習の時間や国語の時間などに新聞記事を活用した学習を行った。本実践は紙面ではなく、一人一台端末を活用して学習を行っている。具体的にはコラム記事(河北春秋)を児童に配布し、「読む・要約する・感想(意見)を書く」活動である。実際の流れは以下のようなものである。

- ①新聞記事を読む。(一読できた時間を計る)
- ②記事の内容を要約する。(100字程度でまとめる)
- ③時間に余裕があれば記事についての感想や意見を書く。

以上の3ステップ、全体で10分間の活動にしている。



「読み」については、何度も読み返さずとも理解できるようにスピードを上げることを目指して音読する。音読の指導にもなり、ふだんの学習でも内容を理解しながら読もうとする姿が見られるようになった。なお、児童に配布しているコラム記事は、音読することを活動の

中心に据えているため、難読語に関しては意味や読み方を掲載している。

「書き」については、要約を主として行い、記事の中で伝えたいことだけを抽出する練習として行う。児童は、学習を進める中で大事なことや伝えたいことを中心などが、どの記事においても似たような箇所に書かれていることに気が付いてからは、読む速度に加え要約する速度が上がっている。

また、記事の内容によっては、要約よりも意見を持ってもらいたい内容のものがあるため、場合によっては感想・意見文を書く活動のみとすることもある。

新聞を購読している家庭が少ないこともあり、新聞記事を読み、知らなかった情報を知ることから新聞の面白さを感じている児童も多い。コラムを扱っていることもあり、日常にも通じることが多々あり、知見の広まりを感じる。そういった点でも新聞を日々の学習に活用することのよさが表われているように思う。



児童に配布しているコラム記事
(河北新報提供・データベース活用)

国語力向上プロジェクト～新聞記事を読んで・まとめて・書いて～			
氏名	読んだ新聞	要約	記事を読んでの感想・考えたこと
		<p>100文字以内で短くまとめよう！</p> <p>イブロン6号機に降りた人々には、「一瞬一瞬」という言葉を聞けた。この言葉は、うまくいった時には盛大に喜び、逆に失敗したら大いに悲しみ、反省すれば、いとも前向きに捉えることもできる。大いに悲しみ、徹底的に原因を究明して、次を目指して欲しい。</p>	<p>記事を読んでどんなことを思ったか？自分の考えを教えてください！</p>

要約等をまとめる Google スプレッドシート

※いずれもデータにて児童に配布し、一人一台端末にこれまでの記録を蓄積することができるようにしている。

② 6年生理科

理科の「電気と私たちの暮らし」の単元で、導入で現在の課題の新聞記事を活用した。

そして、実験結果をふまえて、データベースで自分たちの課題を検索した。

これからどうしていったらいいか、考えることができた。



(河北新報提供・データベース活用)

③ 5年生国語

○ 国語「新聞記事を読み比べよう」

宮城県 NIE 推進委員会小学校部会からの援助を受け、1人に1紙ずつ本物の新聞を使い、授業を行った。

・第1、2時

「新聞探検をしよう」

実際の新聞を使って、新聞について学んだ。

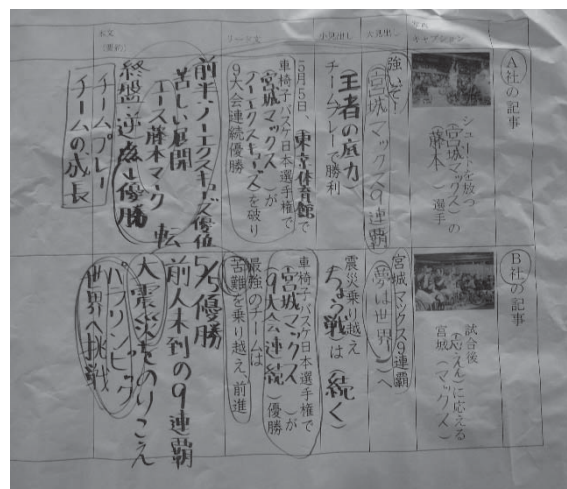
(アナログとデジタルの融合)

GIGA スクール構想により、1人に1台ずつクロームブックがあるので、Google フォームを使って、授業を進めた。

また、カメラ機能を使って、新聞記事の切り抜きを試みた。

・第3時

教科書の新聞記事を使って、読み比べをした。



④ 2年生・特別支援学級・国語

○ はがき新聞づくり

レイアウトの仕方、見出しの付け方を工夫した。

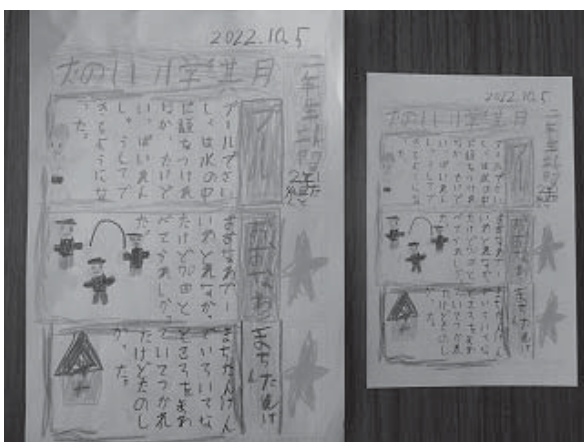


・ 1学期のまとめ新聞(2年生)

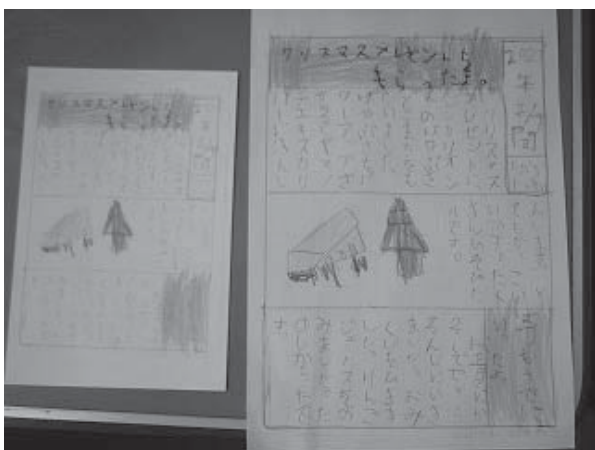


② サッカーワールドカップの切り抜き
校長室前に、切り抜きの掲示を行った。

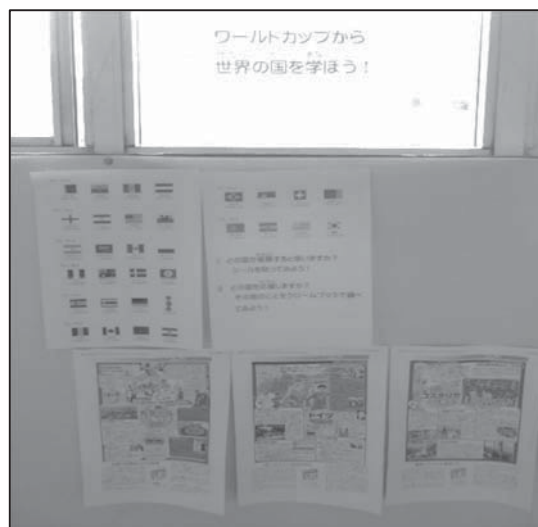
- ・ 選手紹介
応援する選手のわきに、シールを貼った。
(人気は久保選手)



・ 新年スタート新聞(特別支援学級)



- ・ 参加国を紹介することも新聞を掲示

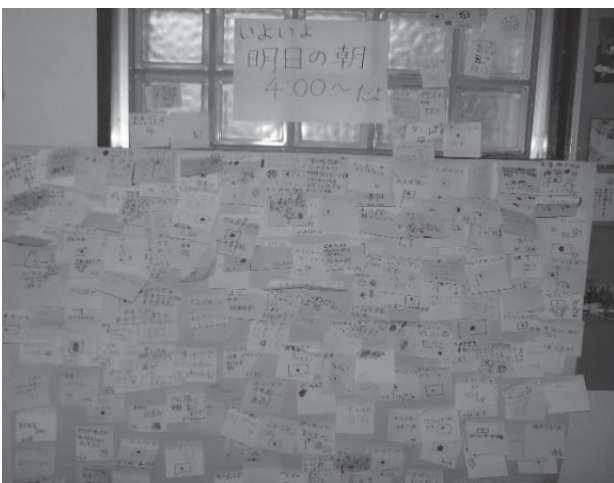


(2) 新聞に親しむための工夫

① 新聞コーナー

児童が目にしやすいように、図書室前に NIE コーナーを設け毎日展示した。

コスタリカ戦に負けた後、応援メッセージを付箋に貼った。関心の高さが表れていた。スペイン戦に勝利したときは、願いが通じたのかなと感じた。



③ 朝日デジタル forSchool の利用

無料キャンペーンを利用し、期間中、児童がいつでもアクセスできるようにした。

隙間の時間などを使って、検索する子が増え、新聞やニュースに触れる機会となった。

家庭学習において、デジタル新聞を活用した自主学习も見られるようになった。記事を読んでわかったことや疑問をまとめる中で、更に知りたいという知的好奇心が湧き、調べ学習にも発展する児童もいた。



(3)職員への啓蒙

- ・ NIE 通信の発刊

全国大会の様子など、新聞を活用した学習活動例などを校内において広めるために NIE 通信を作成した。



3 成果と課題

<成果>

- ・ 新聞に興味を持ち、学習活動に生かしていた。高学年では、新聞を読む中で、伝えたいことの方がすぐに見付けられるようになった。
- ・ 調べ学習をする際の情報源として選択する児童が見られるようになった。家庭においても新聞に触れることで、家庭学習がより意欲的になった。
- ・ 新聞に親しみを持つ児童がととも増えた。
- ・ GIGA スクール構想のもと、デジタル機器を使った新聞利用を試みた。その結果、新聞に触れやすくなり、活用の幅が広がった。

<課題>

- ・ 担当を中心とした新聞の活用となった。それをどう組織化し、全職員へ広めていけるかを考えなければならない。
- ・ ワールドカップなど、タイムリーな活用では、たくさんの児童が新聞に触れることができた。それを、どう日常化していくかが課題である。
- ・ GIGA スクール構想のもと、一人一台端末が整備され、デジタル化がどんどん進む中で、新聞とどう両立させていくかを模索しなければならないと考える。

(担当 教諭 三輪 一騎)

新聞のしくみを知ることが新聞に親しむこと

1 本年度の目標

本年度はNIE実践1年目である。今年度の目標を設定するにあたり、来年度もNIEの実践を継続することを踏まえ、長期的な視野を持つことを大切にしたい。

その長期的視野のもと、以下の2つを今年度の目標とした。

- ・新聞のしくみを知ること
(見出しとリードで世の中の流れが分かる)
- ・新聞に親しむこと

これは2つの別々な目標ではない。「新聞のしくみを知る」ことが、結果としては「新聞に親しむ」ことになる。以下に述べる理由で、この2つは関連し合う1つのことであり、「新聞のしくみを知ることが新聞に親しむこと」と言い換えることもできる。

2 目標設定のねらい

急速に進んだパーソナルコンピューターやスマートフォンの普及に伴い、ニュースもインターネットで見ることが増えた。ワンクリックで気になるニュースを簡単に読むことができる。そのような時代に生きる今の生徒たちは、新聞は「難しく、読むのに時間がかかるもの」と思っているのではないか。

けれども本当にそうだろうか。新聞のしくみを知れば、実は新聞こそ、短時間で世の中全体の流れをより簡単かつ客観的につかむことのできるものである。新聞のしくみを知った上で新聞を手にとれば、そのことに生徒が気づき、「なんだ、思っていたよりも新聞は難しくない」と実感してもらえるのではないか。そのように生徒の新聞に対するイメージを変えることで、新

聞をより身近なものとして、日常的に読むようになってもらいたい。それが、今年度の目標に込めた願いである。

3 生徒に提示した「新聞のしくみ」

NIEの活動をスタートさせるにあたり、「1日5分!から始める新聞の読み方」というプリントを作成し、生徒に知ってほしい新聞のしくみを示した。提示した「新聞のしくみ」は以下の通りである。

(1) 見出し

見出しは究極の要約。10文字程度で記事の内容を伝えている。見出しの文字の大きさは、新聞社が考えるその記事の重要性を示している。

(2) リード(前文)

トップ記事には本文の前に記事のポイントをまとめたリードが掲載されている。リードを読めば、記事の概要がわかるようになっている。

(3) 新聞は見出しとリードにざっと目を通すことで、世の中の動きが分かるようになっている。5分あれば、世界の流れが分かるようになってきている。

4 実践の概要

9月・10月の2か月にわたり、河北新報・朝日新聞・読売新聞・毎日新聞・産経新聞・日本経済新聞の6紙を、各クラスに日替わりに届けた。ホールなどの共有スペースに6紙をまとめて置くことも考えたが、生徒が「新聞を読もう」と思い立った時、すぐに新聞を手にとることができるようにクラスに新聞を置くことにした。

毎日の日直(2名)は、教室に置かれたその日の新聞に必ず目を通し、1日の終わりのショートホームルームで、自分が興味を持った記事の見出しと、その記事の内容について簡潔に述べることにした。



また日直はクラスで紹介した見出しとその記事の内容を日誌に書くようにした。



この活動を通して、全ての生徒が2か月の間で数回は実際にその日の新聞に目を通すことになる。見出しとリードを意識することで、今までとは違った新聞の読み方を実感してもらうことが目的である。新聞は必ずしもじっくり時間を掛けて読まなければならないものではなく、気軽に全体に目を通す読み方もあることに気付いてほしいのである。この活動を通して、自分が日直ではない日にも、教室にある新聞を手取るようになった生徒もいると聞いている。

この報告を書いているのは2023年の1月であるが、このあと2月にもう1か月6紙の新聞が届くことになっている。2月の活動もこれ

までと同様の取り組みを続けるのに加え、あらたに「新聞記事交換ノート」をつくりたいと考えている。日直が順番にクラスで紹介した記事を切り抜き、交換ノートに貼りその下に記事について思ったことを一言書いてもらう予定である。

5 来年度への展望

(1) 全体をつかむ読み方から、深く読むことへ

今年度は、見出しとリードに着目し新聞全体に目を通すことで、世の中の流れをつかむことを目指した。

来年度は、そこから生徒一人一人が興味を持った記事について、じっくりと読み、考える活動へとつなげていきたい。

(2) 「なぜ、新聞を読むのか」を考える

おそらく、生徒は漠然と新聞は読んでおいた方がよいと考えていると思う。しかし「何故自分は新聞を読むのか」について考えたことのある生徒はあまりいないのではないかと。目的がはっきりしなければ、新聞を読む動機付けも弱くなってしまふ。

私たちが新聞を読む第一の目的は、社会の動きを知ることであろうが、そもそもなぜ社会の動きを知る必要があるのだろうか。

私の個人的な思いにはなるが、生徒には「社会の中に生きる存在」として自分とらえ、将来について考えてほしい。自分が社会の中で何をなしていくのかを考えるためには、自分の生きている社会について知らなければならない。生徒たちが将来を考えるときに、ただ自分の興味だけに目を注ぐのではなく、自分が置かれている社会に目を向け、そこから見えてくる社会の中で自分は何をなすべきなのかを考えてほしいと願う。今後、生徒たち自身が新聞を読む意味を考える機会をつくりたい。そうすることで、生徒たちの新聞を読む意欲も高まるのではないかと期待する。

(担当 教諭 牧田 創)

自ら考え、考えを広げるNIEの取り組み

1 はじめに

本校は、NIE 実践指定校 2 年目である。昨年度は課題として、「新聞を読むのが楽しいと感じる実践」が足りなかったこと、「自分の考えを発信する機会」が少なかったことが挙げられた。このことから、主体的に学ぶ力と態度を育成したいという反省を、今年度に生かそうと試行錯誤してきた。以下は、その実践内容についての紹介である。

2 実践の概要

(1) NIE コーナーの設置



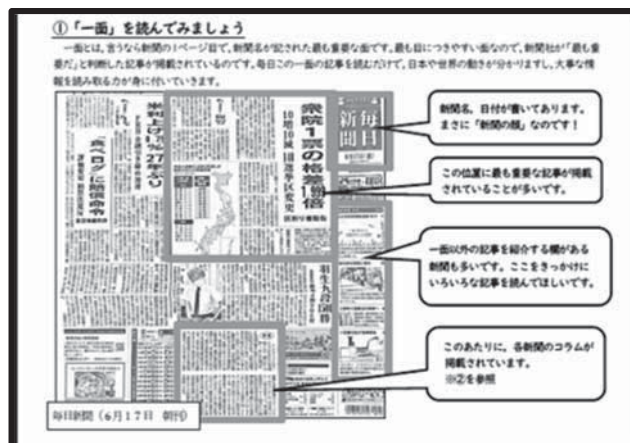
昨年度まで職員室前にあった新聞コーナーを一新し、昇降口前に NIE コーナーとして設置した。新聞を置くだけでなく、NIE に生かせるような情報を集約させた。掲示したものは、NIE とはどのようなものかという簡単な説明、一面記事を読むポイント、定められた月に毎日届く 6 紙の新聞のストック、学校に届く 6 紙の新聞の特徴についてである。また、生徒の実践を紹介するコーナーも設けた。「河北春秋」を書き取る実践を行ったので、「河北春秋」がどのようなものかについての説明文や今年の大きな出来事について述べた「河北春秋」の紹介、生徒の実践作品、NIE 課題の見本などを掲示した。他にも、

仙台育英高校が甲子園優勝した際の特集新聞や、広島原爆や水俣病や沖縄戦を考える特集新聞なども目立つように配置し、生徒の関心を惹くようにした。昇降口にコーナーを設置することで、より多くの生徒に NIE に対する意識付けができた。

(2) 研究だよりによる NIE の紹介

家庭に向けて発行する研究だよりで、NIE について、生徒の実践内容も踏まえて紹介した。

第一号では、NIE コーナーと同様に、新聞の読

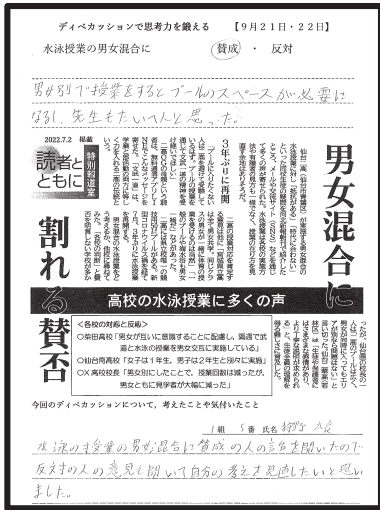


み方や各紙の説明、また、新聞を読むことで身に付く力についての紹介をした。以降は、生徒が取り組んだ課題や感想を紹介した。おたよりとして配布することで、生徒への意識付け、また、家庭の NIE 活動への理解を得ることができたのではないかと考える。

(3) ディベカッション

昨年度に引き続き、朝の帯活動のディベカッション（ディベートとディスカッションを組み合わせた本校独自の造語）では、賛成と反対に分かれるテーマについて話し合わせた。今年度も、そのテーマに新聞記事を用いた。河北新報の記事からの「高校男女混合の水泳授業について賛成か反対か」というテーマについてディベ

カッションを行った。賛成には「レーンを分けるなどしてエリアが別になっていれば問題ないと思う」という意見や、反対には「男女混合の授業をやめたら見学者が減ったとあるので、やめたほうがいいと思う」などの意見があり、しっかりと新聞記事を読んで課題と向き合っていることが分かった。お互いの意見を交換してみ



て、「友達の『混合だと誰かの手本を見られるから』という発言に共感した。別々だと1時間で全員がプールに入れなくて効率が悪いなどの意見にも納得したが、中学生になると恥ずかしいという考えも出てくるので、反対」という感想が見られた。1つのテーマについてじっくりと考え、話し合うことで、ものの見方や考え方が広がったと考える。

「河北春秋」書き取りトレーニング

(4) 「河北春秋」書き取りトレーニング

「新聞に慣れ親しみ、視野を広げること」を目的とし、指定された「河北春秋」を書き写すこと、書き写し終えたら意味や読みの分からない語句を調べること、取り組んだ感想を書くことに取り組ませた。指定した「河北春秋」は、スーパーボランティア尾島春夫さんについての記事である。

丁寧に書き写し、意味調べもししっかりと行い、記事の内容と取り組みについての感想も真剣に書いていた。以下は生徒の感想である。

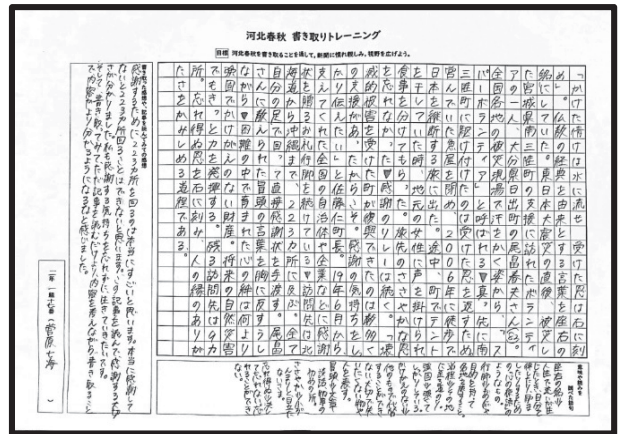
○この記事を読んで、感謝する大切さが分かりました。私も感謝する気持ちを忘れずに生きていきたいです。

○尾島さんの存在自体は知っていたけれど、宮城県にボランティアとして訪れていたことや、尾島さんがどのような思いでこの活動をして

いるかをこの記事で知ることができました。また、記事の始まりに書いてあることと、記事の終わりに書いてあることが関連していたので、とても印象に残りました。

○書き取ってみて、「読む」ということだけではあまり理解できなかった文を、「書く」ことで、より文について考えることができました。そして、この文を読んでみて、必ず人にあげた恩は、何らかの形として自分に戻ってくるんだなと思いました。

「河北春秋」などの一面コラムは、短いながらも、社会の出来事や世の中の動向について、記者の思いも交えて分かりやすくまとめられている記事なので、今後も活用していきたい。



(5) 新聞記事スクラップ

生徒全員に一部ずつ新聞を配り、気になる記事をスクラップし、その記事についてまとめさせ



せた。要約や感想、考察などの構成は指示したが、記事を紹介するためのタイトルは自分で考

えさせた。また、語句の意味や読み方を調べたり、絵を描いたりして、記事の理解度が上がる工夫もさせた。

また、この実践は2回行った。2回ともスポーツの記事、戦争の記事、防災の記事など、関連のある記事を選んだ生徒もおり、回数を重ねることが深い理解につながるのではないかと考えさせられた。以下は生徒の感想である。

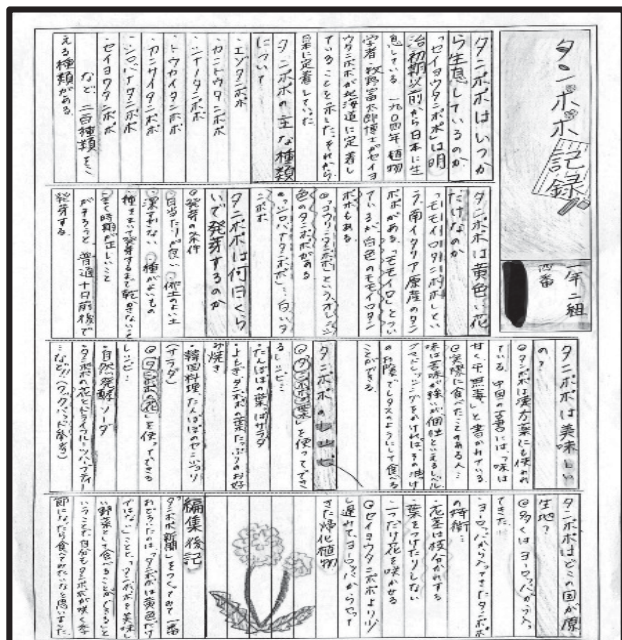
○私たちの地域でも、中学生が中心となっているじめや防犯について考える機会を作ってほしいと思った。PSC パトロールが全国に広まってほしいと思う。

○何も罪のない人々が苦しんで亡くなる戦争は早く終わってほしいと感じた。

○これからの社会にはSDGsを取り入れたものがもっと必要になっていくと思うので、このような人材を育成するのはいい取り組みだと思います。

(6) 新聞作成による学習のまとめ

1年国語「私のタンポポ研究」を読み解き、そのまとめで「タンポポ新聞」を作成した。「私



のタンポポ研究」本文を読んで分かったことや、更に自分で興味を持って調べたことなどを記事にした。タイトルやレイアウト、記事の内容な

どは、生徒に自分で考えさせた。以下は生徒の感想である。

○僕は今までタンポポに興味を持ったことがなかったので、タンポポについて調べるのも初めてで、分からないことだらけだったけど、調べていて楽しかったです。

○授業で習ったことやタブレットで調べたことを自分なりに分かりやすくまとめられたと思います。タンポポについて少し詳しくなった気がします。

(7) 学級活動「健康な生活習慣」

健康安全についての学級活動で、新聞記事を用いて望ましい生活習慣について話し合った。用いた記事は以下の通りである。

- 河北新報「飲酒や中年期の肥満注意」 2016年4月20日
- 河北新報「加熱式たばこの受動喫煙 呼吸器・循環器に悪影響も」 2021年3月26日
- 河北新報「生活習慣の改善 小学生も対象に」 2001年1月31日
- 河北新報「野菜や果物で精神的健康」 2021年12月21日
- 河北新報「依存症に理解と介入を」 2021年12月15日
- 河北新報「カフェインの過剰摂取 含有量飲む前に確認を」 2021年12月23日
- 河北新報「肥満進行で腰痛リスクも増」 2022年9月27日

以上7つの記事を、グループ内で、(なるほど) と思ったところに線を引きながら回し読みをした。そこから分かったことを共有し、最後には今後健康な生活を送るために気を付けたいことをそれぞれまとめた。新聞記事を読み、大事な情報を探すこと、自分の今後の生活につなげようと考えることができた。以下は生徒の感想である。

○今日いろいろな新聞記事を読んでみて、睡眠時間が大切だということ、健康のための食べ物や身体に良くない食べ物などが分かったの

で、今後今日知ったことに気を付けて生活していきたいです。

- これからカフェインの過剰摂取や、栄養バランスなどに気を付けて生活していきたい。
- 無意識に身に付いた生活習慣が細胞を傷付けることが分かったので、良い生活習慣を身に付けられるようにしたいと思った。



(8) 社会科「新聞の『社説』を読む」

3年社会科の公民的分野で、河北新報の社説と向き合う活動に取り組んだ。河北新報の「社説」を読み、分からない言葉を調べてくることを週末課題とした。授業では、班で調べた言葉や用語を共有し、更に理解を深めた。最後に、再度社説を読み、理解できたことや感想、自分の意見などをまとめた。この活動を、1回目は4人班で、2回目は個人で行った。

以下は1回目の活動の後の感想・振り返りである。

- 難しい言葉が多くて、難しいと感じた。
- 大まかな内容はつかめたが、文章の全ては理解できなかつた。
- 「社説」に目を通したことはなかったが、実際に読んでみると面白かつた。

以下は2回目の活動のあとの感想・振り返りである。

- 読んで、調べて、1人でじっくり考えることができてよかつた。
- 調べて読むことで、語彙力を高められ、内容も面白いと感じたので、これからも積極的に読んでいきたい。

○日頃から読んで、受験などに向けて読解力を身に付けたい。

○身近な内容も掲載されているので、「社説」を情報源の1つにしたい。

政治経済、国際情勢など、生徒にとっては難しい内容で、難しい言葉が用いられている社説だが、じっくりと向き合うことが社会的な知識の広がりにつながり、社会や経済への関心の喚起にもつながる。生徒も、この活動が受験に向けての読解力や知識を養うことにつながると実感できていた。

3 成果と課題

(1) 成果

- 実践を通して、生徒に新聞を読む機会を与えることができた。普段から新聞を読まない生徒が多いため、今後も実践を続けていきたい。
- 目的を明確に、生徒の考えや視野を上げさせる活動に取り組ませることができた。例として、「学習に関するアンケート(12月実施)」の「ディベカッションを通して、最終的に、自分の考えや意見をしっかり持つことができましたか」という質問に対して、95.7%の生徒が「よくできた」「できた」と回答していた。

(2) 課題

- それぞれの実践を継続させることができなかつた。1つの活動を継続することで、生徒に身に付いた能力を実感させられるようにしたい。
- 生徒が自ら問題を考えたり、解決したりできるような課題など、生徒が主体的に活動できる実践を考えたい。
- NIEによって、学力向上を図りたい。生徒の読解力や思考力・表現力・情報活用能力などが向上するような実践を考えたい。

(担当 教諭 奈須野 朱里)

新聞を利用した探求活動～SDGsの取組を通して～

1 はじめに

本校では、令和3年度より NIE 実践指定校となり、「新聞を利用した探求活動」をテーマに実践を行ってきた。

NIE の活動を行うにあたって、利府町独自の取組（通称ブラザーシップ活動）との関連を意識して取り組んできた。ブラザーシップとは、町内の小・中・高・特別支援の学校が連携して行う取組のことである。昨年からはブラザーシップのテーマが「SDGs（持続可能な開発目標）に関する取組」ということで、利府町では、SDGs にまつわる取組を各学校で考えている。そこで、本校では、SDGs と NIE を関連付けさせる取組を中心に活動を行った。

2年目の今年度は、前年度の課題である①より多くの生徒が新聞に関わる機会を設けること②学校全体で取り組める活動を通して、探求活動の充実を図ることの2点に重点を置いて実践に取り組んだ。

2 実践の概要

(1) NIE コーナーの充実

1年目は、家庭での新聞の普及率が低いという現状から、全生徒が通る職員室前の階段スペースに新聞閲覧コーナーを設置し、まずは新聞に親しみをもってもらうことから始めた。生徒だけでなく先生方の利用も見られ、新聞に触れるきっかけとなる取組となった。

課題としては、時間が経つにつれて、生徒たちの興味が薄れてしまったことや階段スペースという場所が立ち止まって見るには人通りが多く、じっくりと読むことができなかったことである。

そこで2年目は、新聞に親しむ時間と空間を確保するため、階段スペースから図書室へ変更した。場所を移すことで、新聞を読む一人当たりの時間が大幅に増え、新聞自体の興味から内

容への興味へと変わっていったことがうかがえた。

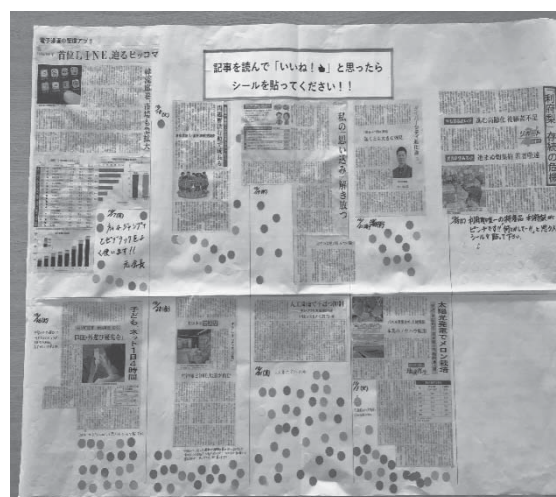
また、ただ閲覧コーナーを設置して終了するだけでなく、閲覧した生徒個人の感想を共有するコーナーを設けた。（新聞記事「いいね」投票）この活動は、投稿型 SNS のインスタグラムの「いいね」から着想を得たもので、情報を「受信」するだけでなく、それを踏まえて自分の考えを「発信」させることで、より興味や関心を抱かせることがねらいである。

活動の概要は以下の通りである。

- 1 1日につき1つの記事を図書室に掲示する。
- 2 その記事を読んで気になった（関心をもった）場合はシールを貼る。



- 3 記事は、一週間単位で掲示し、どの記事に何人が反応を示したかを「見える化」した。



(2) 各教科での新聞の活用

昨年度は、総合的な学習の時間において、新聞を活用した探求活動を行った。今年度は、国語や道徳など、さまざま教科で新聞を活用した学習活動を行った。

【国語】

単元名：「根拠を明確にして書こう」(東京書籍)

活動内容

新聞記事の内容を読んで、2枚ある写真のうちのどちらの写真も挿入するかを選択する。その際、なぜその写真を選んだかを、選んだ根拠を明確に示して自分の意見を書く活動を行った。新聞というメディアの特性を考えたり、どちらの写真が良いかを議論したりすることで、ほとんどの生徒が積極的に自分の考えを筋道立てて書く活動に結び付けることができた。

【道徳】

教材名：「ごみ箱をもっと増やして」(東京書籍)

活動内容

「ごみ箱は町に置く必要はない」という新聞の投書欄の意見を読んで、ゴミ箱が必要かどうかについて、自分の生活などを振り返って考えさせる活動を行った。活動の中で「環境をよくするために必要なものはゴミ箱の数ではなく、ゴミ箱にきちんと捨てようとする意識だ」ということに気付くことができた。新聞を通してよりよい社会について考えるきっかけとなった。

生徒の感想

- ・みんなが暮らしやすい世の中にするためにルールを守って生活することが大切であると思った。
- ・ごみ箱を増やすことで、公園などがきれいになればと思った。ルールやきまりは今の自分たちにとってすごく必要だと感じた。
- ・今回の授業でゴミ箱という誰もが当たり前にある存在についてしっかり考えることができた。ごみ箱がないとルールを守れない人が環境をくずすことが分かった。ルールの存在が大切だと分かった。

【総合的な学習の時間】

活動内容：「河北新報の方による出前授業」

活動概要

本校の1年生が毎年行っている行事の一つに「利府町内の自主研修」がある。その活動報告を新聞形式でまとめた。その際、どのようにまとめたらよいか、どんなことをまとめればよいかを実際に河北新報の方に講義していただいた。写真の撮り方や見出しの重要性など「現地で学んだことや感じたことを効果的に他者に伝える方法」を中心に話していただき、質の高いまとめ学習を行うことができた。

活動の流れ

【1～3時間目】町の特色を調べる(調べ学習)

【4時間目】新聞作りの講話



記事は書かれている内容によって掲載する場所や文字数が異なることを全体で確認(左写真)

実際に新聞記者になったつもりで昔話「桃太郎」に見出しを付ける活動(右写真)



【5～12時間目】研修コース作り・課外活動

【13～20時間目】新聞作り・学年発表】



まとめ学習は
研修メンバー
(5人程度)で
行った。

記事の内容や
構成の検討
(2時間)
下書き
(2時間)
清書
(2時間)
の流れで活動
を行った。



完成したものをプロジェクターに投影し、活動内容を発表した。

(3) SDGs新聞の作製

前年度、本校の3年生を対象に実社会で「SDGsがどのように実践されているか」を、新聞を使って調べ、ワークシートにまとめた。今年度は、全学年が取り組めるように各専門委員会にSDGsを意識した活動ができないかを呼び掛け、考えた内容や取り組んだ内容を「西中SDGs新聞」と題して発行し、全体に周知した。

【活動の概要】

- 1 生徒会執行部が、各専門委員長に SDGs の取組について考えてもらうように依頼。
- 2 専門委員長が1・2・3年生の意見を募り、集約。これまで実施した活動やこれから行っていく活動を執行部に報告。



- 3 集まった内容を執行部がまとめ、「SDGs新聞」を作成し、発行。新聞は昇降口に掲示し、SDGsにまつわる活動に全体で取り組んだ。



【各委員会が考えた SDGs の取組】

1 学年委員会

→SDGs の取組をした生徒やクラスにスタンプを押すスタンプタワーの実施

2 学年委員会

→電気の消灯や暖房のチェックに関する呼び掛けやポスター作製

3 学年委員会

→再利用ボックスの設置
(使わなくなったプリントを裏紙として再利用する)

生活委員会

→チャイム前着席の声掛け

環境委員会

→省エネ (節電や節水) の呼び掛け

美化委員会

→水道・トイレをきれいにするポスター作製

図書委員会

→破れた本を展示し、物を大切にする啓発活動を行う。

福祉委員会

→エコキャップ回収の強化

放送委員会

→各委員会の取組の紹介

給食委員会

→給食センターの方にインタビューし、放送や呼び掛けを通して残食を減らす

保健委員会

→感染症予防の呼び掛け



3 成果と課題

(成果)

・情報の受け手だけでなく、収集した情報を活用し、発信することで新聞の興味や関心を更にもたせることができた。(NIE コーナーの充実から)

・「記事の内容について」や「記事に書かれてある人について」など、新聞を様々な視点で教材研究を行うことで、前年度に比べ、多教科にわたって授業実践を行うことができた。特に「話す・聞く」「書く」「読む」といった言語活動の学習に有効であることが分かった。また、授業で活用することで、生徒だけでなく教員も新聞というメディアが貴重な学習ツールの一つであると気付くきっかけとなった。(各教科での新聞の活用から)

・「新聞を作る」という活動を通して、学校全体の取組として実施することができた。また、新聞を発行することで、SDGs の活動が生徒にとって身近な問題として感じさせたり考えさせたりすることができた。

・新聞を作成することで情報をまとめる力や情報を適切に扱い、表現する力が身に付いた。
(SDGs 新聞の作製から)

(課題)

・NIE コーナーは、場所を固定すると読む人も固定されてしまうので、場所を増やしたり定期的に移動したりすることで、更に多くの利用が見込めたと感じる。また、毎日更新する記事の掲示を教員主導でやっていたが、図書委員や学年委員など生徒の協力も得られるとより新聞や図書室の利用者が増えたのではないかと感じた。

・授業の活用について、前年度に比べ、活用する教科が増えたものの、全学年の使用とまではいかず、利用が限られてしまった。研修会や話し合う場を設け、新聞の活用の仕方を全教員が考えることで更なる可能性を見出していくことが今後の課題である。

・SDGs 新聞の活用について、今回の SDGs 新聞の発行は一回のみの発行であった。生徒の変容を把握したり、活動の充実を図ったりするためには、定期的な発行が有効であったと感じる。継続的な活動の積み重ねを通して、NIE 活動の充実を図っていきたい。

(担当 教諭 山家 渉)

新聞に触れ、社会に触れる習慣作り

1 はじめに

本校は、「誠実・自律・奉仕」を校訓とし、地域社会で活躍する職業人の育成を目指している。そのために、「栗原版デュアルシステム（文部科学省推進事業モデル校。企業での長期実習や起業家研究を行う。）」や資格取得に力を入れることで、生徒一人ひとりが豊かな経験を積めるような取り組みを行っている。NIEの活動もその一つである。NIE実践指定校となって1年目の今年度は、「新聞に触れる機会を増やす」「新聞の有用性を生徒が実感する」ことを目指して実践を行った。

2 実践の概要

(1) 出前授業「新聞の読み方講座」

4月15日、河北新報社の末永記者から「新聞を読むことの価値」「効果的な読み方」についてお話をいただいた。生徒は新聞を手に、真剣な表情で記者の話に聞き入っていた。11月に行った生徒対象アンケートでは、「最も印象に残ったNIE活動」の一つとして挙げられていた。NIE活動初期の導入として、読み方のレクチャーは効果的であったと言える。



(2) 新聞スクラップ～ONLINE～

5・6・9・10月には「NIEコーナー」として当日の新聞5紙を生徒昇降口前に展示し、生徒が登下校の際に各紙の一面を見ながら通行できるようにした。また、過去の新聞はクラス毎に回覧し、休み時間や放課後にじっくりと読め

るようにした。回覧が終わったものは図書館前にアーカイブとして保管した。

本校では全校生徒が一人ひとり専用のGoogleアカウントを持っており、各種サービスを利用することができる。その一つの「Google Classroom」を活用して、「新聞スクラップ～ONLINE～」の実践を行った。手順は次のとおりである。①NIE担当教員が毎週「NIE課題」を送信する。その際、週ごとに記事選定のためのテーマ（政治・経済・環境・地域ニュース等）を設定する。②生徒はテーマに沿った記事の写真をスマートフォンで撮り、コメントとともにGoogle Classroomに投稿する。

9/1 河北新報

確かに風力発電や太陽光発電は化石燃料を用いないため環境に優しい。原子力発電のように万一の事態で甚大な被害を与えることも無い。しかし、発電のために広大な土地を必要とすることや、騒音、景観を損ねることなどが考えられる。新設する際は、地域住民との綿密な話し合いが必須だと思う。また、なぜ東北が今回トップになったのか、詳しい要因を調べてみたいと思った。

生徒が投稿したもののフィードバックは、次のように行った。優秀作品を共有し、講評コメントや新聞の活用方法のコラムなどを配信した。

★先週のナイス文章★

添付画像をご覧ください。ナイスなポイントは、「記事の中のどこに目をつけたかが分かる」「最後の一文が『意見』になっている」の2つです。〇〇すべきだと考える・〇〇について今後も注視していきたい……等、「感想」から「意見」にステップアップしていきましょう。

★差がつく！読み方★

記事を読んでいると、分からない漢字や用語が出てきたことはありませんか？ぜひ「その場で」調べてみましょう。記事の内容と調べたことがリンクされるので、普通に暗記するよりも漢字や用語を覚えやすくなりますよ。

オンラインならではの良い点として、①記事の切り貼りの手間がなく手軽であること、②生徒の投稿を複数の教員が確認できることが挙げられる。課題としては、提出率が振るわなかつ

たことや教員同士の協力体制などの今後検討すべき点が見つかった。

(3) いっしょに読もう！新聞コンクール

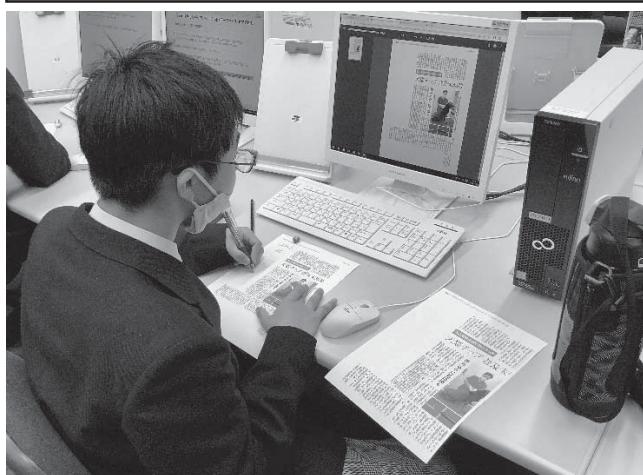
国語科の夏休み課題として全校生徒に取り組み、文化祭で校内コンクールを開催するとともに、作品を当コンクールに応募した。結果、本校生徒がコンクールの「奨励賞」を受賞した。

(2) の新聞スクラップ～ONLINE～で自分の意見を述べる練習を行うことを第一段階とし、第二段階としてこの課題では他者の意見を聞き取り、さらに自分の意見を発展させて考えるというステップアップをすることができた。

(4) 1 学年 LHR 「新聞に親しむ」

授業で新聞を扱う 2 年生・進路活動で新聞を読まなければならない 3 年生に比べると、1 年生の意欲は他の学年より低いことが現状である。そこで新聞をより身近な存在として捉えてもらうというねらいでこの授業を設定した。手順は次のとおりである。

- ① 河北新報データベースにアクセスする
- ② 好きなキーワードで検索し、記事を見つける
※ 「ラーメン」「好きな野球選手の名前」等自由に
- ③ 記事を印刷し、印象に残った部分にサイドラインを引く
- ④ 記事の内容とサイドラインを引いた箇所について生徒同士で共有する



この活動の成果として、生徒にとっての新聞のイメージが変わったことが挙げられる。数ある記事の中から好きなことや興味のある話題を探すことの楽しさを実感させることで、新聞に対して親近感を持たせられた。しかし、紙の新

聞の良さもある。めくっていくうちに思いがけない記事との出会いがあるということを伝え、本時は終了した。終始生徒たちが楽しそうに新聞記事と向き合っていた姿が印象的だった。

3 来年度に向けて

11 月に、生徒向けアンケートを行った。「昨年度（令和 3 年度）と比べて、新聞を読む頻度はどう変化したか。」

	%
増えた	26.8
どちらかといえば増えた	28.9
変化なし	35.1
どちらかといえば減った	7.0
減った	2.0

という質問に対しては以下のような結果となった。

「増えた」「どちらかといえば増えた」と答えた生徒が全

体の半分以上を占めた。新聞を読む機会を昨年度よりも多く提供できたことは成果の一つと言える。昨年度は、新聞を普段ほとんど読まないという生徒が約 3 割いたが、今年度は約 2 割に減少した。しかし、全校生徒数が 100 人程度の本校にとって、「ほとんど読まなかった」生徒が 2 割というのは大きい数字である。一部の生徒にとって新聞はまだ遠い存在であると言える。

今年度の課題を受けて、来年度、新聞を活用した学びを更に深めるために、二つ視点を設定した。視点の一つ目のキーワードは「目的意識」「基本ルーティン」とした。生徒に新聞を読ませるとき、身近な目標や課題を意識させることが主体性を高めるために必要なことだと感じた。新聞を読むことに慣れてきたら、読んで自分の考えを整理するだけでなく、要約や SDGs との関連など、様々な角度から考えさせるルーティンを作っていきたい。視点の二つ目のキーワードは、「自分事」「情報の受信者から発信者へ」「未来につなげる」とした。私は 8 月に宮崎県で行われた NIE 全国大会に参加したが、これらは宮崎大会のほぼ全ての実践発表に通じるものだった。ぜひ本校においてもそのマインドを教員・生徒に広げていきたい。

(担当 教諭 齋藤 萌奈)

情報収集と情報発信の軸となるN I E活動

1 はじめに

本校では総合進学コースを中心に、2011年度から「総合的な学習の時間」を拡充し、自前で教材を作成し探究的な学習に取り組んできた。

2020年度からは「総合的な探究の時間」として、更に取り組みを充実させるため、探究のプロセスで重要な情報収集(インプット)と情報発信(アウトプット)の方法と実践を課題とし検討を重ねた。

生徒は日常的にほとんどの情報をインターネットから得ている。教員から取材やインタビューをするように促しても、よほどの動機がない限り、行動する生徒はわずかである。情報発信に関しても、スライドを使用した簡易なプレゼンテーションが多く、じっくりと自分の考えを構築する習慣が無いのが実情である。

こうした問題を解決する方策として、N I Eに取り組むことにした。「新聞記事を読む」ことを通して情報収集し、「新聞記事を書く」ことを通して情報発信することを目指した。

2 情報収集(インプット)の取り組み

(1) 概要

本校の主な「新聞記事を読む」取り組みとして、朝活動と公民科の授業の時間を活用し、特色のある使い方を試みた。

(2) 朝活動

本校の朝活動は、毎朝のSHR前の約10分間の学習活動のことである。今年は5月と10月に、「新聞記事をもとに1分間スピーチ」を、高校1学年と2学年で実施した。実践指定校に支給されている新聞の中から、生徒が自分で選んだ記事をもとに、短時間のスピーチをするだけだが、他のクラスメートの関心事や考えに触れることにより、自分自身の関心事は何かということについて考えるきっかけとなっている。関心のある記事を探すと

時に、様々な分野の新聞記事に触れる機会となっており、他の探究活動の準備にもなっている。

更にスピーチに使用した原稿をもとに、家族やクラスメートとディスカッションし、その過程をまとめた文章を、「いっしょに読もう!新聞コンクール」に応募した。

(3) 公民科の授業

「現代社会」及び「政治・経済」の授業では、月に1回のテーマ学習を実施している。

今年度は、「民主主義は最良の政治体制か」、「死刑制度の存続か基本的人権の擁護か」、「能力給か年功序列か」、「富裕層への増税か消費税の増税か」などの論争的なテーマについて取り組んだ。教員側から賛否両論併記のワークシートを提示する。少人数のグループでファーストインプレッションを交換し、テーマに対する自らの疑問点を2~3つ考え出す。これらの疑問点について調べ、自らの考えを組み立てる時の論拠とするが、その際に新聞記事にあたることを条件の一つにしている。なお本校では、朝日新聞提供の「朝日けんさくくん」(新聞記事検索エンジン)を採用している。同時に50回線のアクセスが可能であり、授業中の使用に適したツールである。

3 情報発信(アウトプット)の取組

(1) 概要

本校の主な「新聞記事を書く」取り組みとしては、「総合的な探究の時間」で基本的なスキルを学び、修学旅行や公民科の授業でその技能を活用している。

(2) 総合的な探究の時間

本校では高校2学年の「総合的な探究の時間」において、毎日新聞社提供の「記者トレ」を採用し、新聞記事の読み方・書き方の基礎

を訓練し、その成果を修学旅行の事前・事後学習の情報発信に活用している。

①「記者トレ」の構成

- ステップ1：キーワードを探す
- ステップ2：見出しをつける
- ステップ3：言葉で表現しよう
- ステップ4：情報を整理する
- ステップ5：インタビュー記事を書く
- ステップ6：特集記事を書く
- ステップ7：記事についてプレゼンする
- ステップ8：振り返りと自己評価

②「記者トレ」を使用して

本校では今年度から採用したこともあり、ステップ1から順番通りに使用している。

ステップ1とステップ2は新聞記事を読み込むことが大切なパートである。テキストに掲載されている、政治・経済や社会、国際や暮らしなど、様々な記事の中から関心のある記事を読み、キーワード(重要だと思うことば)をいくつか選び出す。その複数のキーワードを組み合わせて「見出し」をつけるが、同じ記事を読んでも、生徒それぞれの視点や受け取り方によってバラエティーに富んだ「見出し」が生み出される。

このパートの最後に「見出しコンテスト」を各クラスで行ったところ、ユニークな「見出し」が多くのクラスで話題となった。

ステップ3はラジオ番組のリポート原稿を書くという、「記者トレ」の中ではユニークなパートとなる。パンダやカピバラなどの動物の話題や、カレーなどの食べ物についての新聞記事をもとに、ラジオのパーソナリティーになったつもりで柔らかい表現を考える訓練である。このパートも各クラスでの発表会を実施し好評であった。

ステップ4は、警察の広報文とその事件の新聞記事を読み比べ、足りない情報は何かを考えるパートである。記事を書くにあたり、最も大切な情報は「5W1H」であり、これを意識しながら文章を書く習慣を身に付ける上で、重要なワークである。

ステップ5「インタビュー記事を書く」は、生徒が個人で取り組む部分としては最重要のパートである。充実したインタビューになるかどうかポイントであり、そのための入念な準備が必要となる。そこで取り組むのが「私のキーワード」を使用したペアインタビューである。

ペアインタビューをする前に、生徒が各々自分に関するキーワードをワークシートに約100単語書き出し、それを交換し、質問を約10問考え出しておく。その際に注意すべきこととしては、「はい」「いいえ」で答えられる質問ではなく、答えによって認識が深まり、更に新たな質問を考えられる質問を考えることである。このペアインタビューをもとに記事を書いたが、お互いの人柄や隠れた魅力を発見する機会となり、クラスが暖かい雰囲気になった。

ステップ6「特集記事を書く」のパートは、修学旅行のグループでの事前・事後学習のまとめとして使用した。学習の過程で深く調べたことや現地で取材して分かったことなどを、特集記事としてまとめている。個人ごとに執筆するインタビュー記事と異なり、基本情報・歴史・調べて分かったこと・トリビアなどをグループで分担して執筆するため、グループ内の編集会議が重要な場面となる。限られた紙面、文字数の中で、何を記事に入れ、何を外すかについて活発なやり取りが見られた。

4 課題と今後の展望

一連の取り組みの過程で、河北新報社の末永智弘記者に新聞の読み方について講演をいただき、「河北新報社新聞記事コンクール」に取り組んだ。今後は新科目「公共」で「新聞を読む」活動を設け、社会の出来事を自分事として考え、自分の考えを構築し表現する機会を更に増やしたいと考えている。

(担当 研究研修部 教諭 森田 寿)

NIE 活動の取り組み、課題と展望

1. はじめに

(1) 学校について

本校は全学年8クラス、総計24クラス956名の男女共学全日制普通高校である。各学年1・2組は理数科、3～8組は普通科である。特にSSH指定校としての活動は多岐にわたり、先端的な授業や取組を多々行ってきた。生徒の進路はその多くが国公立大学を中心とした四年制大学への進学者がほぼすべてを占める。受験を見据えた授業構成をしつつも、それに止まらない視野の広さ、公民的資質育成等に向けてNIEが寄与するところが期待される。なお本校ではすべての生徒に対してクロームブックが配布・貸与されており、インターネットでの情報収集やオンライン学習ツールの利用が盛んになっている。

(2) 生徒の新聞接触状況について

生徒106名(1学年40名、2学年37名、3学年29名)に対して、新聞の購読率や新聞の活用経験等について尋ねたアンケートのうち一部の質問結果は以下のとおりである。前提として半数の家庭で新聞を購読していながらも、生徒自身が新聞を手にとって読んだ経験につながるものではないことがうかがえる。特に過去一年間でまったく読んだことがないとする生徒も一定数いる点は、公民的資質の形成という教育上の目標と照らして大きな課題であると捉えられる。

- ・家庭として新聞を購読しているか。

家庭として購読していない	56
家庭として購読している	50

- ・過去一年間に新聞を読んだことがあるか。

読んだことがある	89
読んだことがない	17

- ・小中学校における取組について

学校に生徒向けとしての新聞が毎日配達されており、それを活用した取り組みもあった。	14
学校に生徒向けとしての新聞が毎日配達されていたが、それを活用した取り組みはなかった。	39
学校に生徒向けとしての新聞は配達されていなかったが、新聞を活用した取り組みはあった。	20
学校に生徒向けとしての新聞は配達されておらず、新聞を活用した取り組みもなかった。	32

小中学校における取組については比較的多様でありながらも何らかの取組や生徒向けの新聞があったと回答する生徒が多い。新聞に対する意識はありながらも、日常生活に浸透していないことがうかがえるため、学校において新聞を閲読する習慣やその価値に気づかせる取組が求められる。これを踏まえて活動と取組について述べる。

2. 活動・取組について

本校では主に探究の授業を中心に情報収集や調査の過程で信頼できる情報源として新聞を位置づけ、生徒の閲読機会の創出を促した。2学年においては探究活動と並行して「現代社会」の授業において、一定のテーマに基づいた報道記事の収集を通じて新聞を活用した。その他、主な活動内容は以下のとおりである。

1年生 (全体)	「探究」の授業において、探究テーマ設定に際して、関連情報を新聞から収集し、保存する取組。
2年生 (普通科)	「現代社会」の授業において、教科書内容の発展的理解を目的として、テーマに沿った新聞記事を探し出し、要約・分析をまとめる取組。 「探究」の授業において、探究テーマの先行研究把握や展望の検討に際しての情報収集の取組。
3年生 (一部生徒)	小論文指導や面接指導等の際における時事問題をテーマとした問題演習等。

作成時にもこうした情報の活用が期待される。2学年においては新聞のみにとどまらず、白書や統計資料、関係機関や自治体のホームページ、書籍・雑誌、実験結果、論文といった情報源と並行して報道記事を探る取組を行った。またその取組に先立ち、論文検索ツールや各種情報源の提示と並行して新聞を読み解くリテラシー等についても講義を行った。後述する各メディアへの信頼性という点を少なからず意識する契機になったと思われる。



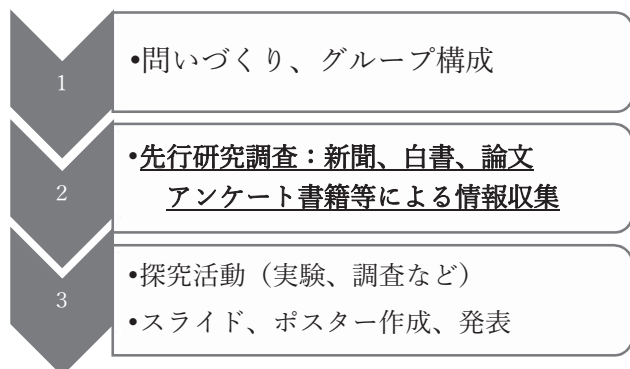
(1) 1年生・2年生 「探究」の取組

購読している新聞各紙は主に、1・2学年の「探究」において活用された。探究の進行としては以下のような流れを経て、特に情報収集段階において、広範な情報源に触れるため、その一環として新聞を活用した。1年生から2年生にかけては探究のテーマが単にグループの問題関心に基づいているのみならず、社会的に意義のある探究であることが求められる。各自のテーマが、社会的にどう位置づけられているかの把握の一助として新聞を活用した。具体的には、1学年において、新聞記事に目を通し、クロームブックに記録を残す形とした。その後のテーマの深化や2・3学年の探究活動における論文

写真：2学年「探究」の授業における「情報収集」の講義スライド



写真：全学年「探究」の授業成果の発表



(2) 2学年「現代社会」の取組

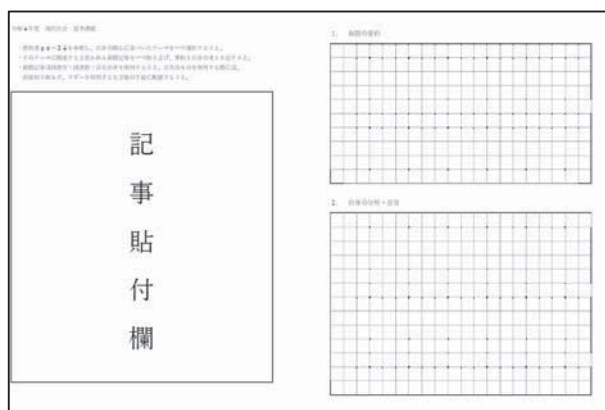
2学年の現代社会においては教科書冒頭に位置する「現代の諸課題」の部分で新聞の活用を促す課題を課した。生徒の多くは再生可能エネルギーなど環境問題や生殖補助医療などの問題についての記事を探しまとめている姿が窺えた。特に環境問題に対する関心は強く、かつ地元や

近隣県に関わる再生可能エネルギーの動向などはよく取り上げられていた印象である。

読み込み、読解し、分析を述べるという経験が好評であった一方で、取組が一過性のものとなってしまった点、新聞に対する継続的な興味関心の喚起につながらなかった点は反省点として挙げられる。

● 諸課題		● 倫理	
第1章 地球環境を考える		第1章 青年期と自己形成	
星山資本主義	6	人間とは何か	
1 地球環境問題	8	1 生涯における青年期の意義	
2 地球環境問題への取り組み	13	2 青年期と自己形成の課題	
3 資源・エネルギー・人口問題	17	3 職業生活と社会参加	
第2章 科学技術の発達と生命		ACTIVITY 高校生の社会参加 ジュニア・インターンシップに参加してみよう	
デザイナーへビー	24	4 現代社会と青年の生き方	
1 現代の医学が問う生死のあり方	26	第2章 他者と共に生きる倫理	
2 生命科学の発展と倫理	29	Introduction 哲学の誕生	
3 高度情報社会の現状と問題点	32	1 キリシヤの思想	
		2 宗教の教え	
		3 人間の尊厳	

図：2学年「現代社会」目次



図：2学年「現代社会」課題プリント

3. 生徒の新聞・メディアに対する意識と課題

(1) 情報の信頼性に関する生徒の意識

一連の活動を経て、生徒へ改めて新聞に対する意識や活用状況を尋ねたアンケート結果を元に生徒の意識と課題について述べる。

まずアンケートにおいては、中心的に活用した探究活動を念頭に、各メディアの情報源の信頼性について認識を尋ねた。項目は既存の調査を参考にしつつ、5点満点でそれぞれのメディアの信頼性を質問した。

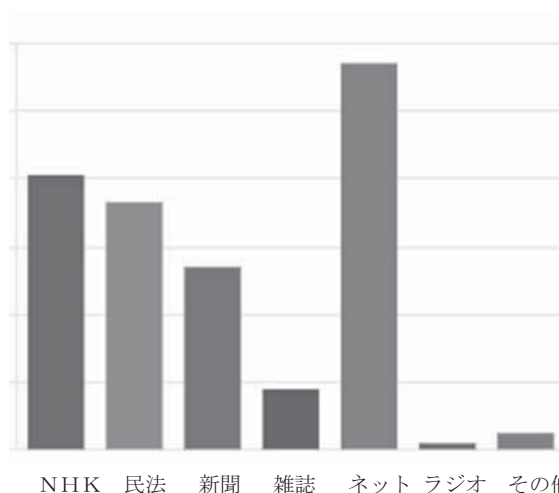
NHK	民放	新聞	雑誌	ネット	ラジオ
3.7	3.4	3.8	3.3	2.5	2.6

表：生徒のメディアに対する信頼性について
問：「信頼度についてどの程度と思うか回答してください。5はとても信頼できる・探究や論文などに活用できるレベル。1はほぼ・まったく信頼できない、探究・論文への活用が難しいレベル。3はその中間とします。」生徒106名の平均値として。

結果からは、NHKのニュースや新聞についての信頼性が高い事がうかがえる一方で、ネットメディアについては扱いに慎重な姿勢が見て取れる。探究活動ではまとめた成果に対して教員や他の生徒、学校外の人々から質問を受ける機会が多くなるため、その際の根拠として論文や統計を扱いながら情報の信頼性についても考える機会が多くなったと推察される。

(2) 生徒の普段のメディアへのアクセス態度

これに対して、各メディア別のアクセス経験を見てみると以下のようなになる。



図：生徒のメディアへのアクセス経験について
問：「最近一年間を振り返って、ニュースや時事問題の情報取得のためにアクセス・利用したことがあるメディアをすべて選んでください。」

二つの結果からは、インターネットメディアは信頼性に乏しいことを認識しながらも、日常的にはニュースや時事問題に関する情報取得にインターネットを利用している生徒の姿がうか

がえる。またその理由は主に利便性と速報性であり、他のメディアとの比較検証という視点は普段の生活においては備わっていない。

なお入学直後の1年生や受験を控え小論文指導等の機会が増える3年生もアンケートの対象に含めたものの、新聞を読む必要性を感じる生徒の割合は学年ごとに顕著な違いは見られなかった。最後に、この1年間で新聞を読んだ方がいいと思うようになったかどうかに関する自由記述の回答は以下のとおりである。

A 新聞を読んだ方が良く考えるようになった	B 新聞を読まなくてもいいと考えるようになった
<ul style="list-style-type: none"> ・世の中の動きを非常に早いスピード感で知ることが出来るから。また、文字量が多いため、速読力を身につくと考えられる。 ・探究で新聞スクラップが必要になるし、情報収集にもなる。 ・新聞は自分が興味のないものでも目に入って興味を持つことがあったり好きな時に見ることができるといふ利点がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞とニュース番組の情報の違いをあまり把握していないので、テレビでいいやと思ってしまう。 ・わざわざお金を払わなくてもTVニュースやネットニュースを活用すれば情報が得られる。 ・新聞の独自性、新聞じゃないなきゃいけないとは感じなかった。

表：生徒の新聞に対する意識

問：「直近一年間における新聞に対する意識として最も近いものを選んでください。」

Aは「読みたい・読むべきと考えるようになった・読んだ方がいいかなと考えるようになった」の自由記述

Bは「読まなくてもいいかなと思うようになった・読むべきでないと思うようになった」の自由記述

4. 展望

生徒はインターネットの情報の信頼性が低いにも関わらず、普段の生活においてはネット中心の情報収集を行っている。また新聞の信頼性や価値はある程度認識しながらも読書習慣の形成や情報源としての徹底した活用に至っていない。この他、当初の仮説として、3学年は受験

を控え、小論文に関わる機会も多くなることから、新聞や時事問題への関心が他学年よりも高まるのではないかと考えたが大きな差異は見られなかった。

NIEの活動に際して、授業において新聞活用の機会を設けるのみでは、一過性の取組になりがちであり、継続的な新聞の読書習慣や複数メディアの比較を通じた多角的な検証につながっていかない。これに伴い、教員側の反省事項として指摘された点として、新聞を読ませる機会を設けて、新聞に親しませる、価値に気づかせるといった教員側の意識からもう一段階精度を上げた指導と視点が必要であるという事項がある。より緻密に、ネット情報や論文など他の情報源との関連の中で新聞の最適な活用方法を見出させる必要があると思われる。すなわち、新聞のみならず情報の収集や取り扱いといった俯瞰的な視点からカリキュラムを構築し、どのような機会・目的の際に新聞が最も生きるかを考えさせること、および授業の一環という枠を越えて社会や生徒各自の進路等において要請される一般教養や知識の獲得として有用である点を実感させることが求められる。

取り組みを通じて生徒以上に教員側の意識変容が必要であることを痛感しつつ、同時に現代における新聞というメディアの位置づけや性格についても熟考を促されるものとなった。その中でも探究活動においては、より一層の活用の余地がうかがえる点は関係教員の認識が一致した。次年度以降は、新聞に関する課題を課すという発想と並行して、探究の過程で各メディアや情報源を丹念に比較検証していく授業構成や進路指導や他教科等多様な分掌とのより緊密な連携を意識して成果を発展させていけるよう努めたい。

(担当 教諭 片平 敏誌)

V 第27回 NIE 全国大会宮崎大会参加報告



第27回 NIE 全国大会宮崎大会（日本新聞協会主催）が令和4年8月4～5日、宮崎市で開催されました。「今を開き 未来を拓く NIE」をスローガンに、全体会や公開授業、実践発表、大学と新聞社の共同発表など16のプログラムが行われました。全国から教育、新聞社関係者ら1、100人が集まり、本県から実践指定校教諭や NIE アドバイザー、事務局14名が参加しました。分科会に参加した実践指定校の担当者からのレポートを抜粋して紹介いたします。

3年ぶりの対面式での開催となった。1日目の全体会でのパネル討議では、新聞協会 NIE コーディネーターの関口修司氏や地元高校教諭、高校生らが登壇し、児童・生徒の読解力を伸ばすための学校現場での実践例などを巡り意見交換した。高校教諭は、毎週生徒が新聞記事スクラップに取り組む実践を報告。3年間続けることで「生徒の記事に対するコメントが感想から意見に変わり、自ら次の『問い』を見つけられるようになった」と紹介した。記事スクラップを経験した高校生は「毎週取り組むことで習慣化できた」と振り返り、記事に触れることで、さまざまな社会課題に対し自分の考えを伝えることができるようになったと話した。関口氏は、論理的な文章を読み取ったり、情報収集し課題解決の方法を見いだしたりする力を育むことが求められていると説明。地域に精通した記者と子供が交流する学びの実践も報告され、学校と新聞社との連携がさらに重要になるとの提案が出された。

その後、旭化成名誉フェローでノーベル化学賞受賞者の吉野彰氏による「リチウムイオン電池が拓く未来社会」をテーマに記念講演が行われた。

2日目に行われた分科会は下記のとおりである。参加者は各分科会の内容をレポートにて報告した。

分科会	発表形態	発表のテーマ	発表校	指導者
A	公開授業	宮崎発見隊 ～県の特産物を調べよう～	生目台小学校	郡司美和子指導教諭
B	実践発表	社会の様々な事象を自分事として考え、行動する力を育成するNIE ～日々の教育活動の中での取組を通して～	八代中学校	柿木一光教諭
C	実践発表	心と心をつなぎ、生きる力を蓄えるNIE	日之影小学校	田崎香織教頭
D	実践発表	新しいものさしで考える ～新聞を通して考える3年間～	宮崎第一中学校	織田浩輔教諭
E	公開授業	新聞スクラップの活用 ～汎用性のある発展を目指して～	宮崎大宮高等学校	五反田聡教諭
F	公開授業	情報生産プロジェクト ～学校紹介新聞を創造しよう～	宮崎大学教育学部附属中学校	鬼塚拓教諭
G	公開授業	わたしと宮崎 ～宮崎の魅力発見～	宮崎大学教育学部附属小学校	荒川ひかり教諭
H	実践発表	日本語を身に付け自分の意思を表現できるようになるために～新聞を用いた実践～	都城さくら聴覚支援学校	佐藤綾 治田隆宏 田中亜紀 各教諭
I	実践発表	学力向上とNIE ～読解力向上の取組を通して～	油津小学校	福島和馬教諭
J	実践発表	パブリックディベート「令和の新聞購読率低下を救え！ ～未成年の私たちから提言～」	宮崎西高等学校 宮崎西附属中学校	木幡佳子指導教諭
K	公開授業	工業高校におけるNIE実践 ～AI（人工知能）と労働	宮崎工業高等学校	渡会健広教諭
L	公開授業	「身近な地域の調査」～国富町の将来を考える学習を通して～	本庄中学校	山本健太教諭
M	共同発表	大学教育とNIE ～情報消費者から情報生産者へ～	宮崎公立大学 宮崎日々新聞社	四方由美教授 倉真一准教授 他2名 日々新聞社から2名

レポート① 分科会 A と G

東松島市立矢本東小学校 川綱 義朗教諭

私は、NIE 全国大会に三つの目的で参加した。一つ目は、NIE 活動をどのように学校の教育活動に取り入れているか。二つ目は、どのように新聞を取り入れながら授業を実践しているか。三つ目は、どのようにして先生方に NIE 活動を広めているかである。分科会では、二つ目の目的である「学習の中に新聞を活用する方法」について学ぶ機会となった。また、6 学年担任をしており、分科会 2 部がこれから学習する「会津若松市の魅力を探るための修学旅行」の内容に似ているのでとてもよいタイミングであった。



分科会 A の授業の導入では、玉ネギの名前を児童が予想する。児童は、見た目から「新玉ネギ」「カブ玉ネギ」「白玉ネギ」などを発表した。また、市販されている玉ネギと比較させた。写真の玉ネギの名前を「空飛ぶ新玉ネギ」と提示することで児童の関心が高まり、どうしてそのような名前が付いたか児童が自ら課題を考えた。展開では、課題を解決するために、「空飛ぶ新玉ネギ」の名前の由来が掲載されている地元の新聞記事を児童に配布した。児童は、新聞記事にサイドラインを引きながら、名前の由来を探した。児童は、新聞記事から「歴史」や「生産者の思い」、「インパクトのある名前を付けた」などと発表した。さらに、味についても、他の玉ネギよりも辛みがなく柔らかくて甘い理由として、日照時間の長さを生かしているという答えを記事から導き出した。児童の調べ学習の結果から玉ネギの名前の由来は「生産者の新鮮な状態で早く届けたい思いと飛行機で野菜を大阪へ届けたという歴史から付いた」とまとめた。

この学習から、取材に基づいた新聞記事を活用することで、事実だけでなく、取材による生産者の生の声や思いも伝わってくるのが分かった。児童は、学びを深める上でとても効果的に新聞活用をしていた。また、新聞の文章を読み取りなが

ら学習をしているので、読解力も身に付くことが分かった。

分科会 G は、クイズで新聞記事の写真を手がかりに見出しを考える。導入では、「宮崎の活性化のために、宮崎の魅力を再発見し、その魅力を発信



すること」をテーマに、最初の宮崎の魅力を考えた。ゴルフやマンゴー、サーフィン、自然などが挙げられた。また、宮

崎を訪れる修学旅行の新聞記事から宮崎の魅力を探る。「スキーをする宮崎県内の学生」「京都の中学生が農業体験」「台湾の学生のホームステイ」など海外や全国各地の学生が宮崎県で修学旅行を楽しんでいることが分かった。そこで、「宮崎を訪れる相手にとって、修学旅行先の宮崎の魅力とは」という課題を提示した。展開では、児童に宮崎県、全国各地、海外からの修学旅行生の六つの記事を配布した。修学旅行生にとっての宮崎の魅力につながるキーワードを探した。グループごとに、キーワードを出し合って整理・分析する。ある班では、宮崎の魅力を歴史（戦争）、観光スポット、体験、スポーツなど発表し、共通点をまとめた。最後に、最初の考えでは出なかった魅力を探し出すことができた。

この学習から、新聞記事からキーワードを探し、整理・分析することで新たな発見を導き出せることや新聞記事の写真から見出しを考える活動も手軽に児童が新聞に触れるよい機会となることが分かった。また、ロイロノートなどのアプリを活用し、新聞作成することで実際の新聞と同じように作ることができることが分かった。また、河北新報社のデータベースを有効活用できるのではないかと思った。新聞の良さを生かしながら、インターネット検索など ICT（情報通信技術）活用も取り入れることで児童の考えを深めることができる。

NIE 全国大会は、宮城県で NIE 活動を実践している先生方との意見交換の場もあり、私の教師人生の中でも有意義な研修の時間となった。

レポート②

分科会 A と I

塩竈市立第二小学校

沼田 和也教諭

全体会のパネルディスカッションでは、NIEによって身に付けられる力やNIEの進め方について具体的な話があった。特に「NIEの実践に当たって一番大事なのは、教師も子供も負担感がなく、楽しく継続できることである」というパネリストの方々の言葉が励みになった。

分科会 A では、第4学年社会科「県の農産物や産業」の單元における新聞を活用した授業提案を行っていた。授業後の子供たちの感想には「新玉ねぎにはあまみがあることを初めて知った」「これからも新聞を読んで調べたい」と書かれており、新聞を使って調べる活動に意欲的に取り組んでいたことが分かった。



授業者は、普段から授業に使えるような新聞をスクラップし、ファイリングを行っているそうだ。私自身、授業のねらいに則した記事の選択に難しさを感じていたが、このような日々の教材準備が大切であることを学ぶことができた。

分科会 I では、授業でのコラムの活用や校内の掲示物などについて紹介があった。実践者は、読解力を①音読力（速く読む力）②語彙（ごい）力③要約力と分解して考え、NIEを通してこの



三つの力を着実に伸ばしていた。また、感銘を受けたのは、実践者が「児童アンケート」やミニテストを行うことによって、NIEの効果を実証しようとしていたことだ。蓄積されたデータを見ると、NIEの取組が読解力の向上に好影響を与えていることが明らかで、さらに自校での実践意欲が高まった。

今回の研修を通して、NIEは工夫の仕方によって、さまざまな教育的効果が期待できるものであると感じた。まずは子供たちが気軽に新聞

に親しむことができるような校内環境を整えていきたい。

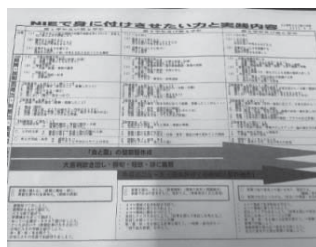
レポート③

分科会 C と I

石巻市立大谷地小学校 藤坂雄一教諭

時間をかけずに判断を求められることが多い。そして、それをすばらしいと考える社会がある。しかし、それが本当によいことなのだろうか。新聞記事の情報検索によって、必要な情報を簡単に手に入れることができる時代に、私たちはなぜ子供たちに新聞を読むことを求めるのだろうか。そんな問いを持って参加させていただいた宮崎大会は、私に大きな学びを与えてくれた。「新聞は未来の窓であり、社会の窓である」という言葉によって、新聞を読むことはキャリア教育でもあることに気付く。

分科会 C のNIEで身に付けさせたい力の一覧表（下図）は、勤務校での取組を始めるにあたり、ビジョンを共有するツールとなるだろう。多くの実践を紹介していただいた。新聞を読む→要約する



→感想を述べる→校内放送で発表するというサイクルも参考にした。インプットとアウトプットのバランスの中で、学びは確かなもの

のようになっていく。新聞を活用して、「鍛えていく」という視点を大切にしたい。この分科会のみならず、「最終的には教職員が本気かどうかということ」というキーワードを何度も耳にした。どんな教育活動でも、実践者が信念を持って指導することを大切にしなければ、きっと実践は浅いものになるだろう。

分科会 I の発表では、読解力向上の要素を①音読力②語彙（ごい）力③要約力とし、国語科の始め6分間を新聞要約活動にあてていた。ロイロノートを活用したデータ収集によって、確かに記述力は向上しており、伴って語彙力も向上した。「やらないよりはまし」という視点で、まず取り組んでみたことが面白い。また、校長先生が作成するス

クラブポスターが会場一面に掲示されていた。校内の教育環境整備にも新聞は活用されている。



さらには、新聞広告のキャッチコピーまでも学習材となりうるのだ。NIE教育の入り口を宮崎大会でのぞかせていただいたが、

かなり奥が深そうで、興味深い。

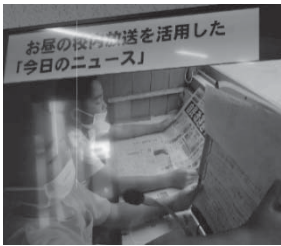
レポート④

仙台市立大沢小学校

分科会 C と I

松川 誠一教諭

分科会 C の日之影小学校は、児童数 28 名の小規模校である。日之影小学校の取組で印象に残ったのは、お昼の校内放送を活用した「今日のニュース」の活動と「壁新聞の作成」である。



昼の校内放送では、毎日一人ずつその日の気になった新聞記事を紹介する。「音読→読解→要約→自分なりの感想を加える」という一連の流れである。

子供たちは、全校児童に向けて発表することで自己肯定感が上がり、更なる意欲の喚起につながる。すばらしい取組であると感じた。

壁新聞の作成では、全校で生活科や総合的な活動の時間で学んだことを壁新聞として作成している。作成の過程では、新聞を活用して調べたり見出しの付け方等を参考にしたりしている。どちらの活動も学習のまとめとなり、しかも、自らの学びを発信するものにもなっている。ともに、今の時代に必要とされる「思考力・判断力・表現力」を育むことにつながる。古典的ではあるが、重要な取組であると感じた。

質疑応答で印象に残ったのは、次の 2 点である。

①「NIE を他の先生方に広げるには、何から始めればよいか」

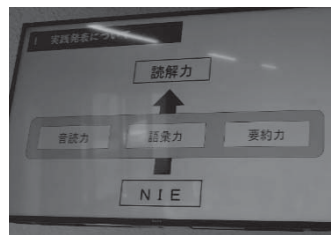
- ・負担感のないところ（時間）でやると無理がない。
- ・スクラップは古典的であるが、どの学年でも取

り組みやすい。低学年は写真を切り取り、感想を発表するだけでもいい。

②「新聞はちりばめられた宝である」

- ・情報のデジタル化が進んでいるが、紙ベースは文責者の名前が出ており信ぴょう性がある。紙ベースであることで何度でも読み返すことができ、低学年の児童でも自分から情報を取りに行くことができる。

分科会 I の油津小学校の取組で印象に残ったのは、NIE 活動の中で「読解力」に焦点化していたことで



ある。「読解力」を「音読力」「語彙(ごい)力」「要約力」の三つと捉え、その三つの力を向上させるために新聞を活用していた。

国語の教科で、6 分間というわずかな時間で計画的に取り組むことで、効果的に「読解力」のスキルアップが図られていた。まさに、「継続は力」であるといえる。

さらに、4 コマ漫画を活用して、楽しみながら構成力や表現力も養っていることに驚いた。楽しくなければ、ただの訓練になってしまう。この 4 コマ漫画の活動を入れたことで、子供たちは楽しみながら継続できたのだと思う。

子供たちは、多くの量の新聞記事を音読することで、自分でも「前より読めるようになった」「読むのが速くなった」と実感できる。そのことが、何よりの自信になったのではないだろうか。

全ての教科に関連する読解力は、生涯にわたって必要な力である。その基本となる「音読力」は是非とも子供たちに身につけさせたい力であると感じた。

レポート⑤

仙台市立生出小学校

分科会 A と G

大沼 富美子教諭

分科会 A では、4 年社会科「わたしたちの県」の授業で、まず新聞記事を活用して生産者の思いや願いに触れ、地域の特産物について関心を高めるために、生産地、気候、出荷時期、特徴、歴史な

ど社会科的観点で読み取りが行われた。指導者が1つの新聞記事を提示し、それについて読み取る活動だった。

どの児童もラインを引きながら記事を読み、それをもとにワークシートに記入していた。NIE



タイムや普段問いに対してラインを引いて読み取るという活動を継続して行っているの、スムーズに作業して

いた。

NIE 等の取組として、学校全体で週に1回程度NIE タイムを設け、新聞記事の読み取りや要約、感想の記入を行ってきているとのことだ。昨年度まではこども新聞を使っていたが、本年度は4年生以上が一般紙に挑戦している。

参観した学級は、4月から毎日一人が当番となって新聞記事を紹介する朝のスピーチを行っている。1巡目は興味を持った記事をスクラップし、その理由を発表し、2巡目は記事の内容と紹介した理由を発表した。一人で記事を選べない児童は、先生と記事を選ぶようにした。

また、夏休みを利用して、自分で記事を探す活動や他の特産物を調べる活動も行った。記事を見つけるために、スクラップ帳を作成したり、図書館で検索したりする活動も進めていた。指導者の意図的計画的指導が、新聞記事の活用の仕方につながっていると感じた。

分科会 G は、新聞記事を活用し、修学旅行先としての「宮崎の魅力」についてさまざまな視点から考え、再発見していく学習であった。



最初に「宮崎の魅力」の探るために宮崎市に修学旅行に来たことのある修学旅行

生の意見が載った新聞記事を提示した。生徒は、国語辞典を手元に置きながら、分からない語句などを自分で調べながら新聞記事を読み、宮崎の魅力につながるキーワードにラインを引いた。次に、

キーワードを付箋に書き出し、グループで話し合いながら、キーワードを分類・整理した。

本時の振り返りでは、新たな視点で見いだした宮崎の魅力を共有し、これまでの自分との意見を比較していた。

最後に、新聞社から複数記事を短時間で読み取らせる場合は、まずリードだけ読み、心に残ったら全部じっくり読むという方法があることをアドバイスされた。

この学年は、5年生の時から、週1回関心をもった新聞記事の内容を要約して見出しを付けたり、調べたことや感想をまとめたりする活動に取り組んできた。また写真や新聞記事から見出しを考えたりする活動も行ってきた。これらの活動により、作文や作品の題名を付ける時にも工夫が生まれ、文章を読み解く力や独創性も身に付いてきているようだ。まさに「NIE 継続は力なり」である

レポート⑥

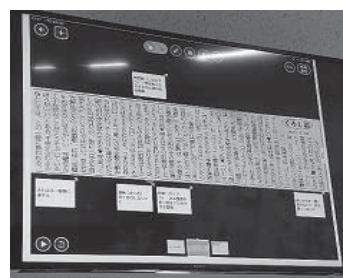
分科会 A と I

仙台市立東仙台小学校

三輪 一騎教諭

NIE 全国大会での実践発表等を見て、新聞を活用した学習活動の有用さを実感した。新聞を用いてどのように授業を行って行けば良いのか。また、新聞を用いた学習活動にはどのようなものがあるのか。2つの学びをまとめたい。

分科会 I では、新聞を用いた様々な学習活動がいくつか示されたが、メインとなったのは新聞要



約の活動である。ロイノートを活用してコラム記事を配付し、記事を3分間音読、その後、3分間で記事の中で「何が言いたいの

か」を読み取り、100字以内でまとめるといったものだ。

読み取った上でまとめる作業を短時間で行うため難易度も高いが、活動を積み重ねることによって、子供たちが力の向上を実感しているようだった。朝の時間や授業の冒頭など無理なく続けるこ

とのできる活動であると感じた。

語彙力や読解力の向上が具体的な数値として見られる点からも、新聞活用の有用さを感じられる。

分科会 A は、宮崎県の土地利用等について学習しながら県の特徴を学んでいく社会科の授業。当



日の授業では、宮崎県延岡市の特産品「空飛ぶ新玉ネギ」について、新聞を用いて調べていく。なぜ「空飛ぶ」という名前なのか、という課題を解決するために、学級全体で新聞を読み取っていく授業である。全体でひとつの記事

を読みながら、「これについてはどうだろう？」と教師から問いかけることで特産品について理解を深めていた。単に新聞を読むのではなく、読み取る方法を体験させているように感じた。

今回の授業は新聞の読み取りが中心となっていたが、新聞をきっかけとした、個別に探求できる授業の流れはどのようなものとなるのであろうか。以下のような流れが新聞を活用することによってできそうである。

- ① 新聞を読んで分かったこと・気が付いたことを出す。
- ② 新聞を読んで疑問に思ったことなどを調べる。
※新聞に出てきた土地について、言葉の意味や仕組みなど。
- ③ 調べて分かったことの共有
※調べる視点の違いを感じることで情報を見る視点の広がりや、知識の広がりを目的とする。
- ④ 学習課題についてまとめる

レポート⑦

分科会 F と H

利府町立利府西中学校

山家 渉教諭

分科会 F は、情報を受容するばかりでなく、情報を整理し、自分の考えをまとめたり、発信したりするという情報を供給する側の立場に立たせる授業展開だった。

「学校存続のために自分たちのこれまでの経験踏まえて、この学校の良さを小学 6 年生に伝えて

いく」というテーマの設定が充実した学習活動につながっていた。話し合いをしなければいけないという必要性を生徒たちに植え付ける仕掛けがとて



も上手だった。

自分たちで情報を取捨選択する活動やブリコラージュ（情報同士を組み合わせる新しい情報を作る活動）を踏まえて「新聞記者とは何か」「新聞記事とは何か」を考えさせることで、新聞の本質を見いだす授業展開だった。

子供たちが情報を集めるための効果的な指導が、勉強になった。①話し合いの際にカードを使用することで、情報を操作しやすく、比較しやすくなっていた。②誰に向けて情報を届けるか（今回は小学 6 年生）を明確にすることで情報の大切さや情報を発信する楽しさを感じていた。

分科会 H では、新聞の購読率を上げるために新聞という情報メディアの特徴を見直すことから始



めることで、より実態に合った提案内容を考えることができていた。

質疑の時間と意見交換の時間を設定したことで、提案内容の質がよりよくなっていた。今回の授業は、新聞の購読率を上げる取組ということで、新聞というメディアの必要性や有用性を再発見するきっかけとなる内容だったのも良かった。

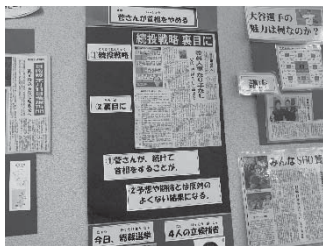
提案型のディベート形式にすることによって、内容がより具体的になったことで、聴衆にとっても分かりやすく、内容が深まりやすいテーマ設定だった。また、その提案内容に至るまでの過程や提案内容の説明をパワーポイントでまとめることで、他グループにとって理解しやすく、物の見方や考え方を広げる機会となっていた。

レポート⑧ 分科会 C と I

栗原市立栗原西中学校 奈須野朱里教諭

NIE の実践校に指定された本校で、どのような活動や取り組みをしていくべきかずっと悩んでいたが、この度 NIE 全国大会に参加させていただき、NIE の理念や役割について深く学び、様々な実践を知ることができ、先が拓けたような気持ちになった。

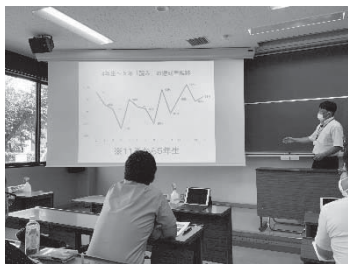
全体会の基調提案では「世の中の問題を、様々なファクト（事実）やエビデンス（根拠）をもとに



思考し、判断し、表現することが求められる時代になった」という話があり、これがまさに NIE の役割だと感じた。NIE で取り込まれる活動という

活動というと、新聞を読み、その記事についての意見や感想を述べるようなことを想像していたが、その活動でも、事実や根拠をもとに自分の世界や視野を広げる。新聞によって世の中を見る目を養い、思考力・判断力・表現力を育成することは、学力を向上させるだけではなく、生徒が生きていく力を育むことに繋がるのだと改めて理解できた。

分科会の実践発表では、様々な NIE の取組を知ることができ、非常に刺激になった。特に、日南市



油津小学校・福島和馬教諭による「学力向上と NIE ～読解力向上の取り組みを通して～」では、読解力に焦点をあてた取り組みについて話を

聞くことができた。音読力、語彙力、要約力と、求める力をはっきりさせた上で、新聞の朝刊 1 面コラムの読み取りを行わせる活動は、是非本校でも行いたいと思った。

今回全国大会に参加して、NIE が学校教育に果たす役割を再認識できた。目的やねらいをはっきりとさせ、今後も自校での実践に励んでいきたい。

レポート⑨

宮城学院中学校

分科会 D と J

垣内 孝則教諭

分科会 D と分科会 J は、いずれも生徒が参加して、実際の様子を再現あるいは新たに実践して披露され、具体的な段取りや成果を実感できる発表だった。

NIE 活動を通して、アイデアを生み出し、実践することを視野に置いた発展的な取組に大いに刺激を受けた。特にコミュニケーションを通してアイデアがブラッシュアップしていく様子が大変印象的だった。

分科会 D は、確かな情報を見定める判断力を



“新しいものさし”と定義し、全学年で行われる〈1 分間スピーチ〉〈シンプリオバトル〉の取組をベースに、各学年で段階的に新聞に親しみながら活用できるようにプログラムが組まれている。1 年生〈未来新聞をつくろう〉→2 年生〈SDGs 別に考える社会問題〉→3 年生〈(英語で) NIE 3 分間スピーチ〉。キャリア教育、国際理解教育、英語教科学習と、幅広い学習の場面で形を変えて新聞が活かされている。〈シンプリオバトル〉という言葉の響きは誰にとっても初めてだろう。「ビブリオバトル」の

“書籍”を“新聞”に置き換えた造語である。生徒はそれぞれ関心を持った新聞記事を選び、問題を整理して聴衆に訴える活動である。会場では代表生徒 3 名が実際のプレゼンテーションを披露してくれた。競技性を備え、評価をダイレクトに得られることが意欲を引き出すモチベーションになる。発表する度に内容の推敲を重ね、表現が磨かれていくことがよくわかった。

また、2 年生での取組〈SDGs 別に考える社会問題〉にも注目した。生徒は問題解決の提案について、検証のために電話取材や実地調査などを行っている。問題解決の計画を実践するという点で大きく踏み込んでいると感じた。世界・日本という広いレベルではなく、自分たちの身

近な範囲ですぐに出来ることを見つめさせ、行動することを求めている。

こうした取組は 11 年に渡る長期間継続されており、会場からは、新聞離れの流れの中でどのように環境を整えているのかについて多くの質問があった。活動の目的を明確に示し、必然性を感じさせることを重視し、「楽しそう」と生徒に思わせるための工夫が凝らされていることがわかった。

分科会 J では、社会科の週末課題として新聞記事のスクラップ活動が 3 年間を通して行われて



ているとの報告から始まった。生徒が取り上げる記事は、第一面記事に限らず、ふと目にとまった話題まで幅広い。

約束手は①新聞名と②日付を記入、③オリジナルタイトルを付ける、の 3 点のみ。とは言うものの、生徒のノートは決してそれにとどまらない。感想や考察、疑問点、さらに深く調べたことなど、イラストも加えて楽しいページにまとめている。そこには、やらされているという感じがまったくない。生徒のスクラップは社会科通信『地道』で全生徒へ発信され、生徒同士、担当教員との意見交換の場に活かされている。この社会科通信でのコミュニケーションこそが生徒の積極性を引き出しているのだと思う。また、日頃の授業や生徒総会ではパブリック・ディベートの手法が取り入れられている。このディベートは相手を論破することではなく、提案内容の質を高めるための質疑と意見交換を重視する。今回は実際にその過程を見ることが出来た。『令和の新聞購読率低下を救え！』というテーマで複数の生徒グループが解決案を提言。それに対する質問や指摘を受け、生徒たちはさらに検討を重ねて再提案までを行う。会場の新聞社の方々からも現場の事情も含めた発言が加わり、会場は白熱した空気に満たされた。生徒からの質問が即座に、そして必ず出ることに驚く。確かな知識と思考力がなければ疑問は生まれな

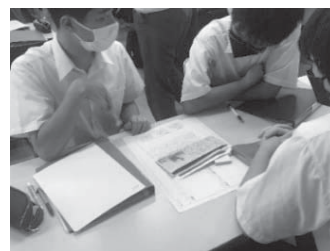
と思う。実践発表をされた先生は、「新聞記事スクラップ」の取組で生徒の成長を検証できないことが課題だと話されていたが、このレスポンスの鋭さこそがその証であると思う。生徒が、〈知識の道具〉として普段から新聞に親しんでいることが十分にうかがえた。そして質問や指摘を受け止める生徒の答え方にも、その謙虚さとマナーの立派さに感心した。受け止める側の姿勢も、だれもが安心して質問できる空気を醸成しているに違いない。

レポート⑩

分科会 E と K

宮城県一迫商業高等学校 齋藤 萌奈教諭

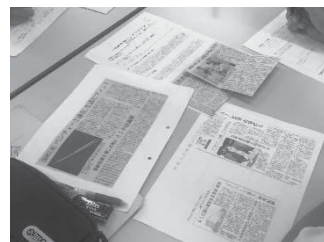
分科会 E では、新聞記事を貼り付けるワークシートの項目が印象に残った。「①記事の要約②



記事から得た気付き③SDGs（持続可能な開発目標）のどの目標に該当するか」という構成にすることで、理解・考察→自

分事として捉えるというステップを踏めるように構成されていた。更にその後のグループでの活動では、現状・望ましいミライを踏まえて「自分はどのように関わるか」という問いに取り組んでいた。学習活動が進むにつれて、課題意識が高まっていく様子が見て取れた。私は、NIE 教育のゴールは「世間で起きている出来事を知り、自分の意見を持つこと」に留まらず、「課題意識を持って実際に行動すること」だと考えている。今回の授業を参観させて頂き、そのゴールへの道筋の一つを提示されたような気がした。

分科会 E では、同じ実業高校として「新聞をキャリア教育に生かせないか」という視点で参観



させて頂いた。今回は社会科の授業だったが、工業科や進路指導部との連携が随所に見られ、教科横断的な面から見ても

充実した内容となっていた。注目したのは、最後の問い「これから企業で求められる能力を身に付けるために、何ができるだろうか」に対する生徒の答えである。「ニュースや本、新聞に関心を持つことが大事だと思う」と答えた生徒がいた。新聞を読み、他教科の教師やクラスメートの声を聞くという活動を通して、「他者の声に耳を傾けること」に価値を見いだしたからこそ出た言葉だと感じた。本校でも、「進路のために本や新聞を読みなさい」と言われるその前に、生徒自身が必要感を持って行動する姿勢を育てたいと考えた。

レポート⑪

宮網学院高等学校

分科会Ⅰ

森田 寿教諭

宮崎公立大学では、宮崎日日新聞社の協力の下、大学1、2年次の教養課程の中で「時事問題ガイド」という授業を開講している。必修ではないが、多くの学生が1年次に履修しており、人気のある授業の一つである。毎回授業には、プロの新聞記者がゲスト講師となり、日常的に担当する記事のテーマごとに、情報収集のこつ、取材先との関係づくり、記事の書き方について説明・解説する。

授業の内容は、①新聞の読み方②オリンピック・パラリンピック③宮崎の経済とIT④国文祭・芸文祭みやざき⑤スポーツを通じた地域活性化⑥変わる県都の姿⑦水産業から見るSDGs⑧コロナ報道⑨新聞の写真の力と役割⑩衆院選⑪災害リスクとコロナ禍で多様化する避難⑫コロナ禍の中小企業⑬F35B配備などから考える安全保障⑭宮日こども新聞にできること⑮デジタル時代の報道ーなど、非常に幅広いテーマ設定がなされている。

受講した学生たちの期待と反応も良好であり、地元宮崎で企業、公務員、マスコミ、教育現場等で働くための準備の機会となっている。

毎回の授業の終わりに、学生たちは記者の説明・解説に関するレポートを作成・提出するが、この中から選ばれたレポートが、宮崎日日新聞に掲載されるため、学生のモチベーション維持につながっている。

(2) 分科会に参加して考えたこと

「情報生産者になる」とは、上野千鶴子さんの新書のタイトルであり、大学や大学院での上野ゼミで長年に渡り実践・蓄積された、論文の書き方講座のノウハウである。オリジナルな問いを立てて先行研究に目を通し、第1次資料を集め、整理・分析し、文章を書いてアウトプットするまでの一連の手順が懇切丁寧に述べられている。

私は高校で「総合的な探究の時間」の企画・運営を担当しているが、生徒がオリジナルな問いを立てることの難しさをいつも痛感させられる。上野さんによると、問い・問題とは「あなたをつかんで離さないもののこと」との達観した定義があるが、こうした強い問題意識を持つ生徒に出会うことはまれである。しかし話してみると全く関心事が無い生徒もいない。そのため、生徒が関心を示す事柄を探ることが必要となり、マインドマップやマンダラートなどのシンキングツールを使用しているが、こうしたシンキングツールはある程度探究テーマが芽生えた段階では効果的であるが、何も思い浮かばない生徒も少なくない。

そこで探究テーマ探しに、今後試してみたいと考えたのが、今大会でも多くの実践発表があった、継続的な「新聞記事スクラップ」である。これまでも実践してはいるが、単発の「新聞記事スピーチ」や、探究テーマ決定後の資料収集のためであった。新聞記事はそれ自体が意味や課題意識を持つものであることから、探究テーマがなかなか見つからない生徒にとり、テーマのヒントを得る機会になると期待している。さらに継続的に行うことで、自分にとって深い問いを設定することにつながる。

レポート⑫ 分科会 B と M

宮城県仙台第三高等学校 伊藤 啓之教諭

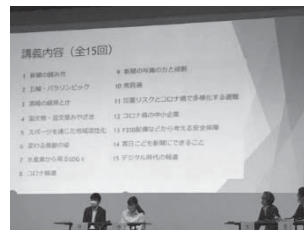
分科会 B では、新聞作成と授業での新聞活用が紹介された。新聞作成は、総合学習等の時間を 7 時間かけて実施しており、内容は自分の将来として、生徒本人の決意表明と家族への一言を記事として作成し、学校行事で発表すると

のことである。新聞作成にあたっては、オリエンテーションで宮崎日日新聞の方からの講義を受け、作成にあたるということである。実践後の生徒アンケートでは文章力や表現力、構成力の向上が見られる。また、校内に新聞情報ステーションを設置して、新聞を一定期間ストックして個々の生徒が自由に閲覧できるだけでなく、教員側で気になるニュースを掲示して、生徒の興味関心を引くなど、生徒が新聞に接する機会を多く設定し、新聞作成の参考にすべく活動している。

授業では、社会科三分野で学年ごとに活用している。授業に関わる実践について興味深かったものは、社会科の授業におけるまとめにおいて「見出し」を作成させ、生徒投票をさせる取組である。実践紹介では『鎖国』についての授業であったが、復習として内容の理解が深まるだけでなく、他の生徒の考え方や意見を知る機会にもつながっており、教科を不得手とする生徒にも理解しやすい取組と考える。

以上のような取組だけでなく、生徒に新聞記事スクラップを作成する上でも、環境整備は重要であり、特に新聞情報ステーションの運営に関しては図書館司書との連携が欠かせない。課題として生徒が新聞の大きさに違和感を持っていることや、新聞を身近なものとして生徒が意識することはできたが、記事内容と授業内容の連携の難しさを挙げていた。ICT教育とのつながりは、1人1台端末の紹介程度だったが、電子新聞と紙新聞の有効的な活用法や電子スクラップ、紙記事を写真に撮影しての活用を挙げていた。

分科会 M は、宮崎公立大学の講義「時事問題ガイド」について、講義の意義および学生のメディアへの認識の変化と影響についての討論であった。宮崎公立大学では 2015 年より、社会科学分野に講義として開講している。目的は学生が新聞を読み、時事問題への理解を深めることとしている



が、単なる新聞記事解説の講義ではなく、新聞を通して、地域の課題を幅広く学ぶ講義でもある。大きな特色に、地元の宮崎日日新聞の記者が講師となり、記者の直接書いた記事について、どのような思いで書いたのか、取材時の心境などを講義で伝えているだけでなく、受講した学生の意見や感想を後日紙面で掲載するなど、学生からのフィードバックも実施している点が挙げられる。この講義で学生の情報メディアに対する意識変化が起きただけでなく、地域社会の課題解決にあたり、学生のアイデアと地域経済界を結びつける役割を果たすなど、地域へ大きな影響力をもつ講義でもある。

また大学教育の役割は「情報生産者を育てる」ことが最終目的であるということであった。大学生は学問という情報の生産者であり、基礎演習から基幹演習、専門演習を通して卒業論文を書き上げ、卒業後のキャリアとする。そして、オリジナリティーを出すためには常に「自ら問いをたてる」ことを継続する。その際、情報のインプットとアウトプットを繰り返すのであるが、アウトプットとは「情報を生産（発信）」することである。研究の質を高めるためには情報量を増やさなければならないが、「情報はノイズ（＝領域）から生まれる（2018年・上野千鶴子氏）」との言葉にあるように、情報量を増やすためには領域を増やさなくては行けないのである。

分科会のまとめに「事実を正確に伝える難しさ」と情報の速効性には限界があり「正しい情報を文字から考えてほしい」とのことであった。仙台第三高校での探究活動にも、高校生だが生徒にこの点を意識させたいと考えている。

VI 報告(1)

高等学校部会研修会報告

宮城県NIE推進委員会高校部会長

仙台城南高等学校 教諭 鈴木 理恵

1 はじめに

今年度の高校部会研修会は、令和4年11月24日(木)に河北新報社からオンラインと対面の併用で行った。講話では、読売新聞東京本社東北総局長の池辺英俊さんから「新聞と情報リテラシー～紙媒体とデジタルの行方～」と題して、実践発表では、愛媛県立伊予高等学校教諭の松本直美先生から「自らの力で、自らの未来を切り拓く生徒の育成～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して～」と題して、そして、仙台第三高校の伊藤啓之先生、一迫商業高校の齋藤萌奈先生からは NIE 全国大会参加報告を行っていただいた。

2 講話

記者が取材で入手した情報をニュースにする際は、情報の点検や確認を行いその情報が嘘なのか事実なのか、信用できるものなのかなどの見極めを行っている。我々一人一人が情報やニュースに出会ったら、信頼できる発信源のニュース・記事なのか、裏付けの取れた正確な情報かを見極めることが大切である。これは情報リテラシーの根本であり、民主主義の根幹につながる。新聞は情報の真偽を見極めるための指針、判断基準でありたい。ネットメディアは、多くが無料、速報性があり簡単に検索ができるが、情報源が曖昧で不正確な情報が流れやすい。ネットメディアはPV(ページビュー)、「いいね」の数を重視する傾向があるため、怒り、嫉妬、心配を刺激するような見出し、リードが横行する危険性がある。ネットの速報性、利便性は画期的だが、利便性の中で失われるもの、失われてはいけぬものに、私たちはもう一度目を向ける必要がある。一方、新聞の情報は正確で信頼性が高く一貫性がある。東北大学加齢医学研究所所長 川島隆太教授(2020年10月20日読売新聞宮城県版)によると、日本の子どもの読解力低下は、新聞や活字に触れなくなってきたことが影響している。テレビやネットは、脳にとって受動的に情報が入るので、作動記憶(ワーキングメモリー)を使っていない。能動的に情報を取り込む経験を人が出来なくなっていることに危惧を感じる。新聞で情報に触れるのは脳にとって能動的な作業で、努力と集中が必要である。新聞は読むのに努力、集中、時間などのコストがかかるが、それだけの利点があり、新聞を読むことは「自分磨き」になり読解力向上につながる。これからはデジタルと活字を両立さ

せ、新聞・活字文化を継承、発展させていく必要がある。

読売新聞が宮城県教育委員会と東北大学附属図書館に働きかけ、高校生ビブリオバトル宮城県大会が開催されている。これは、読んだ本を紹介し、それを聞いた人たちが、読みたいと思った本へ投票するというものである。このような地道な努力を続け、若者の活字に触れる機会を増やし、活字文化の継承を応援したい。

3 実践発表

生徒の情報源が SNS 等である実情をふまえ、学校教育の中で実際に新聞を読み、社会問題について語り合う活動が、今後の生徒の人生において重要な意味を持つ。実践例として総合的な探究の時間「探 Q」、学校設定教科「時事問題」の紹介があった。「探Q」は、高校1年の後期から毎週火曜日の5、6校時を利用して実施している。学年を超えた活動であるため、他学年との交流が生まれ、いろいろな活動の継承にもつながっている。新聞を活用する講座では、生徒は新聞スクラップを行いながら、SDGs について学習したり、海外の難民支援活動についてつなげていた。また新聞記事で学習しているうちに、生徒は海外だけではなく、地域の社会福祉活動に興味を持つようになり自分の進路につながった者もいた。「時事問題」でも学習内容を深めるためにNIEを取り入れている。

今後の課題は、生徒たちが様々な情報に対して「本当にそうなのか」と懐疑的な視点を持つようになり、身近なネットニュースを鵜呑みにすることなく、それらの真偽を自ら判断する一助として、いかにして自主的に生徒が新聞を読むよう促していくかということである。

4 NIE 全国大会参加報告

伊藤先生からは二つの分科会参加の報告があり、齋藤先生からは①新聞に触れる機会をどのように設定しているか、②新聞の有用性をどのように実感させているか、の二つの視点から報告があった。(別ページ参照)

5 最後に

昨年度はオンラインのみであったが、今年度はオンラインと対面の併用で研修会を開くことができた。講師を快諾いただいた池辺さん、松本先生、伊藤先生、齋藤先生、NIE 事務局の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

VI 報告（2）

アドバイザー部会報告

宮城県NIE推進委員会アドバイザー部会長

宮城県仙台二華高等学校 教諭 大槻 欣史

1 全国NIEアドバイザー会議

全国大会終了後に全国NIEアドバイザー会議に参加し、全国のアドバイザーと有意義な意見交換をすることができました。ここでは、その会議の中で話題となったアイデアや実践例、悩みや苦勞等をいくつか共有します。

【アイデアや実践例】

定期的集まり実践報告や新聞社の方々と懇談／全国大会後に盛り上がるタイミングを活用／SDGsと絡めた活動／生徒が作成した成果物を印刷し近所のホームセンターで配布／短時間でもいいので数多く実践し身近に感じさせる／地域で役立つという視点で行う

【苦勞や意気込み】

教師が活動で使う記事を選ぶ難しさがある／記事の内容はわかるが実感できない生徒が多い／実践教師の組織化ができない

2 北海道・東北ブロックNIEアドバイザー・NIE推進協議会事務局長会議

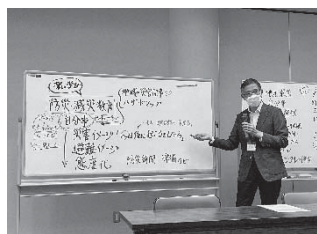
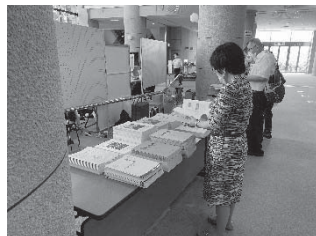
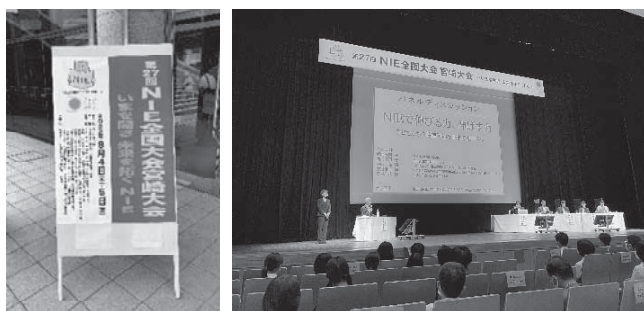
「社会に開かれた教育課程とNIE」をテーマに各地域の活動報告や課題について意見交換をし、最後には、日本新聞協会NIEコーディネーターの関口修司氏よりアドバイスをいただきました。ここでは、グループ討論で出された話題と関口氏のお話を共有します。

【グループ討論で出された話題やアイデア】

- ・全国大会にアドバイザーや実践教師が参加することでレベルの高い取り組みを学べる。
- ・全国大会を契機に各地に勉強会ができ、活動を継続している。
- ・学校からの出前授業や研修会の要請には新聞記者やアドバイザーを派遣し、新聞を好きになってもらえるような視点で開催している。
- ・実践指定校の実践教師の組織化に向け、他県のノウハウを学ぶことは重要である。

【関口氏からの助言（激励）】

「教師は多忙だが、今、子供に新聞を読む面白さを伝えなければ、新聞に触れる機会が失われてしまう。これからのNIEは、子供が記事を探して選ぶという体験的な活動となることが理想で、紙面で知ったことを体験を通してさらなる学びへとつなげたい。カリキュラムに無理やり位置付けるのではなく、授業の一部、あるいは最初と最後に新聞を使うだけでもよい。無理のない範囲で続けてほしい。」



VI 報告（3）

宮城県NIE地区研修会（宮城県一迫商業高等学校）

宮城県NIE推進委員会は12月26日、宮城県一迫商高（栗原市）で令和4年度の県NIE地区研修会を開きました。実践指定校である一迫商高と栗原市栗原西中の教諭二人が、活動内容を報告しました。両校は近距離にあり、地域一体となってNIEへの理解を深めようと、実施しました。

栗原西中の奈須野朱里教諭は、新聞コラムの書き取りや社説を読むトレーニングなどを行い、



「社会的な視野が広がった」とNIEの効果の説明しました。一迫商高の斎藤萌奈教諭は、タブレット

端末を使った取り組みについて話し、生徒の新聞に触れる回数が増えたことを紹介しました。

時事通信社仙台支社長の佐藤亮さんは、「ニュース記事が世の中に報じられるまで」というテーマで講演しました。通信社は紙媒体は持たないが中身は新聞社と同じであることや、海外の通信社と提携し、時事通信社の記者が書いた記事が全世界に配信されることなどを紹介しました。

また、記事を報じる上で人権の尊重が大切であることを説明。ある地方の中小企業が民事再生法の適用を受けたという記事の見出しに「倒産」という言葉を使い当事者からクレームがきたことなど、実際にあった事例を紹介しながら「記事は



インターネット上のブログとは違う。正確な事実だとしても、当事者にとってこの表現方法でいいのかどうか、細心の注意を払う必要がある。差別用語を使っていないか、実名で報道するか、写真の扱いはどうか、など日々厳しい判断を迫られ、検討を重ねて報じている」と、強調しました。

参加者は、時事通信社の記事を使っている河北新報社の夕刊をめくりながら、通信社の仕組み、記事になるまでの過程に理解を深めていました。



＜講演＞
ニュース記事が世の中に
報じられるまで
時事通信社
仙台支社長 佐藤亮さん

取材は人に会うことから始まる。何がニュースか、どう書くのか、どう伝えるのか、毎日記者は自問自答している。事実を正確に伝えるのが記者の仕事だが、人を傷付けることは許されない。誰も経験したことがないことが大ニュースになる。判断が付かないことも次々と起こる。その中でどう表現したらいいのか悩むのは、現場の宿命とも言える。

犯罪を犯した少年を実名報道するか、逆に被害者はどうするか。ウクライナ侵攻においても、実際に悲惨なことが起きていることを伝えなければならない一方で、虐殺の写真の配信してもいいのか。私たちがなりに苦労して記事にしていることを知ってほしい。

若者の新聞離れは確実に起きているが、NIE活動に地道に取り組んでいる教育現場の姿を見て、目を開かされた思いだ。ぜひ続けてもらいたい。

Ⅶ 研究組織

(1) 宮城県NIE委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県NIE委員会と称する。

(目的)

第2条 本会はNIE (Newspaper in Education・教育に新聞を)の呼称にちなみ、新聞を生きた教材として活用し、文章作成をはじめ、社会問題への理解など教育内容を豊かにするとともに、情報化社会における情報の処理、活用能力を高めて、幅広い人間形成に役立てることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次の事案について協議し、指導助言する。

- ①実施目的及び計画に関すること。
- ②研究推進組織に関すること。

(組織)

第4条 本会の委員構成は次に掲げるものとする。

宮城県教育委員会代表者
仙台市教育委員会代表者
宮城県小学校長会会長
仙台市小学校長会会長
宮城県中学校長会会長
仙台市中学校長会会長
宮城県高等学校長協会会長
宮城県連合小学校教育研究会会長
宮城県連合中学校教育研究会会長

宮城県連合小学校特別活動研究会会長
宮城県連合中学校特別活動研究会会長
宮城県連合小学校生活・総合研究会会長
仙台市中学校総合的な学習研究会会長
宮城県連合小学校国語研究会会長
宮城県連合中学校国語研究会会長
仙台市中学校国語研究会会長
宮城県内の大学の代表者
在仙の日本新聞協会加盟社の代表者

(任期)

第5条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(会長・副会長・監事)

- 第6条
- 1 本会に、会長1名、副会長5名、監事1名を置く。
 - 2 会長は委員会を代表し、会務を統括する。
 - 3 副会長は会長が指名する。
 - 4 会長に事故ある時は、副会長がその会務を代理する。
 - 5 監事は会計監査を行う。

(会議)

第7条 本会の会議は、会長が招集し、主宰する。

(顧問)

第8条 本会に次の顧問を置く。

宮城県教育長 仙台市教育長

(推進委員会)

第9条 本会の事業を達成するために、宮城県NIE推進委員会を置く。この会則は別に定める。

(庶務)

- 第10条
- 1 本会の庶務は、宮城県NIE委員会事務局が行う。
 - 2 会計年度は4月1日から翌年3月31日とする。

(報酬)

第11条 本会の会長、副会長及び委員には報酬を支給しない。

(補則)

第12条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正	平成5年7月1日	改正	平成22年6月1日
改正	平成6年6月9日	改正	平成23年7月5日
改正	平成16年2月27日	改正	平成24年6月5日
改正	平成18年2月15日	改正	平成25年6月20日
改正	平成22年2月26日		

Ⅶ（２） 宮城県N I E推進委員会会則

（名称）

第1条 本会は宮城県N I E推進委員会と称する。

（目的）

第2条 本会は、宮城県N I E委員会会則の第2条（目的）を達成するために、次のことを行う。

- ①教科及び領域等における、新聞を教材として活用する実践の研究
- ②児童・生徒の現代社会に対応する情報活用能力の育成

（研究）

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次のことについて協議し、研究する。

- ①N I E研究活動の推進
- ②研修会の開催、研究成果の公開及びその表彰
- ③新聞についての諸調査
- ④研究会誌の編集と発行
- ⑤その他の会の目的を達成するために必要なことから

（組織）

第4条 1 本会は、N I Eに関心を持ち、加入を希望する教育関係者等で組織する。

2 本会の構成は次の通りとする。

委員長1名、副委員長、推進委員、専門委員、事務局

3 委員長、副委員長を役員とする。

（任期）

第5条 役員任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

（委員長）

第6条 1 委員長は別表に基づき、副委員長が輪番でその任にあたる。

2 委員長は委員会を代表し、会務を統括する。

（副委員長）

第7条 1 副委員長は、次に掲げるものとする。

宮城県連合小学校特別活動研究会長、同中学校特別活動研究会長、同小学校生活・総合研究会長、
仙台市中学校総合的な学習研究会長、宮城県連合小学校国語研究会長、同中学校国語研究会長、
仙台市中学校国語研究会長、本会小学校部会長、同中学校部会長、同高等学校部会長、アドバイザー一部会長

2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその会務を代行する。

（推進委員）

第8条 1 推進委員は、実践指定校の担当教員が加入し、その任にあたる。

2 推進委員は、N I E活動に興味・関心のある教育関係者が運営に参加する。

3 推進委員は、研究活動と運営を推進する。

（専門委員）

第9条 1 専門委員は、会員の互選により定める。

2 専門委員は、それぞれの所属する研究部門において実践にあたる。

（会議）

第10条 本会の会議は、委員長が招集し、主宰する

（提携する他の機関）

第11条 本会の目的を達成するために、宮城県N I E委員会と提携する。

（庶務）

第12条 本会の庶務は、宮城県N I E委員会事務局が行う。

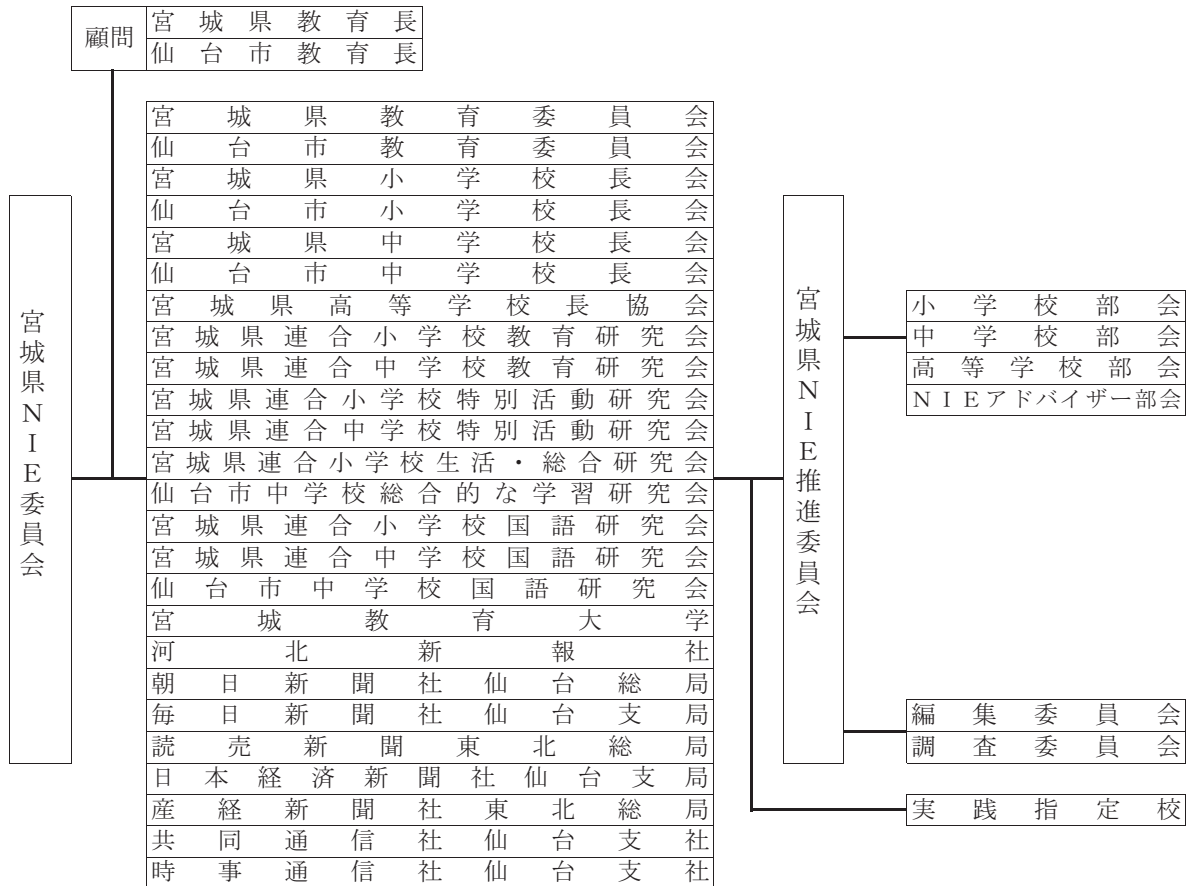
（補則）

第13条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正	平成 5 年 6 月 25 日	改正	平成 24 年 6 月 5 日
改正	平成 16 年 2 月 27 日	改正	平成 31 年 2 月 13 日
改正	平成 20 年 1 月 16 日	改正	令和 3 年 3 月 10 日
改正	平成 23 年 2 月 25 日	改正	令和 5 年 2 月 20 日

Ⅶ（３） 宮城県NIE委員会及び宮城県NIE推進委員会の構成



令和4年度宮城県NIE委員会役員

〈敬称略〉

役職	氏名	所属役職	役職	氏名	所属役職
顧問	伊東 昭代	宮城県教育委員会教育長	委員 中部会長	堀部 登美子	宮城県連合中学校特別活動研究会会長（北仙台中校長）
顧問	福田 洋之	仙台市教育委員会教育長	委員	遠藤 浩志	宮城県連合小学校生活・総合研究会会長（館小校長）
会長	三田村 素志	宮城県中学校長会長（岩沼中校長）	委員 委員 推進委員長	大倉 秀之	仙台市中学校総合的な学習研究会会長（生出中校長）
副会長	佐々木 克敬	宮城県高等学校長協会会長（仙台第三高校長）	委員	浅野 郁子	宮城県連合小学校国語研究会会長（上野山小校長）
副会長	高橋 恭一	仙台市中学校長会長（第一中学校長）	委員	富士原 昭裕	宮城県中学校国語研究会会長（石巻河南西中校長）
副会長	佐々木 博明	宮城県小学校長会長（名取増田小校長）	委員	布施 辰哉	仙台市中学校国語研究会会長（八木山中校長）
副会長	田辺 泰宏	仙台市小学校長会長（荒町小校長）	委員	児玉 忠	宮城教育大学（教授）
副会長	安野 賢吾	河北新報社 防災・教育室長	委員・監事	岡本 峰子	朝日新聞社 仙台総局長
委員	遠藤 秀樹	宮城県教育庁高校教育課長	委員	佐藤 丈一	毎日新聞社 仙台支局長
委員	佐々木 利佳子	宮城県教育庁義務教育課長	委員	池辺 英俊	読売新聞 東北総局長
委員	高橋 和之	仙台市教育局教育指導課長	委員	松田 拓也	日本経済新聞社 仙台支局長
委員	村田 隆則	宮城県連合小学校教育研究会会長（国見小校長）	委員	菊池 昭光	産経新聞社 仙台支局長
委員	吉田 知彦	宮城県連合中学校教育研究会会長（上杉山中校長）	委員	山田 昌邦	共同通信社 仙台支社長
委員	多賀野 修久	宮城県連合小学校特別活動研究会会長（榴岡小校長）	委員	佐藤 亮	時事通信社 仙台支社長

令和4年度教育委員会担当者

〈敬称略〉

宮城県	上 園 知 明	宮城県教育庁高校教育課主幹
宮城県	加 茂 博 行	宮城県教育庁義務教育課課長補佐
仙台市	西 礼一郎	仙台市教育局教育指導課主任指導主事

Ⅶ(4)令和4年度宮城県NIE推進委員会名簿

〈敬称略〉

	役職	氏名	学校名(職名)・所属	役職
役員	推進委員長	大倉 秀之	仙台市立生田中学校長	校長
	副委員長・小副部会長	多賀野 修久	仙台市立榴岡小学校長	校長
	副委員長・小副部会長	遠藤 浩志	仙台市立館小学校長	校長
	副委員長・中副部会長	浅野 郁子	仙台市立上野山小学校長	校長
	副委員長・中副部会長	堀部 登美子	仙台市立北仙台中学校長	校長
	副委員長・中副部会長	富士原 昭裕	石巻市立河南西中学校長	校長
	副委員長・中副部会長	布施 辰哉	仙台市立八木山中学校長	校長
	副委員長	阿部 謙	仙台市立東仙台小学校	校長
	小副部会長・実践指定校			
	小副部会長	佐藤 正文	仙台市立通町小学校	校長
小副部会長	小野 雄一	仙台市立向山小学校	校長	
小副部会長	伊藤 公一	仙台市立幸町南小学校	校長	
小副部会長	宮本 利浩	岩沼市立岩沼小学校	校長	
小副部会長	佐藤 佳子	白石市立白川小学校	校長	
小副部会長	千葉 雅弘	名取市立那智が丘小学校	校長	
小副部会長	佐藤 卓也	美里町立小牛田小学校	校長	
小副部会長	大友 英之	仙台市立神野東小学校	校長	
小副部会長	坂本 謙	白石市立大平小学校	教頭	
小副部会長	及川 勝成	仙台市立荒井小学校	教頭	
実践指定校	藤坂 雄一	石巻市立大谷地小学校		
実践指定校	三輪 一騎	仙台市立東仙台小学校		
実践指定校	松川 誠一	仙台市立大沢小学校		
実践指定校	川綱 義朗	東松島市立矢本東小学校		
実践指定校	大沼 富美子	仙台市立生田小学校		
実践指定校	沼田 和也	塩竈市立第二小学校		
実践指定校	高橋 章友	女川町立女川小学校		
会計	大友 浩美	仙台市立袋原小学校		
	三塚 理恵	登米市立東郷小学校	教頭	
	大場 陽子	七ヶ浜町立亦楽小学校	教頭	
	安積 章彦	仙台市立中田小学校		
	齋田 淳一	仙台市立生田小学校		
	山本 和子	仙台市立荒巻小学校		
	松本 瑞雅	仙台市立鹿野小学校		
	青木 茂	仙台市立鶴谷小学校		
	鶴田 由依	仙台市立鶴谷東小学校		
	行本 忠司	仙台市立袋原小学校		
	山内 崇寛	仙台市立神野小学校		
	鈴木 優太	仙台市立広瀬小学校		
	石井 真紀子	仙台市立錦ヶ丘小学校		
	松永 秀子	角田市立角田小学校		
	千葉 修	栗原市立栗駒南小学校		
	門井 菜津子	柴田町立柴田小学校		
	鈴木 誠	多賀城市立山王小学校		
	小山 順一	登米市立北方小学校		
	武山 知子	南三陸町立伊里前小学校		
	大澤 寛子	聖ウルスラ学院英智小・中学校		
	木村 倫子	仙台市立西多賀小学校	教頭	
	金子 勇一	仙台市立金剛沢小学校	教頭	
	笠原 慎一郎	石巻市立鮎川小学校	教頭	
	山口 正浩	石巻市立大谷地小学校	教頭	
	鈴木 晃	白石市立白石第一小学校	教頭	
	佐藤 善威	多賀城市立山王小学校	教頭	
	中野目 佳奈	多賀城市立山王小学校	教頭	
	元田 健太郎	仙台市立荒町小学校		
	根岸 健太	仙台市立連坊小路小学校		
	佐藤 克彦	仙台市立六郷小学校		
	伊藤 謙	仙台市立宮城野小学校		
	庄司 幸弘	仙台市立旭丘小学校		
	井上 朝子	仙台市立七北田小学校		
	高橋 進	仙台市立長町南小学校		
	宮崎 美喜	仙台市立高森東小学校		
	齋藤 あずさ	仙台市立北中山小学校		
	阿部 広太郎	仙台市立富沢小学校		
	佐藤 初美	仙台市立泉松陵小学校		
	藤田 昌代	石巻市立鹿又小学校		
	菅原 紀子	大崎市立大貫小学校		
	青野 有子	大崎市立古川第一小学校		
	小野寺 昭彦	大崎市立古川第五小学校		
	奥平 大和	大郷町立大郷小学校		
	島山 昭洋	気仙沼市立鹿折小学校		
	渡邊 真理子	多賀城市立天真小学校		
	渡邊 里美	丸森町立籬矢間小学校		
	堀切 恵美子	美里町立不動堂小学校		

	役職	氏名	学校名(職名)・所属	役職
中学校部会	中副部会長	高橋 有	南三陸町立志津川中学校	校長
	実践指定校	奈須野 朱里	栗原市立栗原西中学校	
	実践指定校	山家 渉	利府町立利府西中学校	
	実践指定校	牧田 創	宮城学院中学校	教務部長
	編集委員	丸山 仁	宮城学院中学校	教頭
	編集委員・会計	進藤 千枝	仙台市立広瀬中学校	
	編集委員	相澤 和男	仙台市立柳生中学校	
		須藤 浩司	仙台市立七郷中学校	
		吉岡 健悟	仙台市立人來田中学校 旗立分教室	
		清野 和俊	仙台市立広陵中学校	
		庄司 渉	大崎市立古川北中学校	
		吉田 啓介	角田市立角田中学校	
		小川 康輔	登米市立豊里中学校	
		高橋 香	仙台市立向陽台中学校	教頭
		菅原 豊司	気仙沼市立大谷中学校	教頭
		門前 真紀子	仙台市立五橋中学校	
		伊藤 恵美子	仙台市立中田中学校	
		長崎 泰三	仙台市立幸町中学校	
		尾形 隆寛	仙台市立人來田中学校 旗立分教室	
		大槻 康裕	仙台市立広瀬中学校	
		松浦 淳子	仙台市立七北田中学校	
		佐藤 貴	仙台市立根白石中学校	
		齋藤 聡子	仙台市立南中山中学校	
		根本 晶	仙台市立館中学校	
		穴戸 裕	白石市立小原中学校	
		島山 祐子	多賀城市立多賀城中学校	
	副委員長・高部会長	鈴木 理恵	仙台北城南高等学校	
	副委員長	大槻 欣史	宮城県仙台二華高等学校	
	高副部会長	平居 高志	宮城県石巻工業高等学校	
	会計	三嶋 廣人	宮城県宮城第一高等学校	
	実践指定校	片平 敏誌	宮城県仙台第三高等学校	
	実践指定校	森田 寿	尚綱学院高等学校	
	実践指定校	齋藤 萌奈	宮城県一迫商業高等学校	
	編集委員	木村 誠	宮城県仙台南高等学校	
		浅水 啓一郎	宮城県古川工業高等学校 定時制	副校長
	佐々木 貴芳	宮城県泉高等学校		
	萱沼 俊一	宮城県白石工業高等学校		
	高瀬 琢弥	宮城県仙台第三高等学校	教頭	
	佐々木 淳一	宮城県仙台第三高等学校		
	内田 元	宮城県多賀城高等学校		
	小林 治	宮城県名取高等学校		
	穀田 長彦	宮城県宮城広瀬高等学校		
	佐藤 雅信	宮城県宮城広瀬高等学校		
	幸野 久嗣	宮城県村田高等学校		
	柴田 隆一	東北学院高等学校 教育研究部		
	加藤 寿	東北学院高等学校		
	帆足 直治	東北学院高等学校	教頭	
	渡辺 徹	東北学院高等学校		
	竹中 達哉	東北学院高等学校		
	名越 幸生	東北学院高等学校		
	上野 貴代子	宮城県志津川高等学校		
	佐々木 なつき	聖和学園高等学校		
	黒澤 佑司	仙台高等専門学校		
	引地 由佳	仙台育英学園高等学校		
大学・他	佐藤 剛	宮城教育大学		
	下山 忍	東北福祉大学		
	豊澤 弘伸	宮城学院女子大学		
	相澤 洋之	石巻市視聴覚センター	社教主事	
	佐藤 慶一	仙台市いじめ対策推進室	主査	

	氏名	学校・所属名	役職
NIEアドバイザー	大槻 欣史	宮城県仙台二華高等学校	
	中辻 正樹	福室市民センター 福室児童館	館長
	阿部 謙	仙台市立東仙台小学校	校長
	坂本 謙	白石市立大平小学校	教頭
	佐藤 慶一	仙台市立子供未来局いじめ対策推進室	主査
	秋場 文東	松島町立松島第二小学校	
	相澤 洋之	石巻市視聴覚センター	社教主事
	菅原 久美	仙台市立五橋中学校	
	木下 晴子	仙台市立高森中学校	
	齋藤 美佳	大崎市立岩田山中学校	
	鈴木 理恵	仙台北城南高等学校	
	三嶋 廣人	宮城県宮城第一高等学校	

Ⅷ 宮城県NIEの歩み

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成元年度	県NIE 委員会・ 推進委員 会設立事 務局河北	小 9 中 17 計 26	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録1号
平成2年度		小 22 中 17 計 39	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ	○芦口小 H2・10 ○八幡小 H2・10 ○中野中 H3・1		○県研究集録2号 ○紀要 芦口小 八幡小
平成3年度	高校部会 発足	小 24 中 26 高 9 計 59	○長町中	○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録3号 ○実践事例集 小グループ1号
平成4年度		小 27 中 22 高 10 計 59	○長町中 ○旭丘小	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○長町中 H5・1 ○旭丘小 H5・1	○小学校NIE研修会	○県研究集録4号 ○実践事例集 小グループ2号
平成5年度	朝日・読売 毎日・共同 時事の各社 加盟	小 56 中 30 高 16 計 102	○長町中 ○旭丘小 ○折立小 ○八軒中	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H5・10 ○長町中 H6・1 ○旭丘小 H6・2	○小・中学校NIE研修会	○県研究集録5号 ○実践事例集 小グループ3号
平成6年度	日経・産経 の各社加盟	小 68 中 49 高 18 他 1 計 136	○折立小 ○上杉山通小 (ハ イレット校) ○八軒中 ○向陽台中 (ハ イレット校) ○泉高 (ハ イレット校)	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H6・10 ○泉高 H6・11 ○折立小 H7・2	○小・中・高校NIE研修会	○県研究集録6号 ○紀要 折立小 ○実践事例集 小グループ4号 中NIE部1号 ○みやぎNIEだより1. 2. 3号
平成7年度		小 105 中 47 高 19 他 5 計 176	○上杉山通小 (ハ イレット校) ○向陽台中 (ハ イレット校) ○袋原小 ○茂庭台中 ○泉高 (ハ イレット校)	○小・中・高部会の 研究活動	○向陽台中 H7・12 ○上杉山通小 H8・1	○宮城県NIE研修会 ○地区研修会(古川) ○地区研修会(七ヶ浜)	○県研究集録7号 ○紀要 上杉山通小 ○実践事例集 小学校部会5号 中学校部会2号 ○みやぎNIEだより4. 5号
平成8年度		小 113 中 54 高 22 他 7 計 196	○袋原小 ○上杉山通小 ○将監小 ○古川一小 ○茂庭台中 ○生出中 ○宮中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動 (授業研究)	○茂庭台中 H8・10 ○上杉山通小 H8・10 ○桜丘中 H8・11 ○将監小 H9・1 ○袋原小 H9・2	○宮城県NIE研修会 (仙台市) ○地区研修会(白石二小) ○地区研修会(石巻・住吉小)	○県研究集録8号 ○紀要 袋原小 ○実践事例集 小学校部会6号 ○みやぎNIEだより 6. 7. 8. 9号
平成9年度		小 122 中 60 高 28 他 7 計 217	○将監小 ○古川一小 ○桂小 ○大鷹沢小 ○生出中 ○宮中 ○蒲町中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動	○将監小 H9・11 ○桂小 H10・2	○宮城県NIE研修会 (常盤木学園高) ○地区研修会(大鷹沢小) ○地区研修会(石巻中) ○中・高部会研修会(田子中)	○県研究集録9号 ○紀要 将監小 ○みやぎNIEだより 10. 11. 12. 13号
平成10年度		小 132 中 61 高 27 他 7 計 227	○桂小 ○大鷹沢小 ○女川四小 ○蒲町中 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動	○女川四小 H10・5 (授業公開) ○桂小 H10・11 (授業公開) ○常盤木学園高 H10・11 ○大鷹沢小 H11・1 (授業公開)	○第3回NIE全国大会 (MOE BUKSENDAL) ○地区研修会(稲井小) ○中・高部会研修会(七郷中) ○小部会研修会(桂小)	○県研究集録10号 ○NIE実践事例集 「やってみよう!NIE」 小学校部会 ○みやぎNIEだより 14. 15. 16. 17号
平成11年度		小 132 中 60 高 28 他 10 計 230	○女川四小 ○東長町小 ○しらかし台小 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○山田中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの 研究)	○常盤木学園高H11・11 (授業公開) ○しらかし台小H11・11 (授業公開) ○女川四小H11・11 (授業公開) ○七郷中 H11・12・1 (授業公開)	○宮城県NIE研修会 ○小部会プロジェクト提案 ○地区研修会(蛇田小) ○地区研修会(金ヶ瀬中) ○中部会授業研究会(七郷中) ○小部会実践発表会(東長町小)	○県研究集録11号 ○みやぎNIEだより 18・19・20・21号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 12 年 度		小 128 中 60 高 31 他 13 計 232	○東長町小 ○大沢小 ○しらかし台小 ○蛇田小 ○山田中 ○秋保中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの 研究)	○しらかし台小 H12・11 (授業公開) ○秋保中 H12・11 (授業公開) ○東長町小 H12・11 (授業公開)	○小部会研修会 (大沢小) (データベース活用) ○宮城県NIE研修会 (八木山小) ○地区研修会 (しらかし台小) ○地区研修会 (蛇田小)	○県研究集録12号 ○みやぎNIEだより 22・23・24・25号
平成 13 年 度		小 128 中 61 高 34 他 16 計 239	○大沢小 ○蛇田小 ○月見ヶ丘小 ○秋保中 ○塩竈一中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高 ○仙台函南萩陵高	○小・中・高部会の 研究活動	○仙台向山高 H13・10 (授業公開) ○明成高 H13・12 (授業公開)	○宮城県NIE研修会 (明成高) ○地区研修会 (蛇田小) ○地区研修会 (塩竈一中)	○県研究集録13号 ○みやぎNIEだより 26・27・28・29号
平成 14 年 度		小 129 中 62 高 34 他 14 計 239	○月見ヶ丘小 ○逢隈小 ○小野小 ○塩竈一中 ○将監中 ○筆甫中 ○東北朝鮮学校 ○女川高 ○仙台函南萩陵高	○小・中・高部会の 研究活動 「NIEおしゃべり広場」 「インターネット活用」 中・高部会「公開講演会」 (H14・12・3)		○宮城県NIE研修会 (河北新報社) H14・11・7 ○地区研修会(大河原) ○地区研修会 (石巻古川)	○県研究集録14号 ○みやぎNIEだより 30・31・32・33号
平成 15 年 度		小 129 中 53 高 34 他 14 計 230	○小野小 ○逢隈小 ○嵯峨立小 ○将監中 ○筆甫中 ○五橋中 ○東北朝鮮学校 ○女川高 ○仙台白百合学 園中・高	○小・中・高部会の 研究活動		○宮城県NIE研究大会 (青葉体育館) H15・8・20 ○地区研修会 (逢隈小) ○地区研修会 (鳴瀬町中央公民館)	○県研究集録15号 ○みやぎNIEだより 34・35・36・37号
平成 16 年 度		小 124 中 57 高 31 他 11 計 223	○嵯峨立小 ○五橋中 ○仙台白百合学 ○越河小 園中・高 ○広瀬小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○五橋中 (授業公開) H16・11・2	○宮城県NIE研究大会 H16・11・2 (五橋中) ○地区研修会 (白石市中央公 民館) ○地区研修会 (田尻中)	○県研究集録16号 ○みやぎNIEだより 38・39・40・41号
平成 17 年 度		小 123 中 54 高 28 他 12 計 217	○越河小 ○広瀬小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高 ○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動 ○小学校部会授業 研究 H18・2・10 (鹿野小)	○仙台白百合学 園中・高 (授業公開) H17・11・9	○宮城県NIE研究大会 H17・11・9 (仙台白百合学園) ○地区研修会 (田尻中) ○地区研修会 (大河原中)	○県研究集録17号 ○みやぎNIEだより 42・43・44・45号
平成 18 年 度		小 125 中 53 高 28 他 11 計 217	○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○本吉・大谷小 ○東北朝鮮学校 ○南中山中 ○仙台・中田中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動 ○小学校部会授業 研究 H18・12・6 (原町小)	○南中山中 (授業公開) H18・11・9	○宮城県NIE研究大会 H18・11・9 (仙台市立南中山中) ○地区研修会 (大谷中) ○地区研修会 (大河原中)	○県研究集録18号 ○みやぎNIEだより 46・47・48・49号
平成 19 年 度		小 124 中 52 高 27 他 10 計 213	○本吉・大谷小 ○南中山中 ○仙台・中田中 ○白石南中 ○大沢中 ○唐桑中 ○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院 女子中・高	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○黒松小 (授業公開) H19・10・3	○宮城県NIE研究大会 H19・10・3 (仙台市立黒松小) ○地区研修会 (大谷中) ○地区研修会 (涌谷第一小)	○県研究集録19号 ○みやぎNIEだより 50・51・52・53号
平成 20 年 度		小 126 中 53 高 28 他 8 計 215	○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院中・高 ○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○大沢中 (奨励校)	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○大沢中学校 (授業公開) H20・11・17 ○涌谷第一小 (授業公開) H21・1・22	○宮城県NIE研究大会 H20・11・17 (仙台市立大沢中) ○地区研修会 (富谷成田中) ○地区研修会 (亘理図書館)	○県研究集録20号 ○みやぎNIEだより 54・55・56・57号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 21年度		小 140 中 54 高 23 他 10 計 227	○横山小 ○亙理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○涌谷一小 (奨励校)	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○榴岡小 (授業公開) H21.11.25 ○旭丘小 (授業公開) H21.12.10	○宮城県NIE研究大会 H21.11.25 (仙台市立榴岡小) ○地区研修会(石巻河南東中) ○小部会研究交流会(旭丘小)	○県研究集録21号 ○みやぎNIEだより 58・59・60・61号
平成 22年度	宮城大加盟 高校長協会 加盟	小 121 中 50 高 18 大 4 他 12 計 205	○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○横山小 ○仙台第一高 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	南小泉中 (授業公開) H22.11.11 蒲町小 (授業公開) H22.11.26	○宮城県NIE研究大会 H22.11.11 (仙台市若林区文化センター) ○地区研修会(塩釜第三小) ○小部会研究交流会(蒲町小)	○県研究集録22号 ○みやぎNIEだより 62・63・64・65・66号
平成 23年度	小学校国語 研究会加盟	小 120 中 50 高 17 大 4 他 14 計 205	○古川第三小 ○大河原小 ○塩竈第三小 ○高森中 ○仙台第一高 ○小牛田小 ○東宮城野小 ○台原中 ○八乙女中 ○石巻北高 ○東北学院 ○榴岡小 榴ヶ岡高 (奨励校) ○泉高	○小・中・高部会 研究活動	○榴岡小 (授業公開) H23.10.18 ○東宮城野小 (授業公開) H23.12.7 ○大河原小 (授業公開) H24.1.24 ○古川第三小 (授業公開) H24.2.23	○宮城県NIE研究大会 H23.12.7 (仙台市立東宮城野小) ○宮城県NIE地区研修会 H23.8.17 (河北新報社)	○県研究集録23号 ○みやぎNIEだより 67・68・69・70号
平成 24年度	宮城県中学 校国語研究 会加盟	小 114 中 51 高 16 大 4 他 15 計 200	○東宮城野小 ○小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院 ○石巻北高 榴ヶ岡高 ○泉高 ○北中山小 ○吉岡小 ○東郷小 ○古川東中 ○水産高 ○大河原小 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	○八乙女中 (授業公開) H24.11.9 ○小牛田小 (授業公開) H24.11.28 ○北六番丁小 (授業公開) H25.1.16	○宮城県NIE研究大会 H24.11.9 (仙台市立八乙女中) ○地区研修会(大和吉岡小) ○小部会研究交流会(北六小) ○公開実践発表会(協力校) (河北新報社)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H24.9.22 (河北新報社) ○県研究集録24号 ○みやぎNIEだより 71・72・73・74号
平成 25年度		小 111 中 46 高 17 大 5 他 12 計 191	○北中山小 ○吉岡小 ○東郷小 ○古川東中 ○宮城水産高 ○荒町小 ○古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ ○富沢中 学院英智小中 ○東北学院高 ○八乙女中(奨励校) ○小牛田小(奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	○八乙女中 (自主公開) H25.11.8 ○小牛田小 (自主公開) H25.11.14 ○東郷小 (自主公開) H26.2.13	○宮城県NIE研究大会 H25.11.22 (仙台市立北中山小) ○地区研修会(吉野作造記念館) ○小部会研究交流会(郡山小) ○公開実践発表会 H26.2.20 (河北新報社)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H25.9.21 (岩手県一関市) ○県研究集録25号 ○みやぎNIEだより 75・76・77・78号
平成 26年度		小 115 中 49 高 19 大 5 他 14 計 202	○荒町小 ○古川二小 ○岩沼小 ○富沢中 ○聖ウルスラ ○東北学院高 学院英智小中 ○松ヶ浜小 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○吉岡小(奨励校) ○東郷小(奨励校)	○小・中・高部会 研究活動 ※小学校部会: 5年国語科の 提案授業実践	○富沢中 (授業公開) H26.11.18	○宮城県NIE研究大会 H26.11.18 (仙台市立富沢中) ○地区研修会(七ヶ浜国際村) H26.8.18 ○小部会提案授業①(泉松陵小) ○小部会提案授業②(七北田小)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H26.9.20 ○実践報告集26号 ○みやぎNIEだより 79・80・81・82号 ○日本NIE学会(東北福祉大)
平成 27年度		小 106 中 46 高 18 大 5 他 11 計 186	○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王:宮中 ○多賀城高 ○仙台青陵中 ○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○東北学院高 ○宮城学院中 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 5年国語科の提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学 英語科授業実践 講演会の実施	○田子小 (授業公開) ○5年国語科提案授業の 公開(運営委員在籍校) ○仙台青陵中等教育学校の 実践発表会	○宮城県NIE研究大会 H27.12.2 (仙台市立田子小) ○地区研修会(塩釜第一小) ○小部会提案授業公開 ※14校で実施 ○高部会実践発表会	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H27.10.3 (北海道新聞社) ○実践報告集27号 ○みやぎNIEだより 83・84・85・86号
平成 28年度		小 98 中 41 高 20 大 5 他 6 計 170	○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○宮城学院中 ○船岡小 ○柴田小 ○気仙沼高 ○聖和学園高 ○仙台城南高	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 5年国語科の提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学(河北新報社)	○宮城学院中の実践報告 ○登米市立上沼小学校の 授業公開(5年) ○仙台城南高のICT公開 (NIEとの関連)	○宮城県NIE研究大会 H28.11.9 (宮城学院中) ○地区研修会(柴田小) ○七北田小提案授業 ○上沼小提案授業	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 (福島民報社) H28.9.24 ○実践報告集28号 ○みやぎNIEだより 87・88・89・90号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 29年 度		小 87 中 39 高 19 大 5 他 11 計 161	○七北田小 ○船岡小 ○宮城学院中 ○柴田小 ○気仙沼高 ○聖和学園高 ○仙台南高 ○八木山小 ○豊里小・中 ○仙台三桜高	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 (提供3658部) ・高校部会 講演会(河北新報社)	○仙台南 高等学校 (授業公開) ○仙台南高の ICT公開 (NIEとの関連)	○宮城県NIE研究大会 H29.11.8 (仙台南高等学校) ○地区研修会(豊里小・中)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H29.9.30 (山形新聞社) ○実践報告集29号 ○みやぎNIEだより 91・92・93・94号
平成 30年 度		小 87 中 39 高 20 大 5 他 11 計 162	○柴田小 ○豊里小 ○気仙沼高 ○八木山小 ○仙台南高 ○館小 ○豊里中 ○戸倉小 ○仙台三桜高 ○宮城広瀬高 ○聖ウルスラ 学院英智小中	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 (提供3684部) ・高校部会 実践報告講演会(河北新報社)	○宮城県仙台 三桜高等学校 (授業公開)	○宮城県NIE研究大会 H30.11.7 (宮城県仙台三桜高等学校) ○地区研修会(戸倉小)	○実践報告集30号 ○みやぎNIEだより 95・96・97号
令和 元年度		小 76 中 36 高 25 大 5 他 13 計 162	○泉松陵小 ○戸倉小 ○長命ヶ丘小 ○館小 ○聖ウルスラ学附 ○岩出山中 英智小・中学校 ○宮城広瀬高 ○仙台三桜高 ○多賀城高 ○仙台南高 ○名取高	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 ・中学校部会 研修会(七郷中) ・高校部会 講演会・研修会	○県大会における実践発表 館小・岩出山中・広瀬高 ○パネルディスカッション ○講演会(東北大加齢医学 研究所) 瀧崎之教授 ○30周年記念座談会	○宮城県NIE研究大会(河北新報社) R1.12.20 ○地区研修会(岩出山中)	実践報告書31号(30周年記念号) ○みやぎNIEだより 98・99・100号
令和 2年度		小 69 中 34 高 26 大 5 他 10 計 144	○泉松陵小 ○湊小 ○長命ヶ丘小 ○松島第二小 ○岩出山中 ○東仙台小 ○名取高 ○角田中 ○泉高 ○多賀城高 ○仙台南高 ○名取高 ○宮城広瀬高 (独自校)	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 ・中学校部会 ・高校部会 県研究大会共催	○県研究大会 (オンラインによる) 児童・生徒による意見交換会 湊小・泉松陵小・岩出山中 仙台南高・宮城広瀬高 多賀城高・泉高	○宮城県NIE研究大会 R2.12.18 ○地区研修会(角田中) ○NIE研修会(泉松陵小)	○実践報告書第32号 ○宮城NIEだよりは廃止 ○コロナ感染拡大防止のため、第1回 NIE委員会は書面による審議。第2回NIE 委員会はオンラインでの開催。 ○全国大会(東京) オンライン開催
令和 3年度	アドバイザー 一部会新設	小 71 中 38 高 26 大 4 他 7 計 146	○湊小 ○大沢小 ○松島第二小 ○矢本東小 ○東仙台小 ○栗原西中 ○角田中 ○利府西中 ○泉高 ○仙台三高 ○岩出山中・仙台南高(独自認定校)	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 ・中学校部会 ・高校部会「研修会」	○県研究大会 (オンラインによる) 児童・生徒による意見交換会 湊小・大沢小・矢本東小 角田中・利府西中・岩出山中 仙台南高・泉高	○宮城県NIE研究大会 R3.12.9 ○地区研修会(矢本東小) R3.12.17	○実践報告書第33号 ○コロナ感染拡大防止のため、第1回 NIE委員会は書面による審議。第2回NIE 委員会はオンラインでの開催。 ○全国大会(札幌) オンラインでの開催
令和 4年度	推進委員会 運営委員の 見直し	小 70 中 37 高 28 大 3 他 7 計 145	○大沢小 ○生田小 ○塩竈二小 ○女川小 ○矢本東小 ○利府西中 ○栗原西中 ○宮城学院中 ○一迫商業高 ○尚綱学院高 ○仙台三高 ○東仙台小・大谷地小(独自認定校)	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 ・中学校部会 ・高校部会「研修会」 ・アドバイザー一部会全国大会参加	○県研究大会 (オンラインによる) 児童・生徒による意見交換会 東仙台小・矢本東小・女川小 塩竈二小・大谷地小・栗原西中 利府西中・尚綱学院高	○全国大会宮崎大会 R4.8.4-5 ○宮城県NIE研究大会 R4.12.13 ○地区研修会(一迫商高) R4.12.26 ・栗原西中と一迫商高の実践発表 ○北海道・東北ブロックNIEアドバイ ザー・NIE推進協議会事務局長会議 R4.9.17	○実践報告書第34号 ○第1回NIE委員会は3年ぶり対面式での開催 ○推進委員会総会は人数制限をしながらの 開催だったが、3年ぶりに部会を開くことが できた。 ○全国大会(宮崎)は対面式の開催で、本県 から14名が参加した。

Ⅸ 編集後記

灯 火

コロナに翻弄されて3年目。「3年ぶり」のイベント開催など一部日常生活に戻りつつある。本年度も実践指定校では、研究推進にあたって様々なお苦勞があったことだろうと思う。その中で、たいへん実りある研究がなされたことに、各校の先生方のご尽力に感謝申しあげたい。

小学校・中学校、高等学校へと校種が違ふことにより、児童・生徒の発達段階に応じた研究が大いに参考になる収録である。小学校で新聞に親しみ世界的な課題に気付き、中学校では、新聞を活用し、高等学校では探究し「自分のことば」で発信する。一連の研究の流れがあうんの呼吸のように進んでいくことに感銘を受ける。

多くの実践校では、昨年度同様 ICT の活用やSDGs と関係づけての研究が行われていた。SDGs と新聞の活用は非常に相性が良いと思う。また、一人一台の端末の利用は、今後の研究実践からは外せないものになろう。

3年ぶりに対面で開催された全国大会宮崎大会では、「アナログとデジタルの融合」が話題になったそうだ。DX 推進が叫ばれ、学校現場では一人一台の chromebook が渡され GIGA スクール構想が進む。デジタルは便利だ。ネットの利用は生活を便利にした。しかし、アナログには、アナログの良さがある。紙の新聞にしかできないことがある。新聞をめくる時の紙の手触り、かすかに香るインクの匂い、五感で感じることができるアナログのよさ。目次のページの小学生の新聞を読む写真が忘れていた初めて新聞を読んだ頃の「大人になったようなわくわくした気分」を思い出させてくれた。

答えが一つではない世界を生きていくことになろうであろう児童・生徒が、アナログとデジタルの融合された世界をこれから築いていくことだろう。デジタルネイティブである児童・生徒は、教師が考えている以上に軽々とデジタルとアナログを融合させていくのではないだろうか。

この収録が、先生方へ多くの示唆を与え、研究の道筋を示していく灯火になってほしいと思う。ぜひ身近に置いて、「未来につながる」「自分のことば」で発信できる児童・生徒の育成の一助になれば幸いである。

仙台市立広瀬中学校 進藤 千枝

<編集委員>

委員長 進藤 千枝 (仙台市立広瀬中学校再任用教諭)
委員 三輪 一騎 (仙台市立東仙台小学校教諭)
藤坂 雄一 (石巻市立大谷地小学校教諭)
丸山 仁 (宮城学院中学校教頭)
相澤 和男 (仙台市立柳生中学校主幹教諭)
木村 誠 (宮城県仙台南高等学校教諭)

<事務局>

宮城県 NIE 委員会副会長
安野 賢吾
(河北新報社編集局次長兼防災・教育室長)
事務局長 古里 直美
(河北新報社防災・教育室部長)
事務局 須藤 宣毅
(河北新報社防災・教育室部次長)
渡辺 ゆき
(河北新報社防災・教育室副部長)
末永 智弘
(河北新報社報道部兼防災・教育室主任)
越中谷 郁子
(河北新報社防災・教育室主任)
伊藤 純子
(河北新報社防災・教育室)
富澤智恵子
(河北新報社防災・教育室)

畠山 厚子
(宮城県 N I E 委員会コーディネーター)

N I E 実践報告書<第 34 号>

令和 5 年 2 月発行

編集 宮城県 N I E 推進委員会
発行 宮城県 N I E 委員会
事務局 宮城県 N I E 委員会事務局
仙台市青葉区五橋一丁目 2-28
(河北新報社内)
TEL. 022-211-1331
FAX. 022-211-1339
印刷 東北紙工株式会社
仙台市若林区中倉 1-13-1
TEL. 022-231-2141



Newspaper in Education